

泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅻ

泉南市文化財調査報告書 第二十九集

1996. 3

泉南市教育委員会

序 文

泉南地域は、大阪府南部に位置し、北西に大阪湾、南に和泉山脈という山海の幸とすばらしい自然環境を享受し、比較的温暖な気候にも恵まれ、悠久の時を過ごして参りました。

これらの恵まれた環境の中に育まれた人々は、太古の昔からこの地で生活を行ない、その結果、数多くの様々な時代の遺跡が残されることとなりました。

特に本市におきましては、紀伊国への重要な交通ルートの一つを有しただけでなく、大阪湾からは西日本、果ては朝鮮半島、中国大陸に至る交通の要衝とも言える位置をつくりあげてきました。

一方、平成6年9月4日には、現代技術の結晶とも言える関西国際空港が泉州沖に開港し、再び現代の交通の要衝として世界へ羽ばたこうとしています。

さらに、これに伴った様々な関連事業は、泉南市だけではなく、泉州一帯の人々の暮らしを大きく変えることとなりました。今後さらに、関西国際空港中心に、近隣市町村を含めた大いなる発展が期待されております。

しかしその反面、これまで残されておりました、この美しい自然環境や文化財が、これらの開発によって失われかねないという事態もおきつつあるということも事実であります。

今後は、より調和のとれた開発との共存を目指すことで、自然・文化にあふれた街を創造できるものと確信しております。

特に、今年度は、史跡公園である「海会寺跡広場」が完成し、平成7年7月より市民の方々の憩いの場として活用されております。また現在、この広場に向き合う形で、全国でもほとんど例を見ない史跡と一体となった埋蔵文化財センターの建設が行なわれております。

当市における試みは、まさに問題となりつつあります開発と文化財保護の共存という大きな問題解決の試金石になっていくものと期待しております。

最後になりましたが、調査にご協力、ご理解を頂きました地元地権者、近隣住民の皆様、並びに関係諸機関の方々に深く感謝の意を述べさせていただきますと共に、今後とも本市の文化財行政により一層のご協力、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

平成8年3月

泉南市教育委員会

教育長 赤 井 悟

例 言

1. 本書は、泉南市教育委員会が平成7年度国庫補助事業として計画し、社会教育課が担当・実施した泉南市遺跡群の緊急発掘調査事業の報告書である。
2. 調査は、泉南市教育委員会社会教育課、仮屋喜一郎・岡田直樹・石橋広和・岡一彦・城野博文・河田泰之を担当者として、平成7年4月1日着手し、平成8年3月31日終了した。
3. 調査及び整理の実施にあたっては、田上信一、土井憲代をはじめ荒川貴之、植田哲也、上野亜紀子、氏田英利、江尻美代子、小浦尚美、大多和恵、小野泉、亀田啓介、蒲生徹幸、河村公美子、木村啓之、熊田聖子、蔵田弘幸、高力佳子、芝野智津子、島津真理、下尻順子、真珠久美、杉野友美、高木謙次、高橋靖子、竹内伸一郎、谷川原竜乙、谷本典子、玉置由紀、寺田純子、土井明彦、時松恵里、徳田二美、徳永素子、豊島崇、中谷めぐみ、新納延紀、八羽康代、浜口浩美、早瀬昭二、廣岡隆憲、藤沢義則、藤野渉、藤原哲、古倉充、牧野由起子、松下隆、松本久実、松本真規子、真鍋紀美子、真鍋久美、三木将司、南憲和、向林智与、村上佳子、森本めぐみ、山下英俊、山田剛、山本剛央、養松敬子、横井佐絵子、横井佐和子、吉田朋子、若狭亜紀諸君らの協力を得た。
また、広瀬和雄、土井孝之、鈴木陽一、中岡勝、向井俊生、中沢道彦の諸氏からも有益な助言・協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。
4. 本書の執筆は、石橋・岡・城野・河田が行なった。執筆の分担は、目次に記した。なお、第2章の第2節の執筆分担は、1～3が岡、4が石橋である。編集は、石橋が中心となり行なったが、一部仮屋・岡田が補佐した。
5. 現地調査における写真撮影は各担当者が行ない、出土遺物の写真撮影は石橋が行なった。
6. 遺物実測は土井憲代、横井佐絵子、大多和恵、河村公美子が行ない、トレースは大多和が行なった。拓本は島津真理、向林智与、図版・挿図作成は主に石橋・城野が行なった。
7. 本調査にあたっては、写真・スライド等を作成した。広く利用されることを望むものである。

凡 例

1. 各調査区には、個別の番号をつけている。番号の基本構成は、「遺跡略称（記号）－年度－通し番号」である。遺跡の略称は、男里遺跡－ON、高田遺跡－KD、天神ノ森遺跡－TN、幡代遺跡－HT、岡中遺跡－OK、岡中西遺跡－OKW、仏性寺跡－BS、岡田遺跡－OKD、海会寺跡－KAI、下村遺跡－SM、兎田遺跡－USである。調査年度をあらわす場合、元号年度は西暦年度に読み替え、上位2桁を省略して表現した。なお本報告書では、報告文は遺跡毎に章だてしているため、基本的に各章中では遺跡名称を省略している。
2. 図中の方位は、各調査区位置図・地形図及び図版P.L.1～3では真北を、各調査区平面図では磁北をあらわしている。
3. 本文および図版中に示したレベル高は、すべてT.P.+(m)の数値を使用しているが、T.P.+は省略している。
4. 遺構名称はアルファベットと任意の数列の組合せで表している。アルファベットは、SB－掘立柱建物、SD－溝、SK－土坑、SX－性格不明遺構、Pit－柱穴をそれぞれ表す。遺構番号は、2桁を原則として、1桁の数字の場合は、その前に0を付している。また、調査区毎に、遺構の種類別に通し番号を付している。
5. 土層断面の一部および掘立柱建物等の柱列の断面・エレベーションの位置は、平面図中に指示線とアルファベットによって示され、その場所が一致する。
6. 遺物実測図版では、断面の表示を便宜上、須恵器－黒塗り、縄紋土器・弥生土器・土師器・陶磁器・土製品－白抜き、瓦器・瓦質土器－トーン、瓦（転用品を含む）・石器類－斜線のように塗り分けた。
7. 出土遺物の番号は、遺跡毎に土器、石器、瓦の区別無しに通し番号を付した。なお、遺物実測図版および挿図と写真図版では、遺物番号は統一している。また、同一写真図版内で複数の遺跡の遺物が存在する場合、番号の前に遺跡の略称を付している。

目 次

第1章 調査の経過	(石橋)	1
第2章 男里遺跡の調査		6
第1節 既往の調査	(河田)	6
第2節 95-1区の調査	(岡・石橋) ...	7
第3節 95-2区の調査	(石橋)	11
第4節 95-3区の調査	(石橋)	13
第5節 95-4区の調査	(河田)	14
第6節 95-5区の調査	(城野)	15
第7節 95-6区の調査	(石橋)	15
第8節 95-7区の調査	(河田)	16
第9節 95-8区の調査	(城野)	16
第10節 95-9区の調査	(岡)	17
第3章 高田遺跡の調査		19
第1節 既往の調査	(河田)	19
第2節 95-1区の調査	(城野)	19
第4章 天神ノ森遺跡の調査		21
第1節 既往の調査	(河田)	21
第2節 94-1区の調査	(城野)	21
第5章 幡代遺跡の調査		23
第1節 既往の調査	(河田)	23
第2節 95-1区の調査	(城野)	23
第3節 95-2区の調査	(石橋)	25
第4節 95-3区の調査	(城野)	25
第5節 94-6区の調査	(城野)	26
第6章 岡中遺跡の調査		29
第1節 既往の調査	(河田)	29
第2節 95-1区の調査	(岡)	29
第7章 下村遺跡の調査	(石橋)	32
第1節 既往の調査		32
第2節 95-1区の調査		32
第8章 兎田遺跡の調査		37
第1節 既往の調査	(河田)	37
第2節 95-1区の調査	(城野)	37
第3節 95-2区の調査	(城野)	38

第9章 まとめ	(石橋)	40
報告書抄録		巻末

挿 図 目 次

第1図	男里遺跡95-1・2区地形図	7
第2図	男里遺跡95-1区出土の敲石	11
第3図	男里遺跡95-1区出土の石器	11
第4図	男里遺跡95-2区出土の土器	13
第5図	男里遺跡95-3区地形図	14
第6図	男里遺跡95-4区地形図	14
第7図	男里遺跡95-5区地形図	15
第8図	男里遺跡95-6区地形図	16
第9図	男里遺跡95-7区地形図	16
第10図	男里遺跡95-8区地形図	17
第11図	男里遺跡95-9区調査区位置図	17
第12図	男里遺跡95-9区地形図	18
第13図	高田遺跡・天神ノ森遺跡調査区位置図	19
第14図	高田遺跡95-1区地形図	20
第15図	天神ノ森遺跡94-1区地形図	21
第16図	幡代遺跡調査区位置図	23
第17図	幡代遺跡95-1区・94-6区地形図	24
第18図	幡代遺跡95-2・3区地形図	25
第19図	岡中遺跡・岡中西遺跡調査区位置図	29
第20図	岡中遺跡95-1区地形図	30
第21図	岡中遺跡95-1区出土の土器	30
第22図	岡中遺跡95-1区出土の平瓦	31
第23図	下村遺跡調査区位置図	32
第24図	下村遺跡95-1区地形図	33
第25図	下村遺跡95-1区出土の土器	35
第26図	兎田遺跡調査区位置図	37
第27図	兎田遺跡95-1区地形図	37
第28図	兎田遺跡95-2区地形図	38
第29図	兎田遺跡95-2区出土の土器	39

表 目 次

第1表	平成7年度発掘および試掘調査届出一覧表	2
第2表	発掘調査一覧表	3
第3表	試掘調査一覧表	4
第4表	立会調査一覧表	5
第5表	口縁部突帯の分類	9
第6表	体部突帯の分類	10
第7表	突帯上の刻目の分類	10
第8表	文化財一覧表	45

図 版 目 次

PL.1	泉南地域の文化財
PL.2	泉南地域の地形分類
PL.3	男里遺跡調査区位置図
PL.4	仏性寺跡・岡田遺跡・海会寺跡調査区位置図
PL.5	男里遺跡95-1区調査区
PL.6	男里遺跡95-2区調査区
PL.7	男里遺跡・高田遺跡・天神ノ森遺跡調査区
PL.8	幡代遺跡・岡中遺跡・兎田遺跡調査区
PL.9	下村遺跡95-1区調査区
PL.10	男里遺跡95-1区出土の土器
PL.11	幡代遺跡94-6区出土の遺物①
PL.12	幡代遺跡94-6区出土の遺物②
PL.13	男里遺跡95-1区①
PL.14	男里遺跡95-1区②
PL.15	男里遺跡95-1区③
PL.16	男里遺跡95-2区①
PL.17	男里遺跡95-2区②
PL.18	男里遺跡95-2区③
PL.19	男里遺跡95-3区
PL.20	男里遺跡95-4・5・6区
PL.21	男里遺跡95-7・8・9区
PL.22	高田遺跡95-1区・天神ノ森遺跡94-1区
PL.23	幡代遺跡95-1・2・3区

- PL.24 幡代遺跡94-6区・岡中遺跡95-1区
- PL.25 下村遺跡95-1区①
- PL.26 下村遺跡95-1区②
- PL.27 兎田遺跡95-1・2区
- PL.28 男里遺跡95-1区出土の土器①
- PL.29 男里遺跡95-1区出土の土器②
- PL.30 男里遺跡95-1区・95-2区出土の遺物
- PL.31 幡代遺跡94-6区出土の遺物①
- PL.32 幡代遺跡94-6区出土の遺物②
- PL.33 岡中遺跡95-1区・下村遺跡95-1区・兎田遺跡95-2区出土の遺物
- PL.34 下村遺跡95-1区出土の土器

泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅲ

第1章 調査の経過

平成7年は、戦後50周年という日本人にとって節目ともいえる年となったのであるが、この前後、我々は、良きにつけ悪きにつけ、これまで経験したことのないような事件に次々と遭遇する結果となった。一つは、現代技術の結晶ともいえる関西国際空港の開港を眼前にできたことである。また、これに付随する形で、市民生活の整備・拡充による公共事業の増加は、まさに泉南市を始めとする泉州南部の発展を期待させると同時に、埋蔵文化財の調査件数と、近年特に顕著となった1件あたりの面積の増加を示している。

あと一つは、昨年1月17日の早朝、未曾有の被害をもたらした阪神・淡路大震災である。当市における直接の被害は比較的軽微であったものの、個人住宅等の他に一部、文化財への被害も報告される結果となった。そしてこの経験は、これまでほとんど語られることのなかった「安全な街づくり」という新たな課題を生むこととなった。今後様々な開発の質的变化により、埋蔵文化財調査にも影響を与えることが予想されるだろう。

この様な時代変化の中、今年度の本市においては第2表のとおり発掘調査が行なわれた。このうち本書の本文中において報告する調査は、17件である。報告される遺跡数は、7遺跡にのぼる。いずれも個人住宅建設等に伴う比較的小規模な調査であるものの、そこから得られた成果は、大きなものであるということは言うまでもない。以下、それぞれの遺跡の調査について経過を述べてみたい。

男里遺跡は、泉南市最大の遺跡で、最も古くから周知されてきた遺跡の一つである。今年度は、18件の調査が行なわれ、このうち9件の調査を報告している。これまで、相当数の調査が行なわれており、本遺跡は、地形的な立地によって、時代別の遺構・遺物の分布が大きく左右されることが分かっている。しかし、今年度の調査地は遺跡のほぼ全域に渡っているものの、遺跡のほぼ中心に位置する双子下池の北方、これまで男里川の旧河道が推定されていた地点で、これまでのデータの蓄積を覆す大きな結果を得た。

天神ノ森遺跡は、古くから周知されているにもかかわらず、遺跡の大半は神社地となっているためほとんどその様相は知られていない。しかし1、2年ごとにわずかながら調査が行なわれている。遺跡の中心からはやや離れるが、昨年度未報告分1件の調査を報告した。

高田遺跡も、ほとんどその性格は知られていない。今年度の報告は1件のみの調査であるが、大きな一歩といえるだろう。

幡代遺跡、岡中遺跡も男里遺跡と同様に男里川とその支流である金熊寺川の沖積作用によって形成された地形に立地している。幡代遺跡は前年度未報告分を含め4件、岡中遺跡は1件の調査を報告したが、今年度はいずれの遺跡とも、現在の集落内の近接した地域に集中する結果となった。

下村遺跡は、発見されて数年経過しているが、過去1件のみの調査しか行なわれていなかった。今年度は、遺跡の隣接地の試掘調査によって、これまでの下村遺跡の発掘調査はもとより、分布調査によっても全く知られていなかった弥生時代中期の遺構・遺物を確認するに至り、本遺跡の範囲拡大が行なわ

れた。

兎田遺跡は、ほぼ毎年、わずかながらも調査が行なわれてきたが、依然として全容は解明されていない。今年度は、2件の調査が行なわれた。特に今年度は、遺跡のほぼ中心部に当たる現在の兎田集落内に調査の手が及ぶことになり、遺跡の立地などの解明に大きな成果があった。また、もう1件は遺跡の南側に位置する「檜井丘陵」の麓の部分で、初めて調査が行なわれた。

第1表 平成7年度発掘及び試掘調査届出一覧表

平成8年2月29日現在

年 月	発 掘		試 掘		合 計	
	件 数	面 積(m ²)	件 数	面 積(m ²)	件 数	面 積(m ²)
7年・3	1	445.47	4	7,160.69	5	7,606.16
4	1	277.00	4	5,042.28	5	5,319.28
5	5	4,747.06	3	5,947.08	8	10,694.14
6	6	12,651.85	3	3,069.84	9	15,721.69
7	1	1,485.08	1	2,113.45	2	3,598.53
8	2	264.74	3	25,211.97	5	25,476.71
9	6	5,410.41	2	1,379.27	8	6,789.68
10	9	8,172.87	1	491.96	10	8,664.83
11	2	460.03	4	7,505.85	6	7,965.88
12	8	1,923.45	3	12,323.80	11	14,247.25
8年・1	4	1,169.83	5	2,937.14	9	4,106.97
2	7	1,041.85	4	6,560.24	11	7,602.09
合 計	52	38,049.64	37	79,743.57	89	117,793.21

第2表 発掘調査一覧表

平成8年2月29日現在

№	遺跡名	地区名	位 置	申 請 者	面積 (㎡)	用 途	調査年月	備 考
1	男里遺跡	95-1区	男里		1,544.93	店舗	7年11月	本書掲載
2	男里遺跡	95-2区	男里		1,846.43	プロパンガス 集配所	7年10月	同上
3	男里遺跡	95-3区	樽井		120.84	住宅新築	7年6月	同上
4	男里遺跡	95-4区	男里		445.47	住宅新築	7年4月	同上
5	男里遺跡	95-5区	男里		72.07	住宅新築	7年4月	同上
6	男里遺跡	95-6区	男里		291.04	住宅新築	7年12月	同上
7	男里遺跡	95-7区	男里		72.32	住宅新築	7年12月	同上
8	男里遺跡	95-8区	男里		338.34	住宅新築	7年10月	同上
9	男里遺跡	95-9区	幡代		100.21	農業用倉庫	7年10月	同上
10	男里遺跡	95-10区	樽井		165.70	住宅新築	8年1月	現在整理中
11	男里遺跡	95-11区	樽井		232.00	住宅新築	8年1月	同上
12	男里遺跡	95-12区	樽井		110.02	住宅新築	8年1月	同上
13	男里遺跡	95-13区	樽井		198.36	住宅新築	8年1月	同上
14	男里遺跡	95-14区	男里		293.22	住宅新築	8年1月	同上
15	男里遺跡	95-15区	樽井		170.38	分譲住宅	8年1月	同上
16	男里遺跡	95-16区	樽井		227.45	分譲住宅	8年1月	同上
17	男里遺跡	95-17区	樽井		134.11	住宅新築	8年2月	同上
18	男里遺跡	95-18区	男里		480.00	堤体改修	7年12月 ～8年3月	現在継続中
19	高田遺跡	95-1区	男里		430.01	宅地造成	7年5月	本書掲載
20	天神ノ森遺跡	94-1区	男里		100.27	分譲住宅	7年2月	同上
21	戎畑遺跡	95-1区	樽井		20,760.00	土地区画整理	7年7月～	現在継続中
22	幡代遺跡	95-1区	幡代		322.84	住宅新築	7年10月	本書掲載
23	幡代遺跡	95-2区	幡代		131.91	住宅新築	7年8月	同上
24	幡代遺跡	95-3区	幡代		277.00	農業倉庫	7年4月	同上
25	幡代遺跡	94-6区	幡代		430.02	住宅新築	7年3月	本書掲載
26	岡中遺跡	95-1区	信達岡中		296.00	住宅新築	7年11月 ～12月	同上
27	岡中西遺跡	95-1区	信達岡中		387.71	住宅新築	8年2月	現在整理中
28	上代石塚遺跡	95-1区	信達牧野		3,882.57	大規模店舗	7年9月 ～11月	別書掲載
29	中小路南遺跡	95-1区	中小路		7,557.20	共同住宅	7年9月	同上
30	仏性寺跡	95-1区	信達市場		1,944.56	遊技場	7年5月	トレンチ2カ所設定したが遺構・遺物は確認されなかった。(P.L.4)
31	岡田遺跡	95-1区	岡田		2,828.00	道路新設	1次7年5月 2次7年12月 ～8年3月	現在継続中
32	岡田遺跡	95-1区	岡田		290.24	住宅新築	8年1月	現在整理中
33	海会寺跡	95-1区	信達大苗代		3,645.89	遊技場	7年12月	トレンチ2カ所設定したが遺構・遺物は確認されなかった。(P.L.4)
34	海会寺跡	95-2区	信達大苗代		414.28	水道管敷設	7年12月	別書掲載
35	下村遺跡	95-1区	新家		654.57	公園整備	7年6月	本書掲載
36	兎田遺跡	95-1区	兎田		611.35	住宅新築	7年4月	同上
37	兎田遺跡	95-2区	兎田		261.74	住宅新築	7年10月	同上

第3表 試掘調査一覧表

平成8年2月29日現在

Nr.	遺跡名	位 置	申 請 者	面積 (㎡)	用 途	調査年月日	備 考
1	範囲外	樽井		1,391.82	分譲住宅	7年3月2日	トレンチ4カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
2	範囲外	樽井		1,101.97	共同住宅	7年4月13日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
3	範囲外	男里		442.06	専用住宅 3戸	7年4月20日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
4	範囲外	樽井		1,301.78	分譲住宅	7年5月10日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
5	範囲外	樽井		2,892.84	宅地分譲地 開発造成	7年5月17日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
6	範囲外	新家		654.54	新家下村 公園整備	7年5月25日 ～27日	弥生時代から近世の遺構・遺物を確認し、発掘調査を行なう。(下村遺跡の範囲拡大)
7	範囲外	男里		1,651.42	分譲住宅	7年6月1日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
8	範囲外	信達市場		2,050.25	宅地造成	7年6月13日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
9	範囲外	信達市場		1,821.80	分譲住宅 9区 造成工事	7年6月22日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
10	範囲外	信達牧野		1,836.13	貸店舗新築	7年6月27日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
11	範囲外	信達市場		2,459.53	共同住宅 駐車場	7年7月13日	トレンチ3カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
12	範囲外	信達市場		2,113.45	事務所新築	7年7月17日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
13	範囲外	樽井		1,895.43	専用住宅 15戸	7年8月21日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
14	範囲外	樽井		896.89	ビル建設	7年8月23日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
15	範囲外	樽井		22,034.36	宅地造成	7年8月24日	トレンチ4カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
16	範囲外	新家		419.69	共同住宅	7年10月12日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
17	範囲外	樽井		875.99	分譲住宅	7年10月13日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
18	範囲外	岡田		1,787.11	研修所新築	7年11月17日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
19	範囲外	樽井		499.09	位置指定 道路工事	7年11月28日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
20	範囲外	信達市場		489.53	共同住宅	7年11月29日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
21	範囲外	信達牧野		8,810.00	倉庫建設	7年12月26日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
22	範囲外	樽井		3,663.46	分譲 マンション	8年1月8日	トレンチ3カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
23	範囲外	信達牧野		582.18	宗教施設 教会の増設	8年1月16日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
24	範囲外	新家		491.96	共同住宅	8年1月30日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
25	範囲外	樽井		498.53	位置指定 道路築造	8年1月31日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
26	範囲外	信達市場		425.00	位置指定 道路築造	8年2月5日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
27	範囲外	樽井		319.42	共同住宅	8年2月16日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
28	範囲外	男里		493.21	事務所新築	8年2月21日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。

第4表 立会調査一覧表

平成8年2月29日現在

No.	遺跡名	位 置	申 請 者	面積 (㎡)	用 途	調査年月日	備 考
1	根 来 街 道	信達六尾		1,000.00	道路	7年3月13日	遺構・遺物は確認されなかった。
2	牧 野 新 池	信達牧野		80.00	堤体工	7年4月4日	遺構・遺物は確認されなかった。
3	高田山古墳群	幡代		216.32	個人住宅	7年6月16日	遺構・遺物は確認されなかった。
4	中小路西遺跡	中小路		561.19	下水道	7年8月14日	遺構・遺物は確認されなかった。
5	男 里 遺 跡	男里		1,482.00	下水道	7年9月11日	遺構・遺物は確認されなかった。
6	仏 性 寺 跡	信達市場		3.00	ガス管理設	7年9月22日	遺構・遺物は確認されなかった。
7	戎 畑 遺 跡	男里		618.16	下水道	7年10月2日	遺構・遺物は確認されなかった。
8	男 里 遺 跡	男里		356.41	下水道	7年10月23日	遺構・遺物は確認されなかった。
9	本 田 池	樽井		10,000.00	センター 新築	7年11月13日	遺構・遺物は確認されなかった。
10	君 ケ 池	樽井		1,300.00	ため池改修	7年12月～ 8年1月	遺構・遺物は確認されなかった。
11	男 里 遺 跡	男里		1,485.08	下水道	7年12月4日	遺構・遺物は確認されなかった。
12	座頭池遺跡	岡田		1,100.00	堤体改修	8年1月16日	遺構・遺物は確認されなかった。
13	イヤカサ池	信達六尾		160.00	堤体改修	8年1月22日	遺構・遺物は確認されなかった。
14	真 宮 池	馬場		1,000.00	堤体改修	8年1月25日	遺構・遺物は確認されなかった。
15	芦 谷 池	信達市場		540.00	堤体改修	8年2月2日	遺構・遺物は確認されなかった。
16	男 里 遺 跡	男里		530.88	下水道	8年2月13日	遺構・遺物は確認されなかった。

第2章 男里遺跡の調査

第1節 既往の調査（P L. 1～3）

市域の西側の境界を示す男里川の右岸にあたり、双子池をほぼ中心とした東西1.3km、南北1.5kmの範囲に拡がり、行政区画では男里、馬場、幡代の一部にまたがる。遺跡の中央を旧河道がとおり、その東側は氾濫原、沖積段丘が、また西側は氾濫原、自然堤防が拡がる。当遺跡は、泉南市域でも調査が進んでいる遺跡の一つで、現在までの調査で、縄紋時代晩期から近世にまたがる遺構・遺物が見られる。以下にその概要を見ていくこととする。

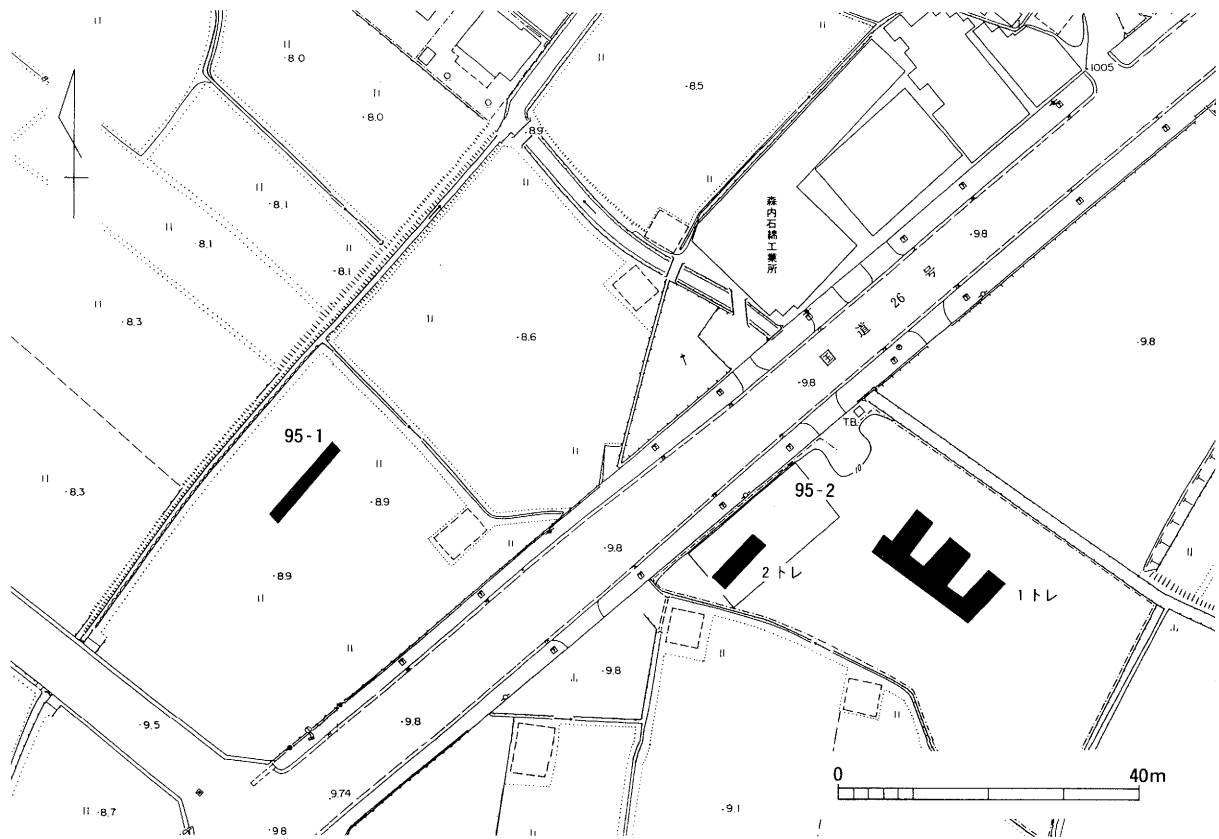
男里遺跡において縄紋時代晩期の遺物は、北西部の氾濫原及び谷低湿地上に見られ、1985年の調査^①で滋賀里Ⅲ・Ⅳ式が包含層より出土している。なお、周辺では三軒屋遺跡^②、船岡山遺跡B地点^③で滋賀里Ⅲ・Ⅳ式、船橋式、長原式にあたる土器が出土しており、そのうち船岡山遺跡B地点では畿内第Ⅰ様式新段階のものと共伴している。現在のところ男里遺跡では、弥生土器との共伴関係は確認されていない。

弥生時代前期における遺構は確認されていないものの、若干の遺物の出土を見せる。また、中期中葉の住居址群^④や木棺墓^⑤等の集落域が、遺跡の南東部にあたる旧河道右岸の沖積段丘上で確認されている。なお、この中期の集落は拠点集落として機能していたと考えられている。この集落域付近の調査は、府道新設に伴う調査が継続して行なわれていることから、今後は生産域など集落の構造に関する資料の増加が期待できる。後期及び庄内併行期の遺物^⑥はおもに遺跡の中央付近、双子池周辺で散発的に見られるものの明確な遺構は確認されていない。なお、周辺におけるこの時期の集落の実態は明らかにされておらず、南東約3kmの丘陵上の滑瀬遺跡^⑦で中期末から後期初頭の集落が確認されているだけである。

古墳時代にあたる遺構は、遺跡の北西部において6世紀後半の溝^⑧や小石室^⑨などが確認されているが、その実態はよくわかっていない。なお、過去の調査においても当該時期の遺物は散発的に見られるが、遺跡の北西部の旧河道左岸の自然堤防及び氾濫原において遺物が比較的多く見られることから、その周辺に集落域が存在する可能性が高い。

奈良時代の掘立柱建物が旧河道左岸において確認されている。なお、当該時期の遺物が比較的多く出土する地域が、古墳時代のそれとほぼ重なっていることが指摘できる。あえて推測するならば、古墳時代から奈良時代にかけての集落は、旧河道左岸に展開していた可能性が指摘できる。

遺跡の中央を南北に走る旧河道の両岸で、平安時代の掘立柱建物^⑩が確認されている。また、鎌倉時代の掘立柱建物が旧河道左岸で検出されている^⑪。このように、中世の遺構は比較的多く見られ、その分布範囲も広がっていく。また、これらの時期の遺物の出土は広範囲において見られ、その量も最も多いものである。これらのことから、この時期において居住域の増加及び展開が、前代に比べ急激なものだと推測される。鎌倉時代から室町時代にかけて、耕作痕などの耕地として利用されていたことを示す遺構が、広範囲に見られるようになる。以上のことから、この時期以降に耕地化が進んでいったといえる。また、周辺の遺跡においても同様の傾向が見られることから、この時期に広範囲かつ大規模な開発が行なわれたと考えられる。これ以降における集落の存在を示唆する遺構は検出されていないことから、集落域は現在も見られる旧村落付近に移っている可能性が高い。このような居住域と生産域の分布は中世以降に定着したのと考えられ、この景観は近年見られる宅地化等の開発が行なわれるまで続く。



第1図 男里遺跡95-1・2区地形図

第2節 95-1区の調査

1. 位置 (P.L. 3、第1図)

当調査区は、府道堺阪南線の北側に面しており、男里遺跡においては中央のやや北寄りに位置している。当調査区の南側には旧河道の痕跡と考えられる双子池が位置しており、数年前までの近接した地点における調査でも河川性の堆積や氾濫原が確認されていた。しかし、92年度の当調査区南西約50mにおける調査^⑬において、安定した暗黄褐色のシルト層の上面に古墳時代の溝を検出し、土師器の甕などの日常雑器がまとめて出土したことから、周辺に当該期の集落が存在した可能性が高くなった。

今回の調査区では予想外に縄紋晩期に属する土器が多量に出土するなどの大きな成果をあげることができた。

トレンチは1カ所を設定した。

2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 5、13~15)

層序は、第I層・耕作土(約20cm)、第II層・灰色混じり黄色土(約5cm)、第III層・明褐色土(約5cm)、第IV層・暗黄褐色土(約5cm)、第V層・暗黄褐色土(約5cm)、第VI層・灰色土(約10cm)、第VII層・明黄褐色土(約20cm)、第VIII層・褐色混じり黒褐色粘性土(約40cm)と続き、第IX層の暗褐色土の地山へと至る。各層はすべて水平堆積している。第VI層は中世、第VIII層は縄紋時代晩期~弥生時代の遺物包含層である。

3. 遺構 (P L. 5・13~15)

第Ⅷ層の上面(第1遺構面)と地山上面(第2遺構面)の2面で遺構を検出した。各遺構面の標高は第1遺構面が8.2m前後、第2遺構面が7.8m前後である。

第1遺構面では、溝2条(S D01、02)を検出した。S D01は、東から南方向に向って緩やかに弧を描き、幅約50cm、深さ約10cmを測る。断面は皿状を呈し、埋土は黒褐色粘質土である。埋土から土師器が少量出土しているが、いずれも細片で時期が判明するものはない。S D02は検出長約3m、最大幅30cmを測る。北東-南西方向に延び、深さは約3cmと浅い。埋土は暗灰色土で少量の土師器細片が出土している。

第2遺構面では、ピット7基(Pit01~07)を検出した。ピットの埋土はすべて黒褐色粘質土であるが、径が30cm前後のもの(Pit01、02、03、07)と10cm前後の小型のもの(Pit04、05、06)が認められる。また、Pit03からは縄紋晩期の土器(31)が出土しており、他のピットも当該期のものである可能性が高い。

4. 遺物 (P L. 10・28~30、第2・3図)

遺物は、第Ⅲ~Ⅶ層に相当する旧耕作土層や第Ⅷ層の黒褐色粘質土層、第1遺構面と第2遺構面の遺構などから出土している。このうち黒褐色粘質土層と第2遺構面の遺構からは、縄紋晩期の系譜を引く突帯紋土器が多く出土した。器種は、深鉢が大半と考えられるが、浅鉢が1点(52)だけ出土している。また、同じく黒褐色粘性土層からは、弥生土器と考えられる破片(53~55)も数点出土している。また石器類は、石鏃、石錐、敲石の他、サヌカイトのチップも多量に出土した。

まず、突帯紋土器の分類を行なってみたい^④。出土した突帯紋を持った土器は、すべて小片であり、口径復元できるものもほとんどなかった。また口縁部と体部のセットになった2条突帯のものは1点だけしか確認できていない。このため突帯の数による分類や胴部の屈曲による分類は行なうことができないため、突帯と口縁部の形態と、体部の突帯の形態はそれぞれ別個に分類するものである。

口縁部突帯は、次のおおむね、A~Dの4類型に分類可能である。

A：幅の狭い断面三角形を呈するもの。先端部分はやや丸みを帯びている。

B：Aと同様の幅を有し、断面全体が丸いカマボコ状を呈するもの。

C：幅は、Bと同様であるが、断面が平たいカマボコ状を呈するもの。

D：幅が広く、断面が扁平もしくは下方へやや垂れ下がっているもの。

次に、これらは、口縁部の形態と、突帯が施される位置によっても6つの類型に分類することができる。

I：ほぼまっすぐに立ち上る口縁部で、端部に突帯をめぐらせるもの。

II：口縁部は、ほぼまっすぐに立ち上がるが、端部よりやや下がった位置に突帯をめぐらせるもの。

III：わずかに外反する口縁部で、端部に突帯をめぐらせるもの。

IV：III類と同じくわずかに外反する口縁部で、端部よりやや下がった位置に突帯をめぐらせるもの。

V：大きく外反する口縁部で、端部に突帯をめぐらせるもの。

VI：V類と同じく大きく外反する口縁部で、端部よりやや下がった位置に突帯をめぐらせるもの。

これらI~VIの分類をA~Dの突帯の形態とあわせて、A-I類、B-I類等と組み合わせて分類す

ることができる。

この他に、突帯に施す刻目の有無と形態によっても分類することができるが、摩滅したものが多く、すべてを分類することはできないが、確認できた刻目は、O字、D字、小D字、V字がある。また、口縁端部の形態は、やや丸みを持ったものとやや尖ったものが存在し、面取りを行なったものはない。

さらに、胎土から角閃石、雲母などを多く含み褐色を呈する生駒西麓産系胎土（以下、「生駒系」と省略）のものと、和泉南部の縄紋土器や弥生土器に一般的に見られる在地系の胎土（以下、「在地系」と省略）のものとの2種類に分類できる。

黒褐色粘質土層及び第2遺構面から出土したすべての土器の破片数及び重量を計測した結果、総破片数は963片、2,377gとなり、生駒系のものは、破片数では355片（36.9%）、重量では1,019g（42.9%）となり、おおむね4割という高い混入率を示し、これまでの市域のいずれの調査においてもなかったものである。また、在地系としたものの中にも、ごくわずかながら和泉南部の胎土とは若干異なるものもあることが指摘できる。

突帯の形態と、位置と口縁部形態による分類の統計を、生駒系・在地系とにわけて第5表にまとめてみた。

突帯の位置と口縁部の形態	突帯の形態 ()は生駒系					合計
	A	B	C	D	X(不明)	
I	13(11)	2(0)	1(0)	2(1)		18(12)
II	1(1)			1(0)		2(1)
III	1(1)		1(0)	2(0)		4(1)
IV			3(3)			3(3)
V				1(1)		1(1)
VI					2(1)	2(1)
合計	15(13)	2(0)	5(3)	6(2)	2(1)	30(19)

第5表 口縁部突帯の分類

以下、この表に沿って、それぞれの類型について述べてみたい。なお、出土層位と遺構は、16・36がPit01、31がPit03で、その他は黒褐色粘質土層から出土したものである。

口縁部突帯の分類された出土数は、A類が圧倒的に多い。次にD、C類が続き、B類が最も少ない。

A類においては、A-I類（1～15）が最も多い。このうち生駒系のもの（1～9・12・13）に大半が集中していることが分かる。10と11は、在地系のものである。このほかの類型では、14がA-II類、15がA-III類で、いずれも生駒系である。

B類では、B-I類のみの確認となった。16・17は、いずれも在地系である。このうち、16は体部外面に斜め方向のケズリを有し、内面は横方向の丁寧なミガキを施している。精製土器の要素を残すもので、他のものとやや異なる。これは接合できなかったが、体部突帯の36と同一個体である。

C類では、C-I類（18）、C-III類（19）の2点が在地系の胎土で、C-IV類（20～22）の3点がいずれも生駒系の胎土である。このうち21と22は、刻目のない2本の突帯を有するものである。また、20に施された突帯は、粘土紐を貼り付けただけの非常に簡略的なものである。

D類は、確認された類型の数は、ほぼ均等で、突帯位置と口縁部形態は、ほぼまんべんなく確認されている。D-I類（23・24）のうち、24は生駒系、23は在地系であるが、23は口縁端部の先端がやや尖り、V字形の刻目を施している。D-II類（25）は、在地系である。D-III類（26・27）は、いずれも在地系で、26は、D-I類の23と同じく口縁端部に刻目を施している。D-V類（28）は、生駒系であるが、器壁が薄く、口縁端部が尖ったやや特異なものである。なお、V類は28のみである。

この他に、突帯部分のほとんどが欠損しているために形態の不明なX類（29・30）があるが、それらはいずれも口縁部が大きく外反するVI類に分類できる。29は生駒系、30は在地系である。VI類はこの2

点のみである。

次に体部の突帯について述べてみたい。体部の突帯は、口縁部の突帯と同じA～Dの分類を使用するが、A類においては断面三角形の先端がやや丸みを帯びているものが多い。そのためB類との差がさほど顕著に認められないものもある。また、C、D類においても同様にさほど大きな差は認められないものもあり、将来的には分類を変えなければならないものもあるだろう。これらも生駒系、在地系別に合計を第6表に分類した。

	生駒系	在地系	計
A	5	0	5
B	1	2	3
C	4	2	6
D	1	6	7
計	11	10	21

第6表 体部突帯の分類

A類(31～35)は、いずれも生駒系の胎土である。31は、Pit03から出土した最も残りの良いものである。肩部から口縁部に向かってほとんど屈曲することなく立ち上がっている。また、32は、やや器壁の厚い、突帯に刻目を持たないものである。

B類(36～38)は、最も少ない数の確認である。36は、口縁部で述べたように16と同一個体と考えられる。口縁部に向かっては全く屈曲を見せず、まっすぐに立ち上がる。体部外面には斜め方向のケズリが施され、内面はミガキである。このほか在地系のものは36・38、生駒系のものは37である。

C類(39～44)は、D類ともに最も多い数の確認である。39・40・43・44が生駒系、41・42が在地系である。

D類(45～51)は、在地系の胎土のものに特に多く確認された。細片が多く、体部の形態はつかみにくい。50は、肩部でやや屈曲を見せて立ち上がるものと考えられる。生駒系のものは51の1点だけである。

次に突帯上に施された刻目について見てみたい。第7表のごとく、各類型ごとに刻目の統計を示してみた。

これによると、欠損もしくは摩滅が著しく不明なものがあるが、D字または小D字が最も多いことが分かる。(D字-3・4・11・13・24・26・34・37～39・46～48・50)(小D字-6・19・31・41・45)これは、生駒系、在地系ともに同じ傾向であるといえる。V字は、1・7・15・17・28である。また、刻目を施さない突帯(3・8・14・20～22・32)は、生駒系だけに存在することが指摘できる。O字のものは、16・36の2点に限られる。

そのほかの土器について述べてみたい。以下は、すべて黒褐色粘質土層より出土している。

52は、唯一出土した浅鉢である。東北から中部地方に広く分布する浮線網状紋を持つと考え

		刻 目 の 形 態						合計
		V	0	D	小D	なし	不明	
突帯と口縁部の形態	A-I	2		4	2	2	3	13
	II					1		1
	III						1	1
	B-I	1	1					2
	C-I						1	1
	III				1			1
	IV					3		3
	D-I	1		1				2
	II						1	1
	III			1			1	2
V	1						1	
X-IV						2	2	
小計	5	1	6	3	6	9	30	
突帯の形態	A			1	1	1	2	5
	B			3				3
	C			2	2		2	6
	D		1	4	1		1	7
小計	0	1	10	4	1	6	21	
合計	5	2	16	7	7	14	51	

第7表 突帯上の刻目の分類

られるものである。口縁部外帯の下方にやや広い頸部無紋帯を有し、その下に眼鏡状付帯紋をあしらうが、浮線紋部分は欠損している。口縁端部は平坦をなし、その上端面には沈線紋が施される。外面は黒色を呈し磨研されるが、内面はナデ調整と考えられる。胎土は、在地系のものとの差異はない。

53～55の3点は、弥生土器と考えられるものである。54と55は、ヘラ描沈線を持つ破片である。55は、やや幅の狭い沈線で、その断面はV字型を呈する。54はやや丸みを帯びたもので、ハケ状の調整も併せて認められる。53は、ハケ調整が明瞭に施されるものである。いずれも甕と考えられ、胎土は在地系のものである。

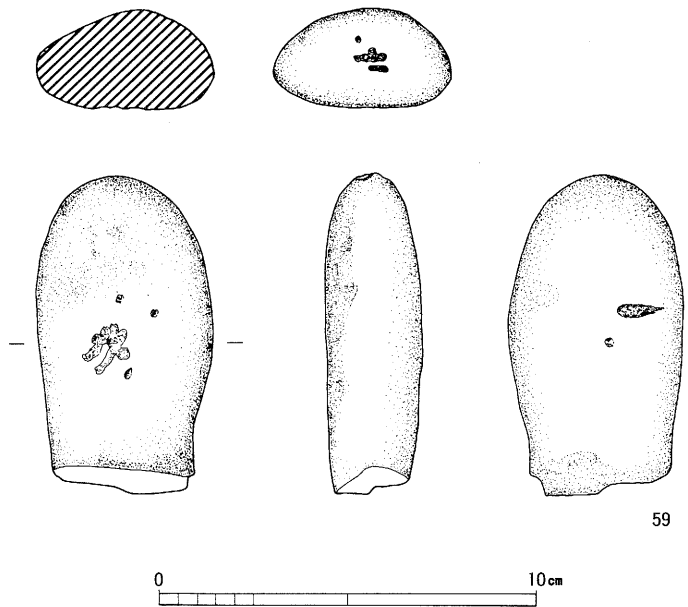
56～58は、底部である。すべて平底のものであり、丸底または尖底のものは確認できなかった。57は生駒系、56・58は在地系である。

59～61は、石器である。

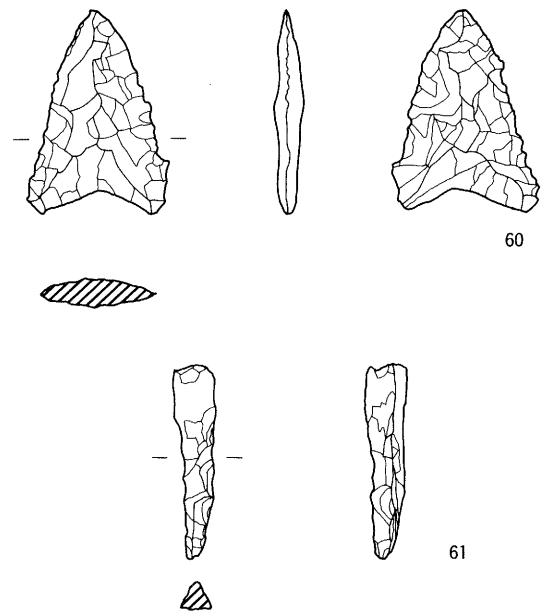
59は、敲石である。Pit02から出土している。扁平な瓢箪形を呈していたと考えられるが、約1/2は欠損している。先端と両平坦面に敲打痕が認められる。現長8.5cm、幅4.7cm、最大厚2.7cm、重量145gを測る。砂岩製である。

60は、石鏃である。凹基無茎式であり、基辺はやや鋭く凹む。側辺エッジには、細かな鋸歯状剝離が認められ、断面は扁平な菱形を呈する。全長2.7cm、幅1.9cm、最大厚0.4cm、重量1.49gを測る。

61は、石錐と考えられる。断面は三角形を呈する。現長2.6cm、幅4.0cm、重量0.71gを測る。いずれも石材はサヌカイト製で、黒褐色粘質土層から出土している。



第2図 男里遺跡95-1区出土の敲石



第3図 男里遺跡95-1区出土の石器(1:1)

第3節 95-2区の調査

1. 位置(PL.3、第1図)

調査区は、95-1区の南東約75mと近接しており、府道堺阪南線「男里北」交差点より北東へ約50mの府道に面した場所である。ここからさらに北東50mには、府道樽井男里線と交わる「双子池北」交差

点が存在する。府道樽井男里線は、(財)大阪府埋蔵文化財協会によって平成4年度から調査が行なわれており、調査地から北約300mの地点では、本調査で検出した掘立柱建物とほぼ同じ時期の集落が確認されている¹⁵。

地形的には、双子池の北にあたるため、男里川の旧河道が想定されていたが、2カ所設定したトレンチのうち、1カ所からは沖積段丘と考えられる面とその上層には、男里遺跡の東方で広く分布する安定した黒褐色粘質土層を確認した。

2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 6・16~18)

調査地は、もとは資材置場として利用されており、かなりの盛土が想定された。第1トレンチは、盛土が110~130cm確認された。これを除去すると旧滋味土が約20cmの厚さで認められる。これらの下層には、旧耕作土と考えられる灰黄色砂質シルト(約10cm)、暗灰黄色砂質シルト(約15cm)がそれぞれ確認されたが、いずれも既往の男里遺跡の調査で確認される旧耕作土と比較して、青みがかっており水分を多く含んでいる。これらの層からは、遺物は出土しなかった。さらに下層には、遺構面となる黒褐色粘性シルト層が存在する。なお、掘削当初に下層確認のためにこの黒褐色粘性シルト層を掘り抜いた部分があり、部分的に遺構面が失われてしまった所もある。これより下層は、トレンチの北側においては、約20cmの黒褐色粘質土層の下層に、黒色の粘性シルト層が確認された。また、トレンチ南側では、約40cmの黒褐色粘質土層の下層に、礫を多く含んだ褐色のシルト層が確認されている。一方、東側のトレンチの拡張区では、黒褐色粘性シルト層の下層約40cmには、黒灰色の粘性土を含んだ砂礫層が確認された。遺物は、黒褐色粘性シルト層の上面でわずかに土師器片などが認められるが、下層になると全く出土しなかった。

第2トレンチでは、約80cmの盛土と15cmの旧滋味土の下層には、灰色砂質シルト(10cm)、暗灰黄色砂質シルト(10cm)、灰褐色砂質シルト(10cm)が認められる。いずれも旧耕作土と考えられるが、第1トレンチ同様に水分を多く含み、青みががっている。これらの下層には、黄灰色の非常に粘性の強いシルト層が約20cm認められる。旧耕作土ではなく整地状の土層と考えられる。これを掘削すると黒褐色の粘性シルト層が確認されたが、第1トレンチと異なり、礫を非常に多く含んでいる。また、トレンチの西部では、この層は確認されずに黒色の礫層が露呈している。いずれの層からも遺構・遺物は確認することができなかった。

3. 遺構 (P L. 6・16~18)

遺構は、第1トレンチだけに確認された。S B01・02の2棟の掘立柱建物と、多くのピットを確認した。

S B01は、3間(5m)×3間(5.5m)の規模を持つ。柱間は、東西方向1.6~1.8m、南北方向1.6~2.0mを測るが、北東端の2つのピットは調査区外である。柱筋は、ほぼN-25°-Eを示す。建物の面積は、約27.5㎡である。

ピットの平面形は、すべて円形を呈し、そのほとんどで明確な柱痕を確認した。ピットの規模は、径18~35cm、深さ14~26cmであるが、先述のとおり、トレンチ東側部分では、黒褐色粘性シルト層を掘り抜いている部分があり、東側柱列の2個のピットは、平面では約10cm前後と非常に小さくなってしまっ

ているが、断面で確認するとその他のピットと同様に約35cmの規模を持っている。埋土は、柱痕部分は褐色の砂質シルトで炭を含むものもある。掘形は暗褐色シルトまたは極暗褐色粘性シルトである。遺物はPit01から62・63、Pit02から64などの黒色土器が出土している。

S B02は、S B01の東側に近接して位置する。3間（6m）×3間（5.5m）の規模を持ち、S B01よりやや大型である。柱間は、東西方向2.2m、南北方向1.7～2.0mを測るが、東側柱列と北側柱列の一部は、調査区外に伸びている。また南側柱列の一つのピットは失われ、北西端のピットは大きく削平されている。柱筋は、ほぼN-20°-Wを示し、建物の面積は調査区外の部分を推定すると、約33㎡である。

ピットの平面形は、円形を呈し、ほとんどで柱痕を確認した。規模は、径28～35cm、深さ15～30cmを測る。埋土は、S B01と同じ柱痕は褐色砂質シルト、掘形は暗褐色シルト、極暗褐色粘性シルトである。遺物は、土師器片がわずかに出土しているが図化できるものはなかった。

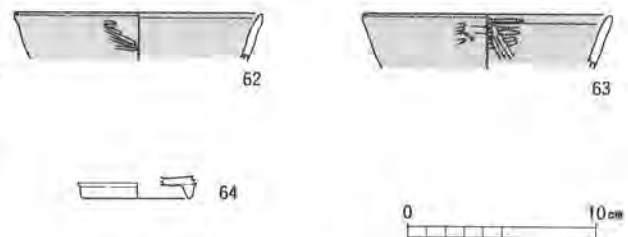
これらの建物は、約50cmほどの距離で近接しており同時併存の可能性はないが、いずれの建物が先行するかは不明である。このほかにいくつか明確な柱穴を確認したが、掘立柱建物は見いだすことができなかった。

4. 遺物（P.L.30、第4図）

遺物は、遺構の検出状況に対し非常に希薄なものであった。ピットからわずかに出土しているが、図化できたのは3点だけである。

62と63は、いずれも黒色土器碗の口縁部である。内外面とも黒色化しているB類であると考えられる。63は両面に、62は内面には確認できなかったが、外面に丁寧なヘラミガキが施される。いずれも焼成は良好で、堅緻である。いずれもPit01の柱根部分から出土している。

64は、黒色土器碗の高台部分である。「ハ」の字型に広がる高台で、強いヨコナデによって張りつけられる。内面だけが黒色化するA類である。Pit02の柱根部分から出土している。



第4図 男里遺跡95-2区出土の土器

第4節 95-3区の調査

1. 位置（P.L.3、第5図）

調査地は、男里遺跡の北東にあたり、平成6年度に（財）大阪府埋蔵文化財協会によって調査された府道金熊寺男里線より東側約100mの地点である。地形的には、男里川によって形成された沖積段丘上に立地するものと考えられる。当該地付近は、府道金熊寺男里線に伴う調査の他に小規模ながらかなりの数の調査が行なわれており、これらの結果から、旧耕作土層の下層には黒褐色の粘性土層が広く分布することがわかっている。トレンチは1カ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況（P L. 7・19）

灰色の現代耕作土を除去すると褐色砂質シルト（15cm）、暗褐色砂質シルト（10cm）、暗褐色粘性シルト（10cm）、暗黄褐色粘性シルト（10cm）など、旧耕作土系の土層が数層確認された後、黒褐色の粘性シルト層に至る。この付近で広く確認されている土層である。遺物は、旧耕作土系の土層より土師器片がわずかに出土している。

しかしこれまでの調査で確認した層と若干の異なる点をあげれば、褐色のブロック土をわずかに含んでおり、全体に軟らかく土の密度が低いことが指摘できるだろう。この層を約30cm掘り下げると黄褐色の粘性シルト層に至る。

遺構精査は、③層の暗灰褐色砂質シルト、⑥層の黒褐色粘性シルト層、⑨層の黄褐色粘性シルト層で行なったが、遺構が検出されたのは上層の暗灰褐色砂質シルト層だけである。

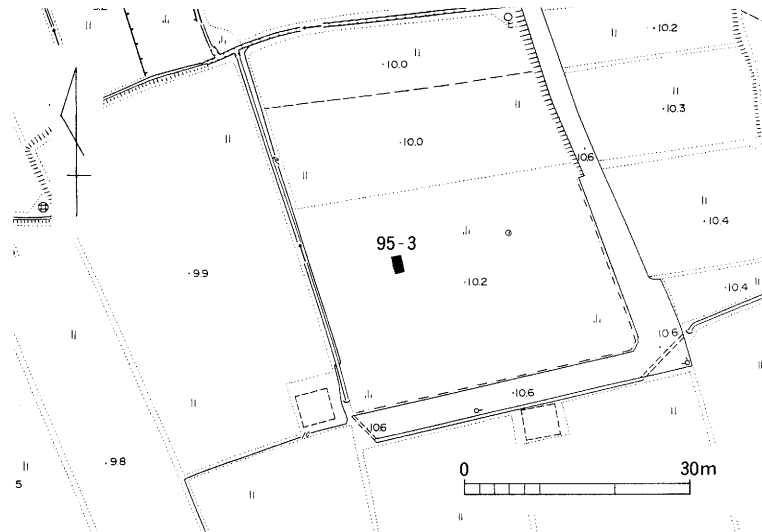
3. 遺構（P L. 7・19）

鋤溝と考えられる浅い溝（S D01）を1条確認した。方位は、ほぼ東西方向を示し、深さ約3cmを測る。西側は、トレンチ外へ続く。遺物は、土師器片がわずかに出土したが図化できるものはない。

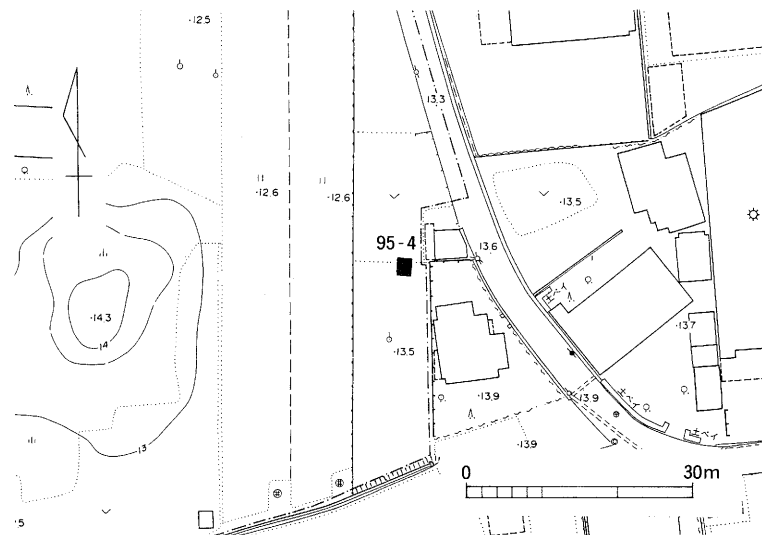
第5節 95-4区の調査

1. 位置（P L. 3、第6図）

調査区は、遺跡の北東部に位置しており、西側約50mには現在府道の新設工事が行なわれている。この工事に伴う発掘調査が（財）大阪府文化財調査研究センターによって行なわれており、今回の調査区に近接した地点において中世の耕作痕などが検出されている。なお地形分類では沖積段丘にあたる。トレンチは1カ所設定した。



第5図 男里遺跡95-3区地形図



第6図 男里遺跡95-4区地形図

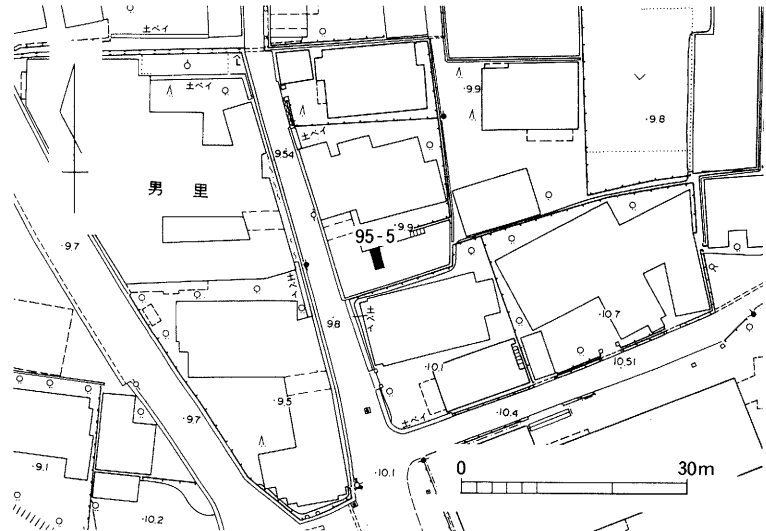
2. 層位と遺物の出土状況（PL. 7・20）

トレンチの層序は、現代耕土（約10cm）、盛土（約80cm）があり、暗灰色土（約15cm）、淡黒褐色土（約2～10cm）、礫混じり淡黄褐色土となっている。なお、淡黒褐色土及び礫混じり淡黄褐色土の上面で遺構検出を行なったが遺構は認められず、遺物も確認されなかった。なお、既往の調査を参考してみると、盛土直下の暗灰色土は中世耕作土、その直下の淡黒褐色土は「男里の黒」と呼ばれ、遺跡の中央を走る旧河道付近においてよく見られる土層、礫混じり淡黄褐色土は地山にあたると思われる。

第6節 95-5区の調査

1. 位置（PL. 3、第7図）

調査地は、遺跡の中央やや西寄りの地点で、市立雄信小学校から十数mほど北側にある。周辺の調査では弥生時代や古墳時代の遺物が検出されている^⑩。地形分類上は男里川の東岸に発達した自然堤防上または、氾濫原に立地しているものと考えられる。トレンチは1カ所設定した。



第7図 男里遺跡95-5区地形図

2. 層位と遺物の出土状況（PL. 7・20）

約20cmの表土を除去すると、トレンチの中央から北端にかけて大きな攪乱が認められた。攪乱は深さおよそ70cmで、最も深い所では地山下の青灰色礫層にまで達し、黒色土によって埋め戻されていた。

トレンチの南半では表土の下に明黄褐色混じり灰褐色土（約20cm）があり、灰褐色土（約15cm）、明黄褐色混じり灰褐色土（約5cm）、淡黄褐色土（約10cm）と続いている。淡黄褐色土の下には、地山である明黄褐色礫混じり土が広がっている。遺構は確認されなかった。また、遺物は淡黄褐色土などから近世から近代の陶磁器片が若干出土したが、いずれも細片であり、図化できなかった。

第7節 95-6区の調査

1. 位置（PL. 3、第8図）

調査地は、現在の男里集落の北東部分にあたる浄泉寺の南側に隣接した地点に位置する。周辺は非常に民家の建て込んだ部分で、近世以降続く男里集落のまさに中心部といえる場所である。

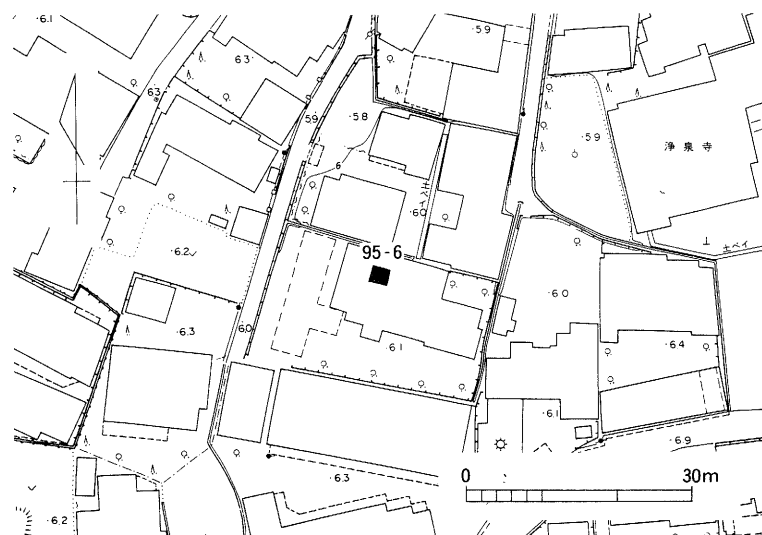
トレンチは1カ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況（PL. 7・20）

盛土層を約30cm除去すると、現在の建物以前の整地層と考えられる黄褐色の粗砂層が10cmにわたって見られる。その下層には、灰褐色砂質シルト層が約15cm確認される。旧耕作土と考えられ、中世の土師

器片などをわずかに含んでいる。この下層には、褐色の砂質シルトが約5cmほど見られ、地山と考えられる黄褐色粘性シルト層に至る。礫を少量含んでいるものの良好な安定したシルト層であることが指摘できる。この層の上面において検出を行なったが、遺構は確認されなかった。

下層確認のため、この黄褐色粘質シルト層を約40cm掘り抜くと、部分的には暗黄褐色粘性シルト層が検出されたが、大半は暗褐色の砂礫層が露呈した。遺物は、まったく出土しなかった。

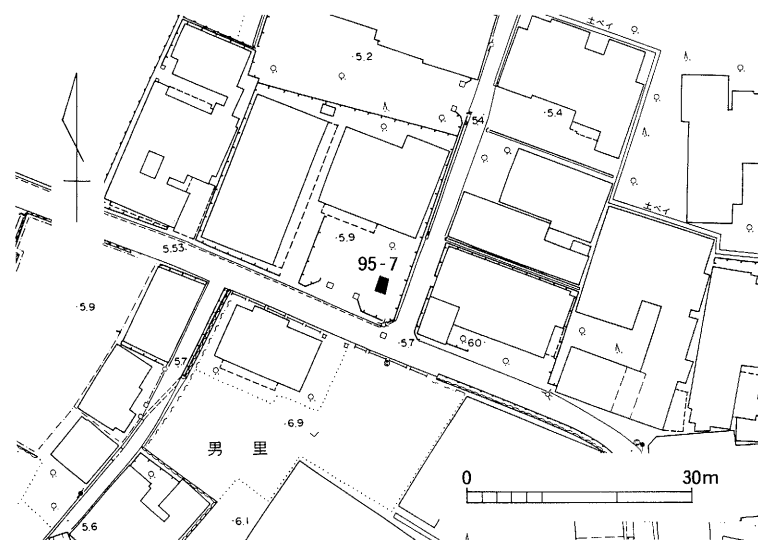


第8図 男里遺跡95-6区地形図

第8節 95-7区の調査

1. 位置 (P.L.3、第9図)

調査区は遺跡の北西部にあたり、地形分類では氾濫原及び旧河道にあたる。男里の旧村落は調査区はやや南東に位置し、付近は比較的新しい屋並が見られる。今回の調査区付近における過去の調査は、主に南東の旧村落内で行なわれており、中世の所産とされる川原石を詰められた土坑^⑩が検出されている。トレンチは1カ所設定した。



第9図 男里遺跡95-7区地形図

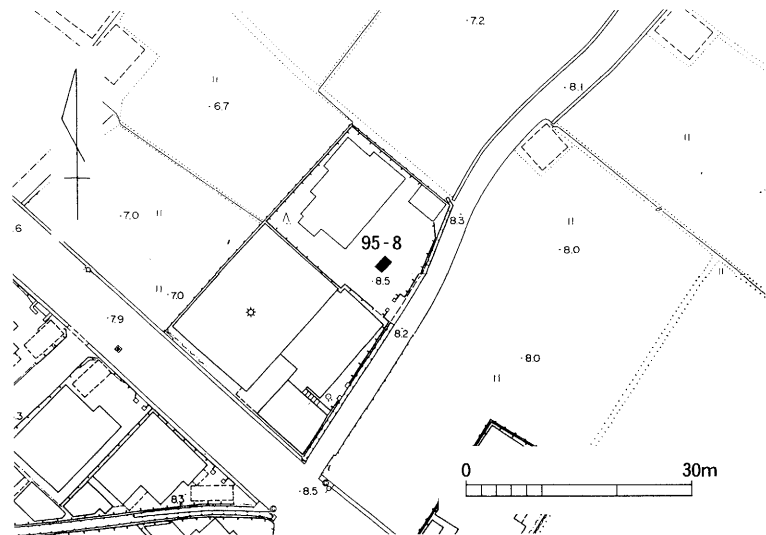
2. 層位と遺物の出土状況 (P.L.7・21)

層序は盛土(約60cm)、旧耕土(約30cm)を除去すると、それ以下は河川の氾濫によって形成されたと考えられる堆積が見られる。それらは淡黄褐色砂層(約10cm)、灰褐色砂混じり礫層(約10cm)、暗黄褐色砂混じり礫層(約30cm)、茶褐色砂層(約60cm)、灰色砂混じり礫層(約10cm)、黄褐色砂混じり礫層(約40cm)、黄褐色砂層(約60cm)、明橙色砂層(約20cm)、黄褐色砂層(約30cm以上)となっている。これらの堆積は東へ落ち込んでおり、河川の堆積過程を示すと考えられる。なお、遺物は確認されなかった。

第9節 95-8区の調査

1. 位置 (P.L. 3、第10図)

調査地は遺跡の北部にあり、府道界阪南線「男里北」交差点より約150m北上した地点である。また調査区から東へ約200mには府道樽井男里線が南北に走っている。地形分類上は男里川の旧河道に立地しているものと思われ、一昨年度に東隣りで行なわれた93-3区においても旧河道が検出されている^⑧。トレンチは1カ所設定した。



第10図 男里遺跡95-8区地形図

2. 層位と遺物の出土状況

(P.L. 7・21)

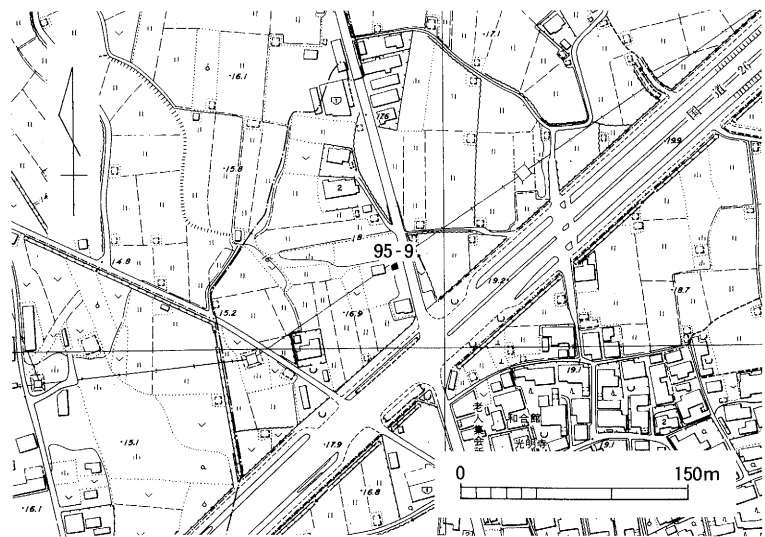
約1.5mの盛土を除去すると、灰白色粘土(約15cm)があり、続いて灰褐色シルト(約15cm)と褐色混じり灰白色粘土(約30cm)がそれぞれ水平堆積している。これらの2層は旧耕作土と捉えられるものである。旧耕作土の下には灰褐色シルト(約20cm)、灰褐色粘土が認められる。トレンチの東側では部分的に褐色砂礫(約20cm)が灰褐色粘土の上にある。これらの各層からは湧水が激しく、非常に軟弱であった。

以上、当調査区では遺構や遺物、また地山は検出されなかったが、層位の状況より一昨年度の調査区と同様、当調査区もまさに男里川の旧河道上に位置しているものと思われる。

第10節 95-9区の調査

1. 位置 (第11・12図)

当調査区は男里遺跡の南端部、国道26号線の「幡代」交差点の北方50mに位置する。地形分類上では沖積段丘の先端部付近に立地していることになる。これまでの周辺の調査では、調査地西側約50mの地点において弥生から古墳時代にかけて埋積した谷地形と、その後に営まれた集落の一部と考えられるピット群が検出されている^⑨。



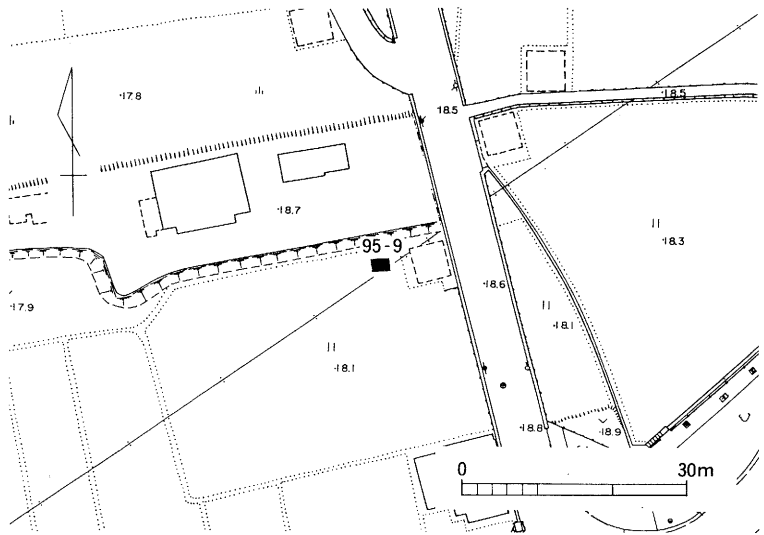
第11図 男里遺跡95-9区調査区位置図

トレンチは1カ所を設定した。

2. 層位と遺物の出土状況

(P L. 7・21)

層位は第Ⅰ層・耕作土(約30cm)、第Ⅱ層・淡黄褐色土(約5cm)、第Ⅲ層・黒褐色ブロック混じり褐色土(約10cm)、第Ⅳ層・淡褐色土(約10cm)、第Ⅴ層が褐色混じり暗黄褐色土の地山である。地山の標高は、17.7m前後である。第Ⅲ層から瓦器の細片が少量出土したが図化できるものはない。遺構は検出されなかった。



第12図 男里遺跡95-9区地形図

- 註 ① 泉南市教育委員会「男里遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅶ』(1990)
泉南市教育委員会「男里遺跡・Ⅱ」『泉南市文化財年報No.1』(1995)
- ② 泉佐野市教育委員会『三軒屋遺跡』(1972)
泉佐野市教育委員会『三軒屋遺跡-昭和54年度の調査』(1980)
泉佐野市教育委員会「三軒屋遺跡の調査」『泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要・Ⅴ』(1985)
- ③ 泉佐野市教育委員会『船岡山遺跡B地点発掘調査報告書』(1985)
- ④ 1993年度(財)大阪府埋蔵文化財協会、1995年度(財)大阪府文化財調査研究センターの調査による。
- ⑤ 泉南市史編纂委員会『泉南市史 通史編』(1986)
- ⑥ 泉南市教育委員会「男里遺跡・Ⅲ」『泉南市文化財年報No.1』(1995)
- ⑦ (財)大阪府埋蔵文化財協会『滑瀬遺跡』(1985)
- ⑧ 泉南市教育委員会「男里遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告Ⅹ』(1993)
- ⑨ ⑤と同じ。
- ⑩ 泉南市教育委員会『男里遺跡発掘調査報告書』(1978)
- ⑪ (財)大阪府埋蔵文化財協会『男里遺跡』(1993)
泉南市教育委員会『男里遺跡発掘調査報告書』(1978)
- ⑫ ⑧と同じ。
- ⑬ ⑧と同じ。
- ⑭ 突帯の分類については、以下の書を参考にした。
(財)大阪市文化財協会『長原遺跡発掘調査報告Ⅱ』(1982)
中村貞吉「和歌山県下の縄文晩期」『縄文から弥生へ』帝塚山考古学研究所(1984)
堺市教育委員会『鈴の宮Ⅲ』(1983)・「浜寺船尾西遺跡発掘調査報告」『堺市文化財調査報告第二十一集』(1985)
泉佐野市教育委員会『船岡山遺跡B地点発掘調査報告書』(1985)
神戸市教育委員会『上沢遺跡発掘調査報告書』(1995)
- ⑮ ⑪と同じ。
- ⑯ 泉南市教育委員会「男里遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅲ』(1986)
- ⑰ 泉南市教育委員会「男里遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅴ』(1988)
- ⑱ 泉南市教育委員会「男里遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅺ』(1994)
- ⑲ 泉南市教育委員会「男里遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅸ』(1992)

第3章 高田遺跡の調査

第1節 既往の調査（P.L.1・2、第13図）

当遺跡は平成3年度の分布調査によって発見されたもので、男里川河口より約1km上流の右岸に位置する。地形分類を見てみると、遺跡の中央を旧河道が南北にはしり、その東側は氾濫原が、西側は氾濫原、自然堤防が続いている。過去における調査は数例であり、また遺構及び遺物はほとんど確認されていない。付近にはキレト遺跡、男里北遺跡、男里遺跡等があり、遺跡が密集している地域ではあるものの、男里遺跡以外は過去における調査も少なく、その様相は不明な点が多い。なお、男里遺跡の北部の過去における調査は、基本的には男里川の氾濫原にあたる地域であることから、遺構・遺物の密度は少ないようである。このように近年発見され、また調査も数例であるため不明な点が多いが、以下にその概要を見ていくこととする。

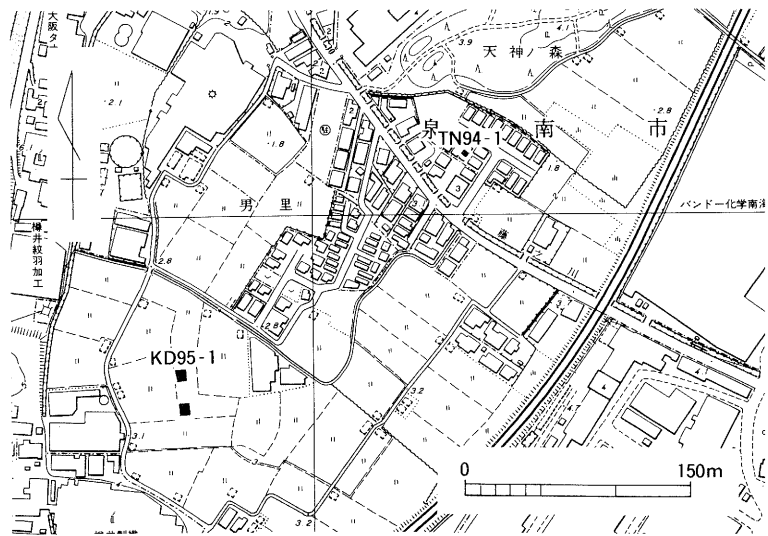
平成3年度の試掘調査では遺構は確認されなかったものの、弥生時代から中世にかけての遺物が確認されている。また、平成4年度の調査では、遺構は検出されなかったものの、弥生時代から奈良時代までの遺物包含層が見られた。遺跡の南西部の調査では、耕作痕及びピットが検出されており、上層の遺物から中世のものと考えられる^①。また、その下層では遺構は見られなかったものの、弥生時代から古墳時代にかけての遺物が少量出土している。

以上、数少ない調査からではあるが、高田遺跡の変遷を見ていくと以下ようになる。当遺跡において遺物が見られるようになるのは弥生時代以降である。明確な遺構は確認されておらず、包含層も河川の氾濫による堆積を呈することから、比較的不安定なものだったと考えられる。この不安定な状況は一定期間続くようであるが、中世のものと考えられる耕作痕等の遺構が見られることから、少なくとも中世のある時期には周辺の地形が安定したものと考えられる。今後の調査において、氾濫原がその大部分を占めていた時期における集落等の遺構の有無、地形が安定化する明確な時期、中世以降における本格的な土地利用の変遷などの究明が課題とされる。

第2節 95-1区の調査

1. 位置（第13・14図）

調査地は遺跡の西端部にあり、92-1調査区と南接している地点である。92-1区の調査では中世の耕作痕が検出され、遺構面の下の砂礫層より弥生土器や古代の須恵器などが出土している^②。地形分類上は男里川の旧河道ないしは氾濫原上に位置しているものと考えられる。トレンチは2カ所設定した。



第13図 高田遺跡・天神ノ森遺跡調査区位置図

2. 層位と遺物の出土状況

(P L. 7・22)

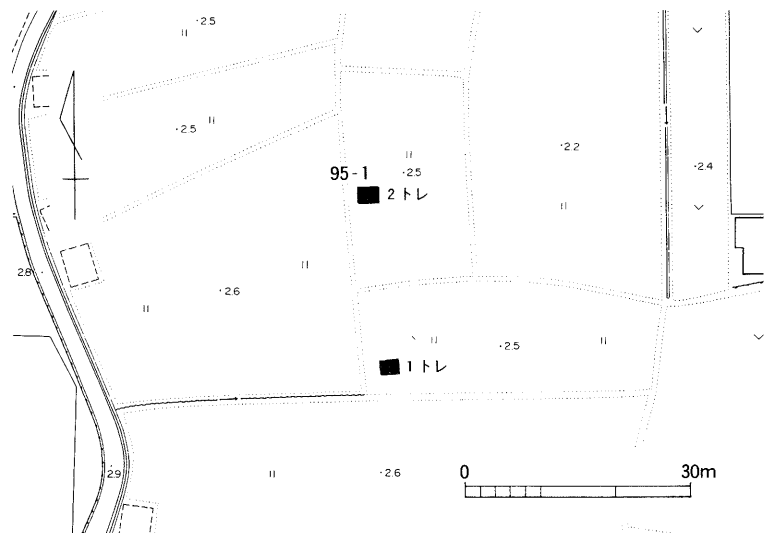
調査地は耕作地として供されており、両トレンチともに耕作土とそれに伴う床土層が確認される。南側の第1トレンチでは床土層の下に灰黄褐色土(約10cm)、マンガング粒を含む黄灰褐色土(約10cm)、粘性の強い明黄灰褐色土(約10cm)がそれぞれ水平堆積している。明黄灰褐色土の下には、灰褐色砂礫が広がる。この灰褐色砂礫層からは湧水が非常に激しかった。

各層について精査を行なったが、明確な遺構は検出されなかった。

第2トレンチでも床土層以下、明黄灰褐色土までの層位は共通している。黄灰褐色土の下には基本的に黄灰褐色粘土(約20cm)が認められるが、トレンチの北端部では明黄灰褐色土と灰褐色シルトが部分的に堆積している。黄灰褐色粘土に続いて細い帯状に赤褐色砂礫があり、灰褐色砂礫(約5cm)、灰褐色砂となる。第1トレンチと同様に赤褐色砂礫層以下からの湧水が非常に激しかった。また遺構、遺物ともに検出されなかった。

以上、今回の調査では、層位はほぼ共通するものの92-1区で検出されたような耕作痕は検出されなかった。トレンチの規模にもよるが、当地区における耕作域の拡がりを知る一助となるであろう。

また両トレンチ共に下位に砂礫層が確認され、また砂礫層より湧水が非常に激しかったことで、当調査区が男里川の旧河道上に位置していることがあらためて確認された。



第14図 高田遺跡95-1区地形図

註 ① 泉南市教育委員会「高田遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X』(1993)

② ①と同じ。

第4章 天神ノ森遺跡の調査

第1節 既往の調査（P L. 1・2、第13図）

当遺跡は、昭和初期の災害により倒れた樹木の根元付近の砂層より、6世紀代の須恵器の甕が発見されたことがその端緒である^①。男里川の河口から約1km上流の右岸に位置し、地形分類では洪積段丘低位面にあたる。なお、周囲には旧河道とそれに伴う氾濫原が広がっている。現在の地形を見てみると、遺跡の範囲にあたる部分が台地状に一段高くなっており、周囲には低地が広がる。この台地状の部分は、現在神社地となっており、その周囲の低地には宅地が広がっている。

周囲には戎畑遺跡、キレト遺跡、高田遺跡などが見られるが、旧河道及び氾濫原に位置するという地理的環境のためか、これらの遺跡において明確な遺物及び遺構の密度は現在のところ比較的低く、中世以降の耕作痕等の遺構や中世包含層が確認されている程度である。なお、それより下層は河川の氾濫による堆積を呈する。このことから、中世のある時期までは不安定な地域であったが、その後地理的環境が安定し耕作地として利用されるに至ったといえる。なお、今年度実施された戎畑遺跡における試掘調査において中世にあたる多数のピットなどを伴う遺構面が確認されている。このことから、当該時期の大規模な集落の存在が予測されており、今後の調査が期待される。

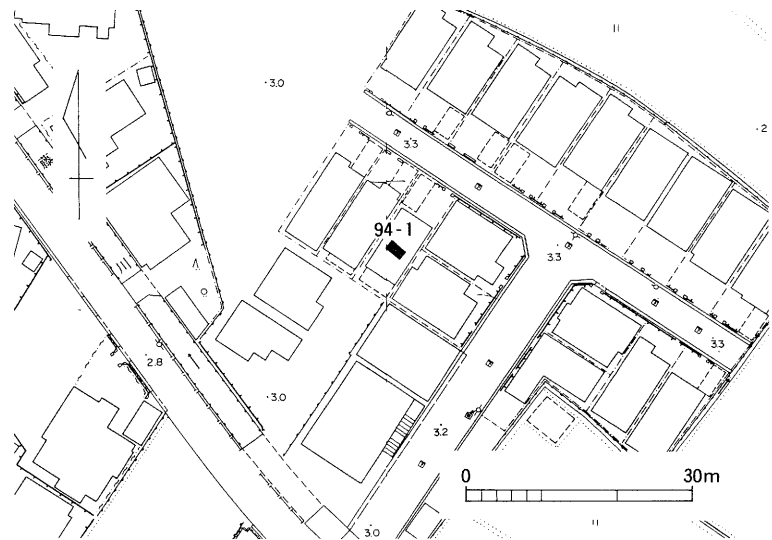
さて、当遺跡における過去数例の調査では、明確な遺構及び遺物は確認されておらず、その層序を見てみると、表土以下はシルト、礫層と続き、現在のところ明確な包含層は確認されていない。

現在のところ、当遺跡は地理的には比較的安定した立地ではあるが、周囲には不安定な地形が広がっているためか遺構及び遺物の検出はほとんど皆無である。今後の調査及び実態把握が課題とされる。

第2節 94-1区の調査

1. 位置（第13・15図）

調査地は、遺跡の南西部に位置する。周辺は既に宅地化されており、現在の景観から得られる情報は限られている。当遺跡では調査例の少なさもさることながら、顕著な遺構や遺物は検出されておらず、あまりにも不明な点が多い。地形分類上は沖積段丘縁辺の氾濫原上に位置している。トレンチは1カ所設定した。



第15図 天神ノ森遺跡94-1区地形図

2. 層位と遺物の出土状況（P L. 7・22）

調査地には、先建物に伴う盛土が敷地全体に施されている。盛土は60cmほどの厚さで、盛土を除去すると明黄褐色粘土と青灰色シルトが不規則な互層となっており、整地の際に攪乱を受けたものと思われる。

る。この層が約40cm続いたのちに、きめの細かい青灰色シルトが拡がっている。この青灰色シルトは唯一、プライマリーな状態が看取されるが、中に非常に多くの水分を含んでおり、多量の湧水とあいまってしばらくするとヘドロのような状態になった。

青灰色シルトの上面で精査を行なったが、遺構は検出されなかった。また遺物も出土しなかった。

以上、当調査区は既往の調査結果と同様、沖積段丘縁辺の氾濫原上に位置していることがあらためて確認された。現在も非常に多くの水分を含んでいることから、湿地帯のようであったと考えられる。

註 ① 泉南市史編纂委員会『泉南市史 通史編』(1986)

第5章 幡代遺跡の調査

第1節 既往の調査（P L. 1・2、第16図）

金熊寺川右岸に位置し、地形分類では沖積段丘にあたる。周辺には現在でも条里制地割を残す部分があり、坪名が小字化している部分が見られる^①。なお、ここ幡代遺跡周辺は、日根郡信達荘にあたり14世紀代には藤原五摂家のうちの一つ、近衛家の所領であったことがわかっている^②。

幡代遺跡は市内において比較的調査のすすんでいる遺跡の一つで、過去に多くの調査が実施されている。これまでの調査で得られた資料によ

ると、弥生時代の遺物が若干認められるが、量的には少なく当遺跡において活動が活発になるのは、中世以降のようである。

過去の調査では平安時代後期、室町時代、江戸時代の遺構及び遺物が顕著に見られ、また瓦の出土などから中世寺院の存在が推定されている。このように、現在のところ幡代遺跡は、中世以降その盛期をむかえたものといえる。以下においてその具体例を見ていくこととする。

遺跡のほぼ中央、現在の集落の東端部分において、鎌倉時代の掘立柱建物や耕作痕などの遺構が確認された。これらは現存する旧村落とほぼ一致することが確認された。このことから少なくとも鎌倉時代以降には現在の景観が形成されはじめたものと考えられる。

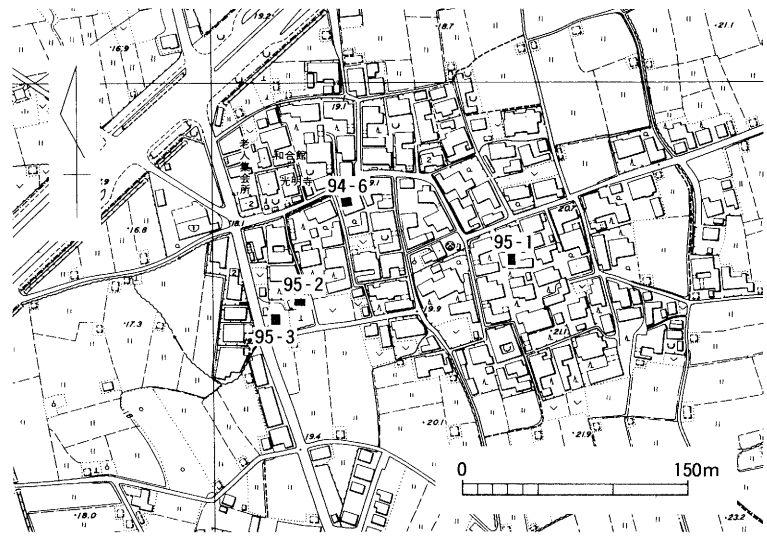
現存する旧村落の開始時期が鎌倉時代以降であることと、その立地に変化がないことは、集落の東端の調査においても同様のことが確認された。また、この調査では江戸時代後期の所産とされる陶磁器、瓦の他に、製糖に用いられたと考えられる遺物などが多数出土している。これらの遺物は、当時の日常生活、生業、流通等を考えるうえで貴重なものといえる。

このように、今後の調査において、中・近世における農村の動向及びその実態に関する資料のさらなる増加が期待される場所である。

第2節 95-1区の調査

1. 位置（第16・17図）

調査地は現在の幡代集落の中央やや東寄りに位置している。周辺では近世に属する遺構や遺物が濃厚に分布することが確認されている。地形分類上は沖積段丘面上に位置していると思われる。



第16図 幡代遺跡調査区位置図



第17図 幡代遺跡95-1区・94-6区地形図

トレンチは、1カ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 8・23)

調査地には全体に盛土が認められ、特にトレンチの南側では約40cmの厚みがある。盛土には多くの近世から近代の瓦片が含まれていた。盛土を除去すると地山である淡黄褐色粘土が現われる。地山の上面で遺構が検出された。

3. 遺構 (P.L. 8・23)

検出された遺構は、土坑が2基である。トレンチの北端から中央にかけて検出された。北からS K01・S K02と呼称する。S K01はその北辺と東辺が調査区外へと伸びるため全形は捉えられないが、南北に80cm以上、東西には90cm以上を測る。わりと大きな不整形の土坑であろうか。断面形状は浅い皿状で、深さはトレンチの北東隅で約20cmである。埋土は2層あり、ほとんどが暗黒灰色粘土であるが、土坑の底部に少しだけ淡灰白色粘土が認められる。暗黒灰色粘土から近世から近代の遺物が出土した。

S K02もまた東西の端が調査区外に伸びているため全体の規模は解らないが、南北に約120cm、東西に110cm以上を測り、平面形状は東西に長く伸びる楕円形であると思われる。また断面形状は口の開いたU字形をしており、最深部で約35cmの深さを測る。埋土は2層に分層され、上部が淡黒灰色粘土であり、下部では暗灰褐色土となる。埋土から瓦類を中心とする遺物が出土した。

両土坑ともに出土した遺物は瓦類がほとんどで、またその出土状況から、家屋解体に伴って設けられ

た廃棄用途の土坑と考えられる。

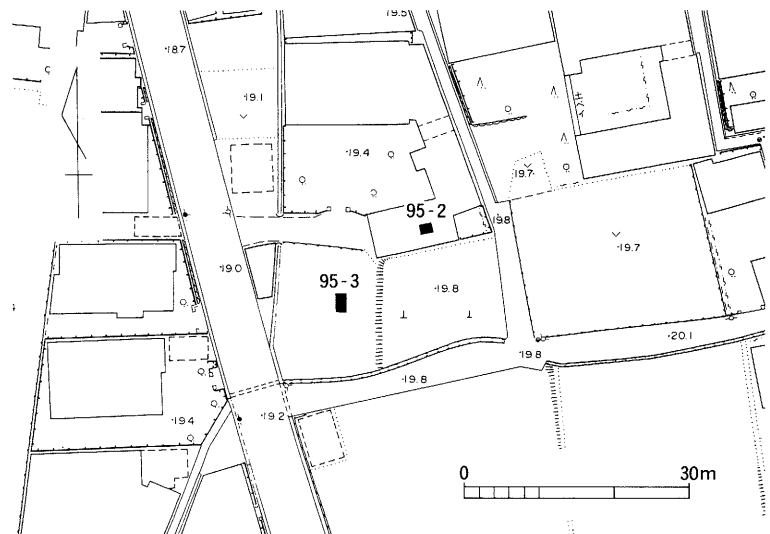
出土した遺物には多くの瓦類の他、陶磁器類などがあるが、いずれも細片であり図化できなかった。しかし、いずれも近世から近代の範疇を越えるものではなかった。

第3節 95-2区の調査

1. 位置 (第16・18図)

調査地は、現在の幡代集落の南西部分に位置し、市道幡代鬼木線に面している。95-3区のトレンチからは、北東に16mの地点である。地形的には金熊寺川の氾濫原上に立地すると考えられている。

トレンチは、1カ所設定した。



第18図 幡代遺跡95-2・3区地形図

2. 層位と遺物の出土状況

(P L . 8 ・ 23)

トレンチを設定した場所は、建物を解体した直後の状態で、当初、かなりの盛土または攪乱が存在するものと考えられたが、掘削した結果は、非常に単純な層位であることが判明した。

約5cmの表土を除去すると黄褐色の粘性シルト層が露呈した。部分的には灰色の粘性シルトをブロック状に含んでいるものの非常に安定した面である。下層確認のため約1m掘り下げたが、ブロック土が減少し、粘性が強まるものの下層には遺構面は認めることができなかったため地山と判断した。

遺構・遺物は全く確認することはできなかったが、幡代遺跡内では数少ない安定したシルト層の面を確認し、今後遺構の発見が期待される。

第4節 95-3区の調査

1. 位置 (第16・18図)

調査地は遺跡の西部にあり、現在の幡代集落の南西端部に位置している。調査地の西隣では大阪府教育委員会による調査で、中世の遺構や遺物包含層が検出されている^⑤。地形分類上は、沖積段丘面上に立地している。

トレンチは、1カ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況 (P L . 8 ・ 23)

調査地の現況は耕作地であり、耕作土(約30cm)の直下には床土であるマンガン粒を多く含む黄褐色土(約15cm)がある。その下には茶褐色混じり黄褐色土(約10cm)があるが、トレンチの北側では一部地山である黄褐色礫混入土が露呈する。トレンチの南側では、茶褐色混じり黄褐色土の下に淡茶褐色土

(約10cm)が認められ、その下には黄褐色礫の地山が広がっている。遺構や遺物は全く検出されなかった。

上記の層位のうち、第Ⅰ層から第Ⅲ層の淡茶褐色土までは非常に粘性が強く、また地山である黄褐色礫混じり土や黄褐色礫からは激しい湧水があった。これらのことから調査地は沖積段丘の縁辺にあり、遺跡の西側を流れる金熊寺川に起因する氾濫原上に位置しているものと思われる。

なお隣接する調査区において確認されている遺物包含層などは全く検出されず、幡代遺跡における旧地形の複雑さがあらためて確認された。

第5節 94－6区の調査

1. 位置(第16・17図)

調査地は遺跡の北西部にあり、現在の幡代集落の中央部からやや西寄りに位置している。調査区の周辺では中世の遺物包含層が確認されている。地形分類上は、沖積段丘面上に立地しているものと考えられる。

2. 層位と遺物の出土状況(PL.8・24)

表土を除去すると、まず黄褐色土(約5cm)が現れ、黒褐色土(約3cm)、灰褐色土(約10cm)、茶灰褐色土(約20cm)、灰褐色混じり茶褐色土(約20cm)、暗黄褐色土(約20cm)と続き、地山と捉えられる暗茶褐色礫に至る。この層は非常にしまりが悪く、男里川の氾濫作用によって堆積したものかもしれない。暗黄褐色土までの各層から近世期の染付けなどの遺物がわずかに出土している。また、暗黄褐色土層の上面で遺構が検出された。

3. 遺構(PL.8・24)

検出された遺構は土坑(SK01)が1基である。トレンチの南西部で検出された。遺構は南端が調査区外へと伸びるため全形は捉えられないが、南北に120cm以上、東西には80cmを測り、平面形状は南北に長い楕円形であると思われる。断面形状は口の開いたU字形をしており、最深部では約40cmの深さを測る。埋土は2層に分層され、上部が茶褐色土で、下部は灰褐色粘土である。

埋土からは非常に多くの遺物が出土した。遺物の大半を屋瓦類が占めるが、同時に陶磁器類も多く出土している。しかしこれらの出土状況には、何らかの意図は感じとれず、投棄されたものとするのが妥当であろう。また土坑についてはトレンチ南側の断面にも遺物がぎっしり詰まって見えており、土坑というよりも溝の一部である可能性も考えられる。

4. 遺物(PL.11・12・31・32)

以下に図示したものは、すべてSK01から出土したものである。遺物の大半を占める屋瓦類には平瓦や丸瓦のほか、軒丸瓦や軒平瓦、また瓦転用による土製円板が多く出土している。他には陶磁器類や泥面子などがある。

1から20は、すべて陶磁器類である。出土した陶磁器類はほとんどが染付けで、またそのほとんどが碗である。3は染付けの碗で、外面に二重網目文が施される。10は外面の界線の間には施文されるが、つ

ぶれていて判別できない。内面には口縁部に2条の直線文がまた、見込に2条の界線がめぐり、見込の界線の中にはコンニャク印判の菊花文が描かれる。このほか碗には松竹梅文（1・2）、唐草文（6・7）、蛸唐草文（5）、笹文（8）、幾何文（4）などがある。また1と12では、見込蛇の目釉ハギをしている。外面に丸文を描き、見込にコンニャク印判の五弁花を描く11は、高台内部に簡略化された福寿字文を描いている。13と14は、青磁の製品である。13は茶筒碗で、口縁部の内側に四方禪文を描く。14は皿で見込の二重界線の中にコンニャク印判で五弁花を描く。ほかに磁器として水滴（15）や茶筒碗（16）がある。16には胴部に鉄釉による横縞文が描かれる。

17は唐津焼系の皿である。全体に透明釉が施されるが、削り出しによる高台と蛇の目釉ハギがなされる見込は無釉となっている。19は陶器の碗で、高台以外にやや黄味がかかった釉が施される。また全体に貫入が多い。20は唐津焼系の鉢である。全体に明黄褐色をなす釉が施されているが、よく使われたものか、口縁部の釉がほとんどとれている。

21は土師質の製品で、胴部を欠くものの復元した高さが30cm近くにもなる大型のものである。形状は現代の植木鉢に良く似ており、その底部の中心には直径3cmの孔があげられている。この製品は当遺跡では2例目の出土となり^⑦、製糖に関する「瓦漏」（とうろ）ではないかとされている。

22から38までは土製円板と呼ばれるもので、ほとんどの製品が瓦の転用によってつくられているが、1点（32）のみ土師質の製品転用のものがある。円板の規模や重さによって大型（70gから90g）、中型（50gから70g）、小型（50g以下）の製品があり、また製作段階で円板の周囲に元の瓦の側端縁を残すものと、残さないものが認められ、以下に示す3つに分類することができた。

A類

円板の周囲に、瓦の側端縁を全く残さないもの。10点あり、最も多く認められる。すべての大きさがそろおうが、長軸、短軸共に5cmを越えない小型の製品が最も多い。またこのA類に分類された土製円板は、打ち欠いた円板の側辺の一部を平らに研磨したもの（28）が認められ、さらに分類する事が可能であるが、他の製品について摩滅との識別が困難であるため、どちらも同じものとして扱う。

B類

円板の周囲に、瓦の側縁、端縁を両方とも残すもの。2点認められた。大型品（25）と中型品（30）がある。

C類

円板の周囲に瓦の側縁または端縁のどちらか一方を残すもの。5点認められた。C類もすべての大きさがそろおう。しかしA類と比べて側端縁の残りが悪く、長さ1cmにも満たないものが多い。

これら土製円板はおおむね中世から近世の都市遺跡からの出土例がいくつか報告されており^⑧、その用途については、冥銭、計量具、玩具、漁労具などと考えられているが、今のところ定説はない。

今回の例に限って言えば、その出土状況から廃棄されたものであり、冥銭などの祭祀的な性格を持つ製品ではなく、また各々の円板がある程度の規格をもつことに注目すれば、計量具や漁労具などである可能性もあるが、しかし漁労具である場合、中国地方の民俗例にならえば海に投げこむのがその使用法であり^⑨、とすると今回出土した土製品は、未使用ということになる。又、計量具とするならば、もっと厳密な規格で製作されるべきであろうことから、どちらとも判断しがたい。あえて用途を推察するなら玩具ということにならうか。今後報告例の増加することを期待したい。

39と40は軒丸瓦、41は軒平瓦である。軒丸瓦はどちらも巴文の製品で、39は巴の尾部が連続して圏線を成し、外区には直径0.8cmの珠文を配する。40は左回りの巴文がほとんど隙間なく接し、また巴の頭部は分厚い。外区には直径1.2cmの珠文が密に配される。

41は罫部からの剝離痕が明瞭に認められる製品で、瓦当部には唐草文が施されている。

42は、泥面子である。土師質の製品で、直径3.4cm、厚さ0.5cm、重量6.8gを測る。表面にはやや丸みを帯びた平行四辺形のような文様が表されている。

- 註 ① 泉南市史編纂委員会『泉南市史 通史編』(1986)
② 角川地名大事典編纂委員会『角川地名大事典27 大阪府』(1983)
③ 1993年度の(財)大阪府埋蔵文化財協会の調査による。
④ 泉南市教育委員会「幡代遺跡」『泉南市文化財年報No.1』(1995)
⑤ 1982年度の大阪府教育委員会の調査による。
⑥ ④と同じ。
⑦ ④と同じ。
⑧ 堺市教育委員会「堺環濠都市遺跡発掘調査報告(市之町東四丁SKT19地点)」『堺市文化財調査報告第二十集』(1984)
 (財)大阪市文化財協会『大坂城跡Ⅲ』(1988)
 広島県草戸千軒遺跡調査研究所『草戸千軒遺跡発掘調査報告Ⅱ』(1994)
 広島県草戸千軒遺跡調査研究所『草戸千軒遺跡発掘調査報告Ⅲ』(1995)
⑨ 川吉謙二「高砂町遺跡出土の土製円板」『のじぎく文化財だより第34号』(財)のじぎく文化財保護研究財団(1995)

第6章 岡中遺跡の調査

第1節 既往の調査（P L . 1 ・ 2、第19図）

当遺跡は、長山丘陵の西側、金熊寺川右岸に位置し、現在の岡中集落を中心とした地域に広がる。なお、地形分類では沖積段丘面にあたる。また、現在の岡中集落の中央を通り山中溪に通じる道は、熊野（小栗）街道に比定されており、街道筋にあたる民家は現在もその当時の屋並を残している^①。

なお、周辺には岡中西遺跡や幡代遺跡など、中世をその盛期とした遺跡が見られ、数多くの資料が得られているが、その中でも当遺跡の東方

に位置する林昌寺境内において、中世の所産となるロストル式瓦窯の存在が確認されていることは特筆すべきものがある。この調査で確認された瓦と同範のものが、岡中遺跡において確認されているほか、岸和田市畑遺跡においても同範関係が見られることが指摘されている^③。

当遺跡の過去における調査は、そのほとんどが現在の集落の中心部において行なわれており、主に中世における比較的まとまった資料が検出されている。以下に中世における遺跡の概要を見ていくこととする。岡中集落のほぼ中心部における調査では、土坑群、ピットなどの遺構が検出され、それらは出土した遺物から14～15世紀のものとしてされている。現時点において、当該時期の明確な建物跡は確認されていないが、中世寺院跡の存在も指摘されていることから、当遺跡は中世村落の実態を語る資料として位置付けることができよう。

以上、岡中遺跡は中世を中心とした集落遺跡であり、また周囲には当該時期にあたる遺跡が隣接し、数多くの興味深い資料が得られている。今後、周辺の遺跡の動向を見据えた研究が望まれる。

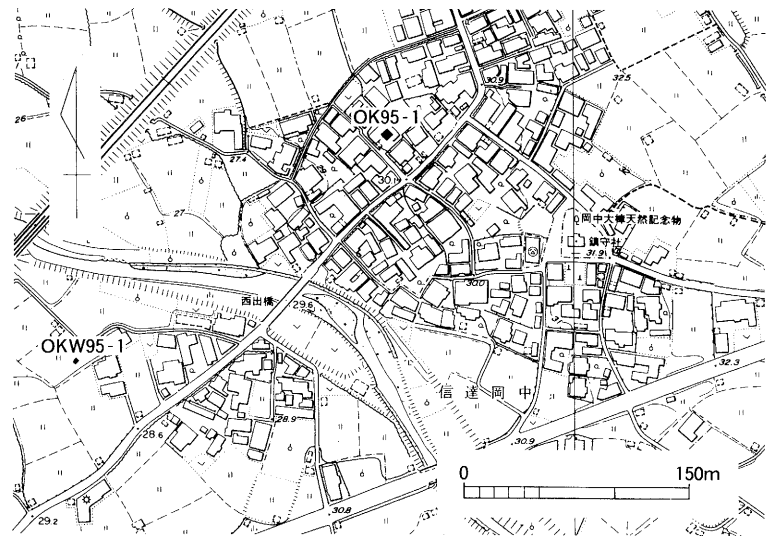
第2節 95-1区の調査

1. 位置（第19・20図）

調査地は岡中遺跡の中心よりやや北寄り、現在の岡中集落のほぼ中央に位置している。地形分類上では沖積段丘上に立地していることになる。トレンチは1カ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況（P L . 8 ・ 24）

層序は、第I層・現表土（約40cm）、第II層・明黄褐色土（約10cm）である。以下は拳大程度の円礫



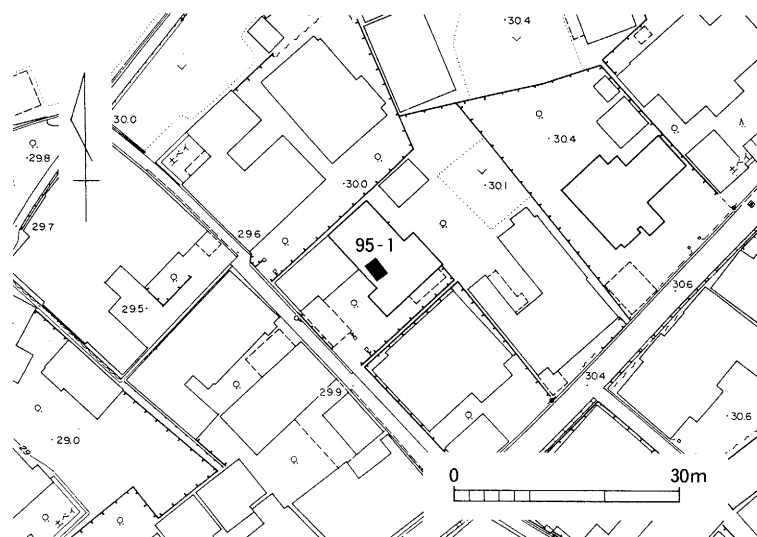
第19図 岡中遺跡・岡中西遺跡調査区位置図

を多量に含んだ暗褐色土が確認される。おそらく当遺跡の南側を蛇行して流れる金熊寺川の氾濫によって堆積したものであろう。

3. 遺構 (P L. 8・24)

遺構は第Ⅲ層の上面で土坑2基 (S K01~02)、ピット3基 (Pit01~03) を検出した。遺構面の標高は、29.6m前後である。

S K01は、大部分がトレンチ外に拡がるため全形は確認できないが、2 m×1.5 m以上のかかなり大型の規模をもつもので、最深部の深さは40 cm、埋土は上層が若干の炭を含む灰色混じり黄褐色土、下層が拳大程度の河原石を大量に含んだ暗灰色土である。これらの河原石はS K01を埋め戻す際に投げこまれたものと推測される。S K02もほとんどがトレンチ外で全形は確認できない。S K01に切られており、深さ15 cmを測る。埋土は暗黄褐色土である。ピットはそれぞれ深さ10 cm前後の浅いもので、埋土はすべて灰色混じり褐色土である。



第20図 岡中遺跡95-1区地形図

4. 遺物 (P L. 33、第21・22図)

1・2は、土師質の甕である。1はS K02、2はS K01から出土している。

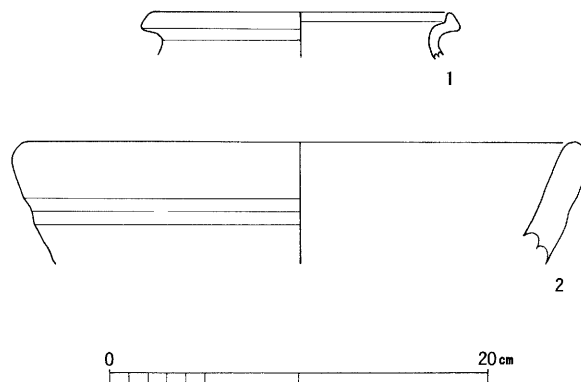
1は、紀州系の甕である。体部から口縁部にかけて緩やかに湾曲し、端部は上方向につまみ上げる。内外面ともに摩滅が著しく調整は不明である。内面は橙色を呈し、外面は煤が少量付着する。復元口径16 cmを測り、胎土には多量の砂粒を含む。

2は、土師質の甕である。体部から口縁部に向かって斜め上方向にのび、端部は丸くおさめる。内面から口縁部外面はナデ、外面体部はヘラケズリが施される。復元口径27.6 cmを測り、胎土にはクサリレキを少量含む。在地産であろうか。

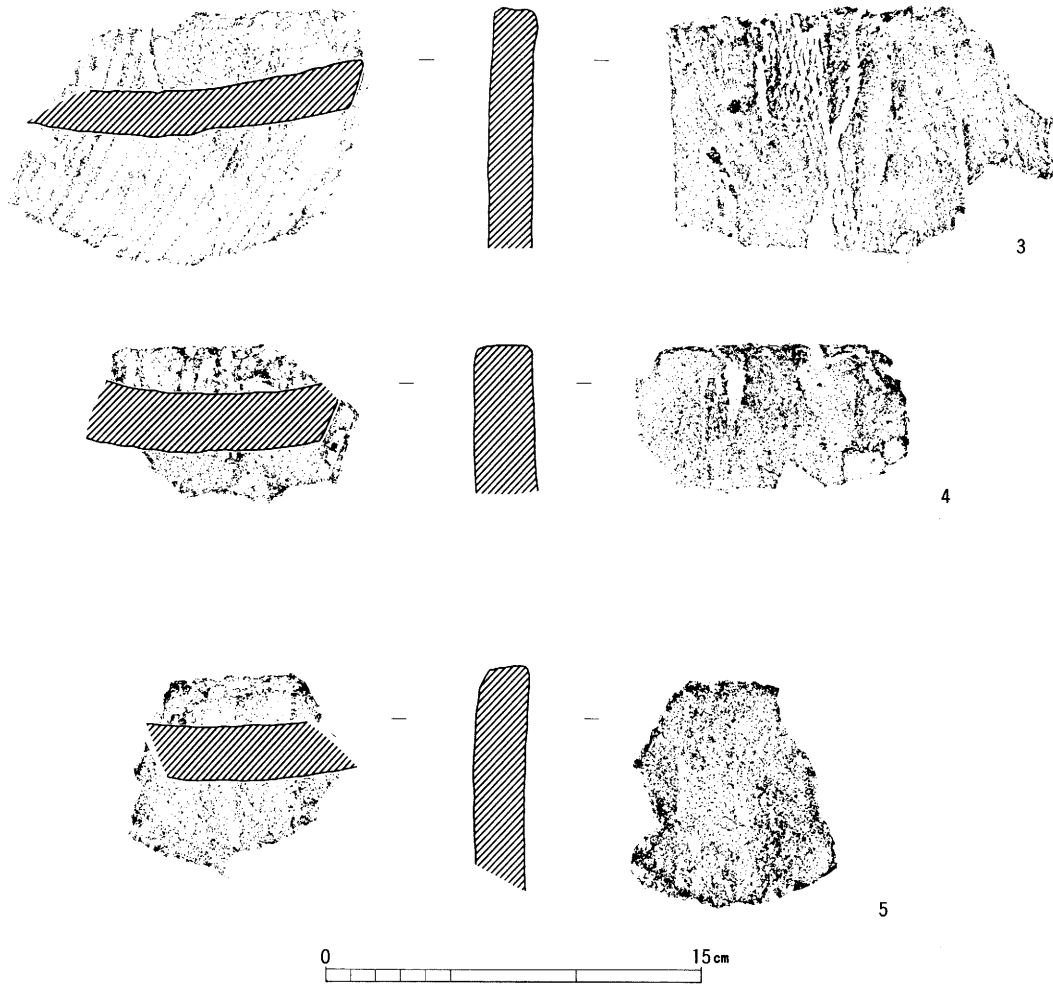
3~5は、平瓦である。3はS K01、4・5はS K02から出土している。

3は、凸面に側縁に平行の縄タタキの条痕が残る。凹面には糸切り痕、布目圧痕が残る。胎土は精緻であるが、焼成はやや甘く軟質である。4は凸面にはハナレズナ、凹面には糸切り痕が残る。厚さは2.4 cmを測る。焼成はやや甘く、胎土には少量のクサリレキを含む。6は、凸凹面ともにハナレズナが付着する。厚さ2.1 cmを測る。焼成は甘く、橙色を呈し、胎土には少量の白色粒を含む。

その他にS K02から銅銭が1枚出土しているが摩滅が著しく、時期は不明である。



第21図 岡中遺跡95-1区出土の土器



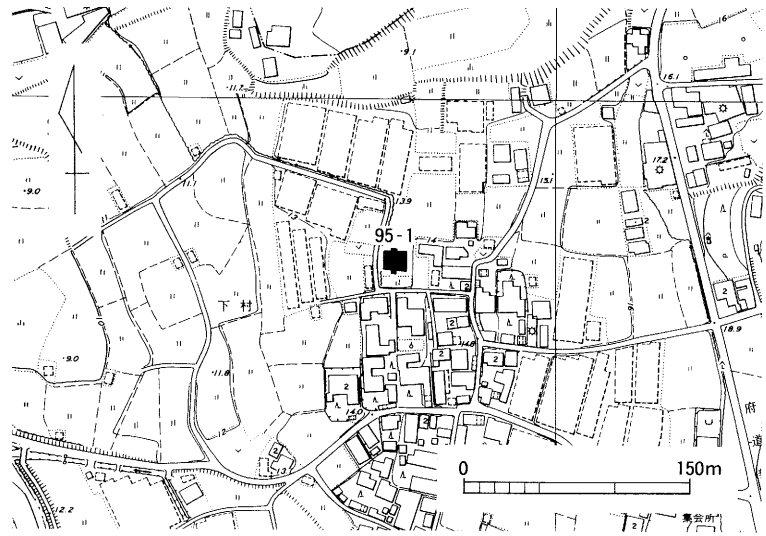
第22図 岡中遺跡95-1区出土の平瓦

- 註 ① 大阪府教育委員会『熊野・紀州街道—調査報告書編—』(1987)
 ② 泉南市教育委員会「林昌寺瓦窯」『泉南市文化財年報No.1』(1995)
 ③ 泉南市教育委員会「岡中遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XI』(1994)
 ④ 泉南市教育委員会「岡中遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書V』(1988)

第7章 下村遺跡の調査

第1節 既往の調査（P.L.1・2、第23図）

下村遺跡は、泉南市と泉佐野市を分ける檜井川の支流である新家川の右岸に立地する。新家川右岸の地形は、所謂「檜井丘陵」に向かって一気に立ち上がるかなり起伏の激しい場所であることが指摘できるだろう。そのため川のすぐ側は氾濫原が存在し、その他は低位段丘面、中位段丘面で形成されている地形がほとんどで、良好な沖積地は皆無である。そのような地形の中で、川から丘陵に上るほぼ中央部分の比較的平坦な部分を選んで現在の下村集落が営まれている。さらに、上流に向かって同じような立地条件で、小規模な集落が点在している。



第23図 下村遺跡調査区位置図

これまでの調査は、分布調査によって中世から近世の遺物が散布することから、遺跡の存在が確認されていた。しかし、実際に発掘調査が行なわれたのは、平成5年度に個人住宅の新築に伴うかなり小規模な調査1件のみである。この調査では、中世のピットの他、市域では初めての発見となる近世の2基のカマドが並んだ状態で確認された^①。これにより下村遺跡は、中世から近世へと続く現在の下村集落の初源となるものということが明らかになっている。

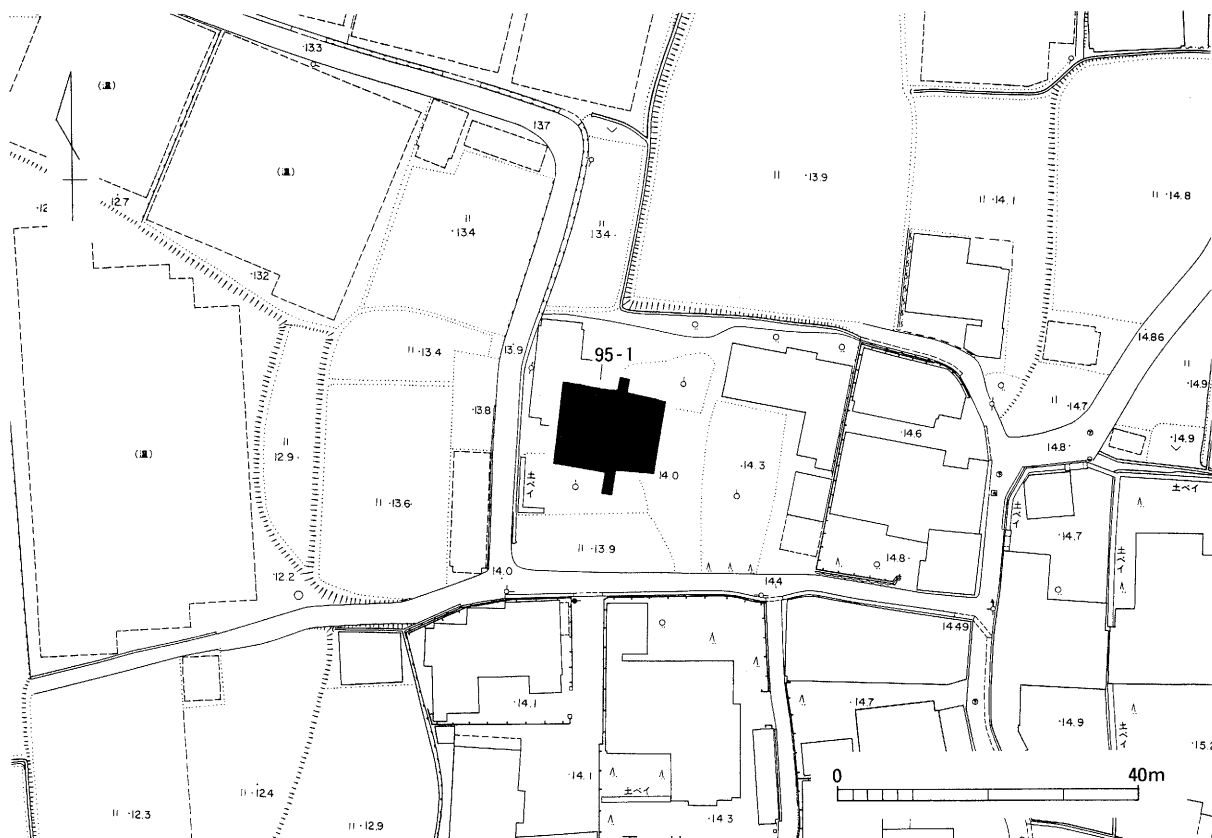
さて今年度は1件の調査が行なわれたが、この調査地は、遺跡外であったものの試掘調査の結果、中近世の遺構・遺物の他に、これまで全く検出されなかった弥生時代中期の遺構・遺物、奈良時代の須恵器などが出土したため遺跡の範囲拡大がなされ、本調査が行なわれたものである。

周辺の弥生時代の遺跡を見てみると、東側約400mの新家丘陵上には後期初頭といわれている高地性集落の新家オドリ山遺跡^②、南側約400mには中期の新家遺跡^③、さらに川を挟んだ南側約600mには中期の方形周溝墓を検出した向井山遺跡^④など、小規模ながらある程度の遺跡が知られている。特に、新家遺跡とは時期や立地の上からも非常に共通点が多く、新家川右岸の段丘上には、わずかな平坦な部分を利用して小規模な弥生集落が展開していた可能性が高くなった。また、これらは中期だけに限定されており、この後出現する新家オドリ山遺跡ともあわせて注目されるのである。

第2節 95-1区の調査

1. 位置（第23・24図）

調査地は、現在の下村集落の北端にあたる。地形的には先述の通り、低位段丘面上に立地する。先の



第24図 下村遺跡95-1区地形図

調査の地点^⑤からは北へ約60mである。これまでは集落の西半分から新家川よりの径約150mの同心円状に遺跡として周知されていたが、本調査により集落の北側部分に向かっても遺跡が展開することが明らかになった。

2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 9・25・26)

調査地は、かなり以前に民家を解体した後は、果樹園と家庭菜園として利用されており、水田としては全く利用された形跡はないようである。これら菜園の表土を40~50cm除去すると暗灰色の砂質シルト層が約10cm程見られる。近現代の遺物を含んでおり、かつての民家の盛土であろう。この下層には、ほぼ同質の褐灰色砂質シルト層が約20cmほど介在し、地山である黄橙色の粘性シルト層に至る。褐灰色砂質シルト層からも遺物は近世以降のものばかりで、中世の包含層は存在しなかった。いずれの層も民家の建築時の盛土または整地土と考えてよい。またトレンチ北東部分に向かって灰色の粘性シルト層が入り、最も厚い所で約40cmを測る。下層には拳大の礫が大量に含まれた層もあった。これにつれて地山のレベルも北東側に向ってわずかず下がっており、近世の整地土と考えてよいだろう。

地山は、部分的には黄橙色の部分が多いが、暗黄色や赤褐色を呈する部分もある。また、北側の拡張区では礫層の部分も確認されたが、礫層の部分からは遺構は検出されなかった。

3. 遺構 (P.L. 9・25・26)

遺構は、時代別に大きく分けて弥生時代、中世、近世の3時期がある。

弥生時代の遺構と考えられるものは土坑が大半である。S K01・02は、調査区のほぼ中央に位置する土坑である。S K01は、平面形は、ほぼ円形を呈するが北東部分をS K02によって切られている。深さは6～8cmと非常に浅くかなり削平を受けているようである。断面は、ほぼまっすぐに掘り込まれている。底面は、ほぼ平坦である。S K02もほぼ円形を呈し、断面は、ほぼまっすぐに掘り込まれている。深さは、7～14cmを測る。いずれの埋土も黒褐色の粘性シルトで炭化物を少量含んでいるが、S K01の方がやや黒褐色が強く、炭化物の混入量が多い。遺物は、S K01より底部（6）が1点出土している。S K02からも、弥生土器と思われる破片が1点出土しているが図化できなかった。

S K03～05は、不整形の土坑である。S K03は、南側部分は攪乱によって破壊されているが、東西方向の最大径は3.5mを測る。深さは10～50cmで、遺構の内部は凹凸が著しい。埋土は、上層は褐色の砂質シルトで、下層は粘性になる。また、下層に行くに従って地山との土質の差が不明瞭になる。遺物は、上層より弥生土器の底部（7）が1点出土している。S K03の東側約3mに位置するS K05は、S K03と同じ埋土を持つ。南側を攪乱によって失われているが、もとはS K03と同一遺構であった可能性が高い。

S K04は、中世の遺構によってかなり切られている。検出長7.5m、最大径約2.1mで、深さ約20～30cmを測るが、北側のトレンチ端では5～10cmと非常に浅い。埋土は、暗黄褐色の粘性シルトの1層で遺構面の土質と非常によく似ている。遺物は、甕の口縁部（1～3）や底部などが数点出土している。この他、遺物の出土はなかったが弥生時代に属すると考えられる遺構はS K06、07などのS K01、02と同様の黒褐色系の埋土を持つ円形の土坑がある。

中世の遺構は、掘立柱建物、溝、ピットなどがある。

掘立柱建物は、2棟確認することができた。いずれもトレンチ北西部に位置し重複しているが、前後関係は不明である。

S B01は、桁行2間（2.8m）、梁行2間（3.8m）で、かなり小規模なものである。柱間は、桁行1.2～1.6m、梁行1.8～2.1mを測るが、南側柱列の中央のピットは検出できなかった。柱筋は、ほぼN-7°-Wを示す。建物の面積は、約9.6㎡である。ピットの平面形は、円形または楕円形を呈し、一部で柱痕を確認した。規模は径15～35cm、深さ10～25cm前後のものがほとんどでかなり削平されているようである。埋土は、暗褐色と褐色の粘性シルトである。遺物は、S B01に関係するピットからは出土しなかった。

S B02は、1間×1間のS B01よりさらに小規模な建物である。柱間は、東西方向2.7m、南北方向1.8mを測る。柱筋は、ほぼN-62°-Wを示す。建物の面積は、約4.9㎡である。ピットの平面形は、円形を呈し、一部で柱痕を確認した。規模は、径22～30cm、深さ10～15cmを測り、かなり削平されているものと考えられる。埋土は、褐色系の粘性シルトである。遺物は、Pit01より土師器の皿（12・14）が出土している。

この他には、建物として確認できなかったが、柱穴と考えられるピットのうち、Pit02からは土師皿（15）、同じくPit03から（13）が出土している。また、Pit04は、トレンチの北東端に位置し、平面形は円形、径40cm、深さ20cmを測る。埋土は、灰褐色の粘性の強いシルトで、拳大の礫が詰め込まれており、柱穴とはやや性格の異なるものと考えられる。遺物は、須恵器の鉢（10）が1点出土している。

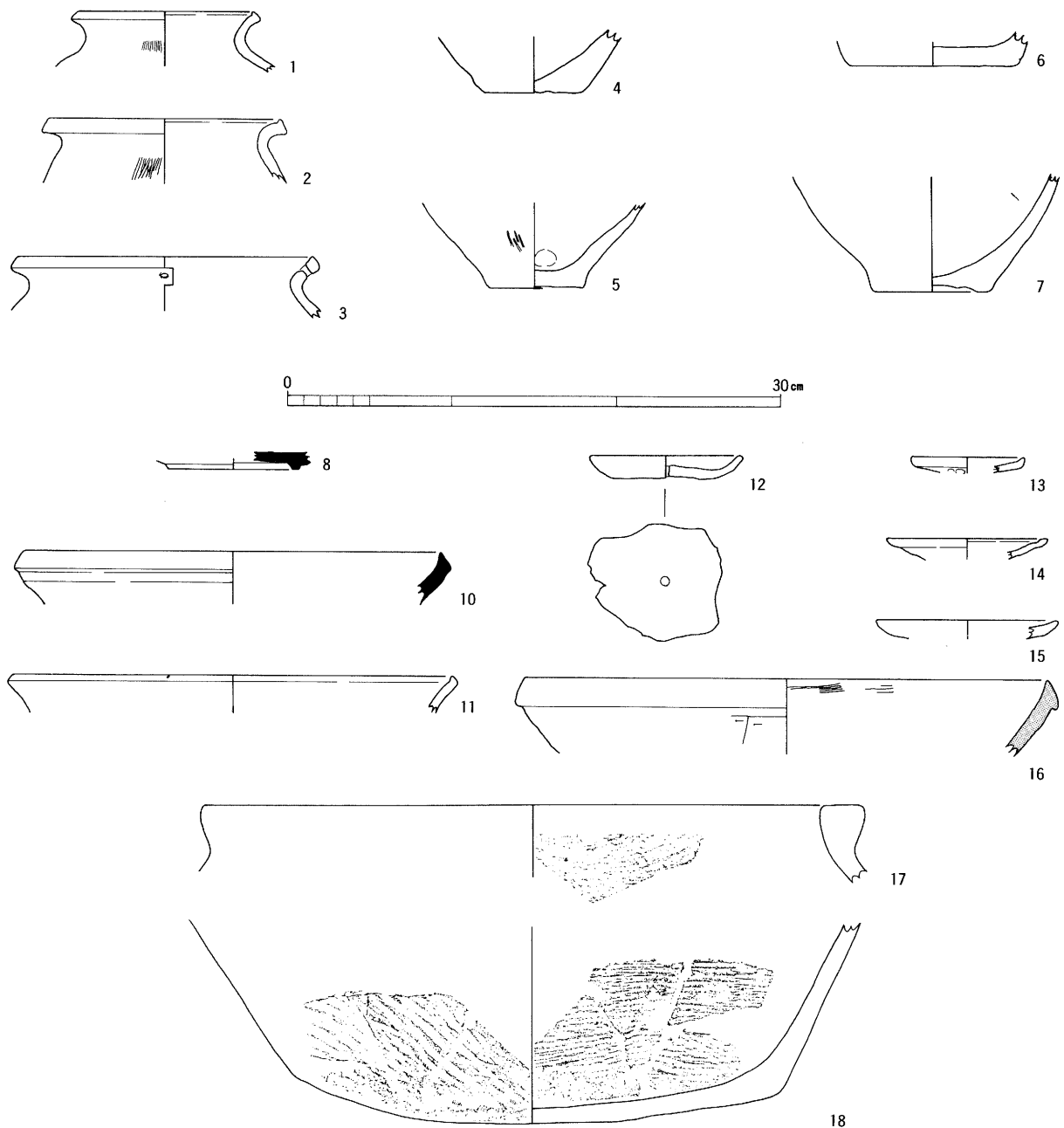
S D01は、トレンチ北東部に位置する。S K04を切って、北西から南東に向かってやや弧を描くよう

にして調査区外へ伸びる。検出長約7.5m、最大幅約2.1m、深さ10~25cmを測る。埋土は、灰褐色の粘性の強いシルトである。また、拳大の円礫も多く混入していた。遺物は、須恵器の高台（8）、瓦質の挿鉢（16）が出土している。このほかS D01付近には、性格不明の溝（S D02・03）や土坑（S K08・09）など数基検出されている。いずれも埋土は、灰褐色系の粘性シルトである。S K08からは、土師器の甕（11）が1点出土している。

近世、近代の遺構は、土坑がほとんどである。ほとんどは上層の整地層の上面から切り込んでいる。

S K10~13は、径0.5m前後のほぼまっすぐに掘り込まれた円形の土坑である。近世から近代の瓦などが詰め込まれていた。一種の廃棄坑と考えられる。

S K14は、径0.7mの不整形の土坑で、深さ10cm程の浅いものであるが、近世の瓦と共に焼土塊などが出土している。



第25図 下村遺跡95-1区出土の土器

4. 遺物 (P L .33・34、第25図)

出土遺物は、弥生土器をはじめ、鎌倉時代や室町時代、近世など多岐にわたっている。

6は、甕の底部である。S K01から出土している。白色の砂粒を非常に多く含み、胎土は非常に脆く風化が著しい。

1～5は、S K04から出土している。

1～3は、甕の口縁部である。いずれも丸みをもって大きく外反する。口縁端部は、上方に肥厚される。1と2は、ヨコナデによって僅かにつまみあげられている。体部は、丸みをおびてなだらかに拡がる。外面はハケ、内面はナデ調整を施す。また、3は、口縁端部よりやや下方に穿孔が1カ所存在する。穿孔は焼成前に行なわれ、内面より外面に向かって施される。孔径は6mmを測る。胎土は、クサリレキなどを僅かに含みいずれも明褐色を呈する。4と5は、底部である。5は、外面は丁寧なミガキが施され、黒斑を有する。底部はナデ調整で、指頭痕が明瞭に残る。内面は、すべてナデ調整である。クサリレキなどの砂粒を少量含み明褐色を呈する。4は、やや器壁の厚いものである。内外面とも摩滅のため調整は不明で、暗褐色を呈する。

7は、S K03から出土している。下方へやや張り出した底部で、上げ底である。やや丸みをおびて立ち上がる体部を持つ。内外面とも摩滅のために調整は不明。胎土は石英など砂粒を多く含み、外面はにぶい黄橙色を呈するが、内面は黒褐色を呈する。

以上、出土した弥生土器は、おおむね中期後半のものばかりで、かなり限定的な集落であるといえるだろう。

8は、S D01から出土した須恵器の高台である。高台の貼付部分が明瞭に残るなどやや粗雑な印象がもたれるものである。

10は、東播系の捏鉢である。比較的薄い器壁をもち、内面はやや弧を描いて立ち上がる。外面は口縁部をほとんど下方へ拡張しない。また重焼き痕が明瞭に認められる。Pit04から出土している。

11は、紀州系の土師器の甕である。大きく「ハ」の字に開く口縁部で、口縁端部をつまみあげて拡張している。S K08からの出土である。

12～15は、土師器の小型の皿である。

12と14は、S B02の一つであるPit01から出土している。12は、底部に穿孔が施されている。穿孔は焼成前と考えられ、外面より内面に向かって施される。孔径は、5mmを測る。14は、口縁端部を僅かにつまみあげる。13はPit03から、15はPit02から出土している。胎土はいずれも、クサリレキなどを含み、粗い。

16は瓦質の挿鉢である。8と同じくS D01から出土している。

17と18は、同一個体と考えられる湊焼の大甕である。口縁部と底部だけしか残存していない。北東部分の整地土より出土している。

註 ① 泉南市教育委員会「下村遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X』(1993)

② 泉南市史編纂委員会『泉南市史 通史編』(1986)

③ 泉南市教育委員会「新家遺跡」『泉南市文化財年報No.1』(1995)

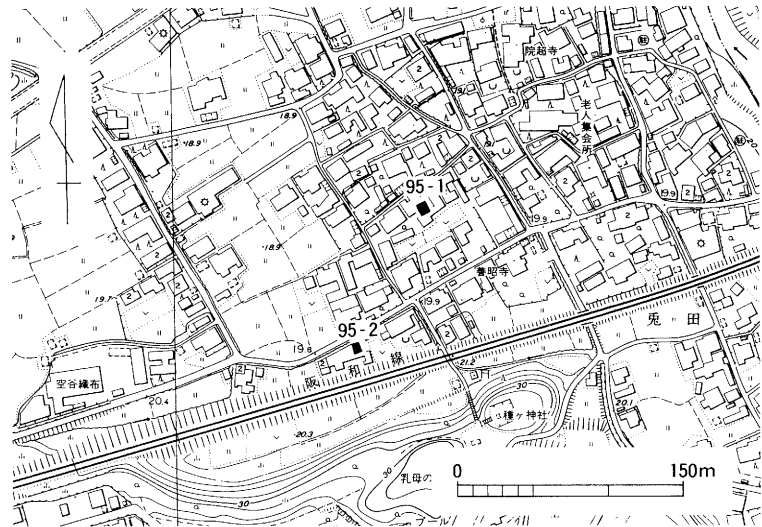
④ 泉南市教育委員会『泉南市向井山遺跡発掘調査報告書』(1971)

⑤ ①と同じ。

第8章 兎田遺跡の調査

第1節 既往の調査（P L.1・2、第26図）

当遺跡は、和泉山脈から舌状にのびる檜井丘陵の東側、檜井川左岸に位置する。なお、地形分類では沖積段丘にあたる。周辺には、遺跡の南西の檜井丘陵上に弥生時代の高地性集落である新家オドリ山遺跡が見られる。また、檜井丘陵上に兎田遺跡を取り囲むようにして、市域でも数少ない古墳が展開しており、南方から兎田古墳群、韓半島の影響を強く受けた須恵器の出土したフキアゲ古墳群、初期須恵器が出土した新家古墳群がそれにあたる。檜井川の対岸



第26図 兎田遺跡調査区位置図

には、縄紋時代から中世にかけての複合遺跡である三軒屋遺跡などが見られる^①。このように、檜井川兩岸の縄紋時代以降、活発な活動が見られる地域にあたり、ちょうどそれらに取り囲まれている形で立地する兎田遺跡は、それらの遺跡と当遺跡がどのような関わりを持つのか期待される場所である。

さて、当遺跡は現在の集落内における開発に伴う試掘調査の際に、中世の包含層が確認されたのが発見の契機であるが^②、その後の遺跡内における調査件数は少なく、その実態は正確に把握できていないのが現状である。

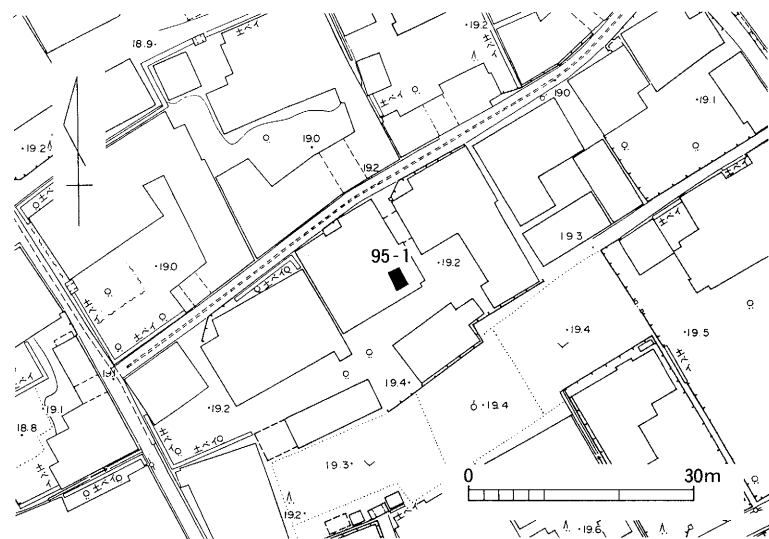
このように、当遺跡は現時点ではその実態は把握できていないが、今後の調査及び確認されるであろう資料の解釈に際して、周囲の遺跡の動向を十分見据えううえで作業をすすめていく必要があるといえよう。

第2節 95-1区の調査

1. 位置（第26・27図）

調査地は、遺跡の中央からやや東寄りの地点で、現在の兎田集落のほぼ中央にある。地形分類上は、檜井川西岸の沖積段丘面上に位置していると考えられる。

トレンチは1カ所設定した。



第27図 兎田遺跡95-1区地形図

2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 8・27)

調査区には全体に盛土(約30cm)が施されており、表土と盛土の下には、基本的に暗灰褐色土、黄褐色土、灰褐色土、暗灰褐色土、暗黄褐色土の各層がそれぞれ約10cmほどの厚さできれいに水平堆積している。

暗黄褐色土の下には淡黄色系の土層(約15cm)があり、続いて暗茶褐色土(約20cm)が堆積している。この層の上面には少なからず凹凸があり、また層厚も厚く上位の層とは性格が異なって見える。中から瓦器の細片が出土したが、図化に耐え得るものではなかった。

暗茶褐色土の下では黄褐色混じり茶褐色土を細い帯状にはさんで、地山である茶褐色礫混じり土および灰褐色混じり茶褐色土と続く。これらの層は上面より30~40cm掘り下げると、径20~30cmの礫層へと変化する。地山の上面で遺構が検出された。

3. 遺構 (P L. 8・27)

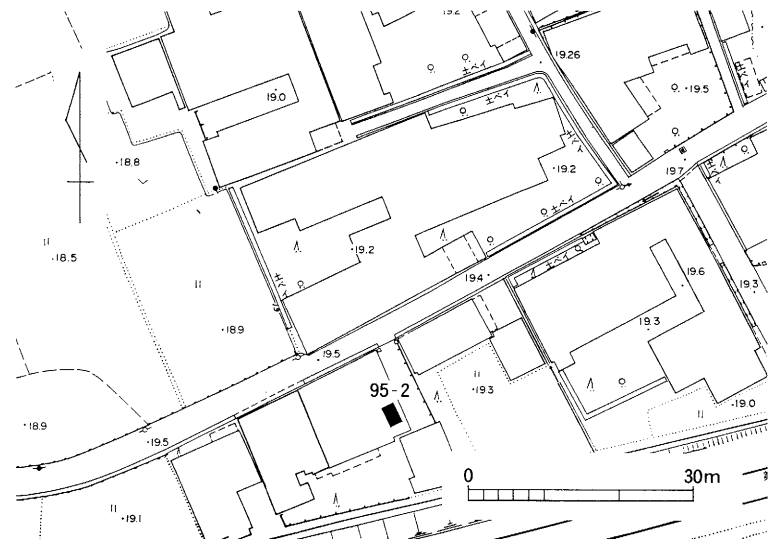
検出された遺構はピット(Pit01)が1基である。トレンチの南東隅で検出された。平面形状はややいびつな円形で、直径は約12cmを測る。断面形上は少し口の開いたU字形を呈し、最深部で約18cmの深さがある。埋土は1層で炭の混じる淡茶褐色土である。柱痕跡は検出されなかった。また埋土より遺物は出土しなかった。

第3節 95-2区の調査

1. 位置(第26・28図)

調査地は遺跡の中央に位置し、95-1区からは南西へ約100mの地点である。地形分類上は沖積段丘に含まれる。また調査区のすぐ南側には、JR阪和線をのせる丘陵が迫っている。

トレンチは1カ所設定した。



第28図 兎田遺跡95-2区地形図

2. 層位と遺物の出土状況

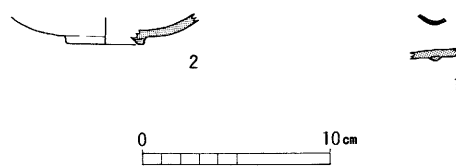
(P L. 8・27)

調査区には、約20cmの厚さで盛土が施されている。盛土を除去すると灰白色土(耕作土・約15cm)、黄灰褐色粘土(床土・約10cm)、灰色混じり明黄褐色土(約10cm)、茶褐色混じり灰褐色土(約10cm)、明茶褐色土(約10cm)、灰褐色土(約15cm)、明黄褐色土(約5cm)、灰褐色混じり暗茶褐色土(約10cm)の各層が水平堆積している。このうち茶褐色混じり灰褐色土と灰褐色土は旧耕作土と考えられるものである。灰褐色混じり暗茶褐色土の下には淡茶褐色の砂が約50cmあり、同層の下位では径20cmほどの円礫が混じる。これらは榎井川に起因する砂礫層と捉えることができ、調査地が榎井川の氾濫原に含まれている証しとなるのか。

遺構は上層である灰色混じり明黄褐色土の上面で、東西に延びる幅約20cmの耕作痕が検出されたが、その他では何も検出されなかった。また、灰褐色土より瓦器碗の細片が出土した。

3. 遺物 (P L .33、第29図)

1、2は、ともに灰褐色土より出土した瓦器碗の底部である。どちらも口縁部を欠く。1は須恵質の製品で、底面には高さ0.2cm、断面三角形を呈する高台を貼りつける。見込部には暗文が1条認められる。焼成は非常に堅緻で、内外面ともに灰白色を呈する。2は残存高3cm弱の製品で、底部には高さ0.4cm、断面台形の高台を貼りつける。焼成はやや甘く、全体に摩滅が著しい。



第29図 兎田遺跡95-2区出土の土器

註 ① 泉南市史編纂委員会『泉南市史 通史編』(1986)

② 泉南市教育委員会「兎田遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅶ』(1990)

第9章 まとめ

平成7年度の文化財保護法に基づいた埋蔵文化財包蔵地内における発掘届出および通知は、第1表に示したとおり平成8年2月29日現在で52件を数える。

この中で市内遺跡群の各地において個人住宅等に伴う発掘調査は、28件である。その内訳は、現在整理中のものも含めると第2表に示したとおり、男里遺跡18件、高田遺跡1件、幡代遺跡3件、岡中遺跡1件、下村遺跡1件、岡田遺跡1件、岡中西遺跡1件、兎田遺跡2件である。これらの調査面積は、比較的小規模なものばかりである。しかし個々の調査で得られた情報はそれぞれ大きな意味を持つものであることは言うまでもない。

なお、本書では前年度未報告分の天神ノ森遺跡1件(94-1区)、幡代遺跡1件(94-6区)も合わせて報告することができた。以下、今年度得られた結果と過去のデータ等とを比較しながらまとめと総括を行なってみよう。

男里遺跡においては、近年稀に見る大成果を挙げることができた。95-1区では、縄紋晩期の系譜を持つ突帯紋土器と当該期の遺構が検出された。

まず、突帯紋土器についてまとめと考察をしてみよう。出土した器種のほとんどは、深鉢である。いずれも小片であったため、口縁部と体部を分けて報告せざるを得なかったが、大きく5つの類型と、口縁部と突帯を施す位置で6つのタイプの分類が可能となった。また、胎土の面からも、生駒系のものと在地系のもので明確な区別ができることが分かった。

突帯紋土器は、河内平野や摂津地域の資料を中心に、大きく滋賀里Ⅳ式→船橋式→長原式という編年がほぼ確定している^①。このうち、突帯紋土器の後半にあたる、船橋式から長原式への深鉢の最も大きな変化は、口縁端部のわずか下方と屈曲する体部の2条突帯をめぐらせるものから、口縁端部直下とほとんど屈曲しない体部に2条の突帯をめぐらせることである。

さて、本調査資料との比較であるが、全体の中で特に生駒系の胎土を持つものに集中して確認されたA-I類は、長原遺跡における分類のa2型^②などほぼ対応するものであり、長原式の範疇に含まれると考えてよいだろう。同じくB-I類も長原式の範疇であろう。一方、AまたはB類で、口縁端部からやや下がった位置に突帯を施すII類は、船橋式の範疇に含まれるものと考えられるが、これらは、14・25など存在するものの非常に少数である。また同じく、口縁部端部より下がった位置に突帯をめぐらせるIV類は、C類だけに確認されている。これらは、いずれも船橋式とは掛け離れるものである。

次に問題になるものとして、D類に分類された突帯である。在地系の胎土を持つものの中では、D類が最も多い。また、D-I類、D-III類にそれぞれ分類された23・26は、口縁端部に刻目を持っていることである。口縁端部に刻目を施す技法は、滋賀里Ⅳ式において盛んに用いられ、船橋式以降ほとんど認められない。遺物の出土状況からして、これら遺物が滋賀里Ⅳ式に属するとは考えられないため、長原式と並行する在地系の突帯紋土器として理解するのが妥当であろう。

この資料と非常に共通点のあるものとして、同じ和泉南部において、泉佐野市の船岡山遺跡B地点^③の資料があげられる。この遺跡から出土した突帯紋土器は、a・b・cの3つに分類されている^④。このうちb類に分類されるものの中でも、口縁端部に突帯が施されて端部に刻目を行なうものが、長原式とは異なるものとして考えられている。また、近年、突帯が平たく下方へ垂れ下がり、口縁部を外反させる

ものを地域性を持った長原式と並行またはより新しい型式のものとして理解するものもある^⑤。

以上のことから、本調査において出土した生駒系胎土の突帯紋土器の大半は長原式で、すべて搬入されたものであると考えてよいだろう。また、在地系の胎土のものも、長原式が存在するが、D-I・III類のように長原式の影響を受けつつも独自の在地系突帯紋土器も存在するということである。そして、出土遺物の胎土比率からも分かるように、在地系の土器は決して客体的ではなく、あくまでも主体をなしているのである。

また、C-IV類に属する20~22、D-V類の28、突帯の形態は不明であるが、X-VI類とした29などは、いずれも口縁部がかなり外反するものである。また特に、20が顕著であるが、突帯も粘土紐を平たく貼り付けただけのような型式的にもより新しい様相を示している。さらに、21・22は、口縁部に2条の突帯を有するかなり特異なものでもある。そのため、いずれも生駒系の胎土を持っているものの、直接搬入されたものではないようである。現段階では推測の域を出ないが、胎土だけが搬入されて在地の土器の影響を受けて製作されたものと考えられることができるだろう。

これまで和泉南部地域の当該期の歴史的評価は、資料的制約もあるが、段丘面が海側までせまり沖積平野が少ないというだけで、和泉北部あるいは河内地方との対比において、後進性ばかりを念頭に置いて論じるものが目立った。しかしながら、今回の調査において、当地域においても相当数の割合で河内地域との交流が、直接的に行なわれていることが確認された。しかし、それらの交流は客体的なもので、主体をなすものは在地系、つまり「和泉南部」なのである。また、長原式の時期においても滋賀里式の系譜を引く在地系の土器や長原式もそれらに影響を受けて、地域性を持っていた可能性の高いことが確認された。また、和泉南部で初めて出土した浮線紋土器は、依然として縄紋社会が隆盛を極めていた東日本とも直接的な交流を端的に示すものである。このことは、和泉南部をさらに「主体的」な地域として浮かび上がらせる十分な資料となるだろう。

そもそも、水田可耕地の多寡を論ずるだけの環境決定論的論法だけでは、縄紋時代から弥生時代前期への変容期の社会を論ずるのに有効な手段となり得るかは大きな疑問である。このことは、今回調査の時期よりわずかに遅れて出現する氏の松遺跡^⑥など、海辺の段丘面縁辺部においても前期中段階を初源とする集落が、短期間ながらも展開していたことを含めて、当該期の集団の生業を根本的に問い直す資料となるだろう。

さらに、わずかながら出土している弥生土器と考えられるものとの共伴関係や底部の平底化など大きな問題が残った。本報告内では紙面と時間の制約から、和泉南部における突帯紋の変遷と弥生時代への変容については論ずることはできないが、当調査区より北西約200mで出土した本調査出土より遡る滋賀里III~IV式資料^⑦の公表も含めての論稿は急務である。

95-2区は、1区とは南東に約75m程しか離れていないにも関わらず、時代的には全く異なる平安時代の掘立柱建物が2棟検出された。時期的には、黒色土器A、B類両方の出土から、10世紀代後半に位置付けることができるだろう。

本調査区から北へ約40mの地点では、(財)大阪府埋蔵文化財協会によって1993年度においても、ほぼ同時期の掘立柱建物が2棟確認されている^⑧。ここで検出された建物の一つは、2間×4間の規模ながら、東西方向に廂を有するもので、本調査において検出された建物よりかなり大規模なものである。また、もう1棟の掘立柱建物とは北西に約50mも離れて検出されており、当時の散村的な集落状況を窺わ

せるものである。しかし、今回調査においては、対照的に非常に近接した場所に建物が確認された。今後、当時の集落構造の一例となろう。

また、遺構面である黒褐色粘質土層は、1区においては、突帯紋期の包含層として確認されたが、当地区ではこれらの時期のものは出土しなかった。そのレベル差は1区で8.1～8.2m、2区では8.6～8.7mで約50cmの比高差が存在する。

95-3区は、旧耕作土層において鋤溝を検出した。これにより、少なくとも中世には当該地は耕地化されていることが確認された。また、黒褐色粘質土層を確認したが、既往の調査において確認された土層よりやや軟弱であったことが若干の相違点である。

95-4区では、遺構は確認できなかったが、3区と同じく黒褐色系の土層が確認された。このことは、遺跡南東方面にもこの層が分布している可能性を示唆するものとして貴重なデータとなった。

95-5区は、現在の男里集落内部での調査例である。地山とされた明黄褐色土は礫を含んでいるものの比較的安定したもので、近世以降、現在の男里集落が、この安定した地盤の上に形成されたことを物語っているだろう。

95-6区も同様に、現在の男里集落内部の調査であるが、さらに安定した黄褐色の粘性シルトを確認することができた。付近に遺構の存在が期待される良好な資料となった。

95-7区は、集落の北西端にあたる地点である。遺構・遺物は確認されず、主として砂礫層が多く検出された。このことから、当調査区付近は男里川の氾濫原上であることが確定的となり、現在は集落の一部になっているものの、近代以前は、居住適地とならないことが判明した。現在の男里集落の拡がりを知る上で大きな手がかりになったといえるだろう。

95-8区は、既往の調査によって、男里川の旧河道の存在が指摘されていたが、検出された湧水の激しい砂礫層は、そのデータの補強がなされたものである。

95-9区は、遺跡の南端部分である。これまでの調査で、付近には安定したシルトの面が拡がり、弥生時代から古墳時代にかけてのかなり大規模な埋積谷も確認されていた。本調査においては、遺構は確認できなかったが、検出された面は、今後、先の調査で検出された遺構の拡がりを予想させる資料となるであろう。

高田遺跡は、今年度1件の調査が行なわれた。遺構は検出されなかったが、男里川の氾濫原と考えられる湧水の激しい砂礫層や、その上層の旧耕作土など層位的には、既往の調査^⑨とほぼ同じような結果が得られた。この旧耕作土は、中世にさかのぼることは明らかであり、調査区周辺の男里川河口付近の土地利用の変遷を知る上で大きな成果があった。

天神ノ森遺跡は1件の調査を報告した。遺跡の中心は小高い砂丘状を呈した地形であり、その大半が神社地である。これまで数件の調査が行なわれていながら、遺跡中心部を調査することがほとんどなかった。本調査も遺跡の南西端にあたるものであるが、これまでの調査と考え合わせると、本遺跡の小高い砂丘の周りは、沼状のヘドロが取り囲んでいたものと判断してよいだろう。

幡代遺跡は、男里遺跡に次ぐ調査件数の多い遺跡である。95-1区は、本年度調査区の中で、現在の集落の中心部分に相当するものと考えられる。近世から近代の多量の瓦や陶磁器が出土し、建物の整地が確認されたことは、当時からほとんど変わることなく居住地として利用されていた証拠であろう。また地山とされた淡黄褐色粘土は、非常に安定した土層であり、更に以前の時代の遺構が検出される可能

性を示唆するものである。

95-2・3区は、直線距離にして16mという非常に近接した場所にありながら、全く異なる層位を示した。東寄りの2区では、安定した黄褐色の粘性シルトの地山が検出された。一方、3区では、対照的に不安定な礫を多く含んだ氾濫原のような地山が検出された。これは、3区が2区よりわずかに金熊寺川に近い位置にあることで、より川の氾濫の影響を受けていたためと考えてよいだろう。なお、2区の黄褐色粘性シルト層は、1区の淡黄褐色粘土層とほぼ対応するものと考えられるが、上面のレベルを見てみると1区は20.6m、2区は18.3mを測り、約2mの比高差が存在する。この差がいかなるものかは今後の課題となるであろう。

94-6区は、現在の集落の北西側に位置し、唯一遺構を検出した調査区である。遺構内からは、近世から近代に至る瓦などが多く出土しており、1区と同じく、現在の集落と近世集落の一致を示すものであろう。また、出土した土製円板は、用途についてはほとんど解明されておらず、今後、近世農村における生活実態の研究も必要となるだろう。

岡中遺跡では1件の調査が行なわれた。既往の調査^⑩により、岡中遺跡は中世初頭を上限とする遺跡であり、ほぼ現在の集落部分と重複しているものと考えられている。本調査においても、鎌倉時代を上限とする遺物や集落に関連したと考えられる遺構が多く確認されたことで、本遺跡の性格がより一層明確になった。

次に、市域の東側の遺跡群について考えてみたい。樫井川は、本市と東側の泉佐野市、田尻町を分ける男里川と並ぶ重要な河川である。この樫井川の支流である新家川右岸流域に、本年度報告の下村遺跡は立地している。これまで中世から近世のものしか知られていなかったが、今年度の調査によってこれまでのデータを大きくさかのぼる弥生時代の遺構・遺物を確認するに至った。

これまで、樫井川及び新家川流域においては、向井山遺跡^⑪、新家遺跡^⑫など弥生時代中期の遺跡は、ある程度知られていた。そのなかで下村遺跡は、これらの中で最も下流に位置するものである。この3遺跡は、いずれの地点からも見通しのきく場所にあり、これら遺跡相互の有機的な結合はほぼ間違いないものであろう。いずれこの流域には、同じような小規模な弥生集落が発見される可能性がある。また、この後に出現する高地性集落である新家オドリ山遺跡^⑬と、これら遺跡の関係も間違いないものであり、これまで考えられてきた新家オドリ山遺跡の出現基盤の再検討を迫られそうである。

和泉南部地域においても、和泉北部と同様に「拠点集落」を中心に共同体的形成がなされ弥生時代後期になって解体したと考えられている^⑭。本調査の成果により新家川流域にも、現在把握されている拠点集落を中心とした集団とは別に、新たな集団が想定できることになるだろう。

一方、兎田遺跡は、これまで大半が、樫井川左岸地域で数少ない沖積段丘面上に立地すると考えられていた遺跡である。

95-1区は、ほとんど手つかずだった現在の兎田集落の中心部での調査である。本調査においては、予想されていた沖積段丘面は検出されず、むしろ氾濫原に近い状態で、地山の結果が得られた。また、かなり分厚い整地土は集落形成時に、川の氾濫による水気を避けるために施されたものと考えられることができるだろう。しかし、出土遺物からみると現在の集落の初源は、中世と考えてほぼ間違いないものである。また、検出されたピットは、この初源となる中世の集落に伴うものと考えてよいだろう。

95-2区は、樫井丘陵の麓部分にあたる。この付近の調査もほとんど手つかずの状態であった。1区

同様に、下層は河川の堆積による砂層が認められたことで、樫井川の氾濫は、遺跡の西端の丘陵のすぐ下にまで及んでいたことが明らかになった。また、中世の遺物が出土したことは、当該期の集落が存在した証拠となるものである。

以上のように、ごく簡単であるがまとめを行ってきた。いずれも事実報告の確認という形に終始せざるを得なかったが、本市において、本格的に発掘調査が行なわれるようになってかなりの年数が経過している。いずれも点的な調査であったものの、この間に我々は相当量のデータを得てきているのは事実である。

特に、今年度の男里遺跡における調査成果の衝撃は、計り知れないものがあった。我々は、これらをいち早く集約し、これまではデータ不足のために固定観念となりつつあった旧来の考えを変革して行かなければならないであろう。言うまでもなくこれを実現することは、我々個々の調査担当者の学問的研鑽であるということを心に念じつつ、今年度の総括としたい。

- 註 ① 家根祥多「近畿地方の土器」『縄文文化の研究4』雄山閣（1981）
家根祥多「縄文土器から弥生土器へ」『縄文から弥生へ』帝塚山考古学研究所（1984）
泉拓良「西日本の凸帯文土器の編年」『文化財学報第八集』奈良大学文学部文化財学科（1990）
- ② （財）大阪市文化財協会『長原遺跡発掘調査報告Ⅱ』（1982）
- ③ 泉佐野市教育委員会『船岡山遺跡B地点発掘調査報告書』（1985）
- ④ 船岡山遺跡B地点の突帯紋土器も生駒系の胎土のものが非常に多くあるが、本調査における資料の生駒系の胎土と比較してやや白っぽい。また、角閃石の混入量も少なく、かなり相違点があることに気付く。またb・c類に分類されている土器も、本調査出土のA-I類、B-I類とはやや異なるようである。一方、同じく実見させて頂いた三軒屋遺跡から出土した突帯紋土器もかなりの割合で生駒系の胎土のものがあるが、これらは本調査の資料とほとんど同じものである。また突帯は、同じくA-I類に近いものが多いようである。
- ⑤ 中村貞吉「和歌山県下の縄文晩期」『縄文から弥生へ』帝塚山考古学研究所（1984）
大野薫「紀泉の突帯紋土器」『泉佐野市史研究 第1号』泉佐野市史編纂委員会（1995）
この他、近畿においては兵庫県大開遺跡、上沢遺跡等々でも、弥生土器と共伴する突帯紋土器はこのような傾向がより認められるようである。
神戸市教育委員会『大開遺跡発掘調査報告書』（1993）
神戸市教育委員会『上沢遺跡発掘調査報告書』（1995）
- ⑥ 泉南市教育委員会『市道市場岡田線新設に伴う岡田西・氏の松遺跡発掘調査報告書』（1995）
- ⑦ 泉南市教育委員会「男里遺跡・Ⅱ」『泉南市文化財年報No.1』（1995）
- ⑧ （財）大阪府埋蔵文化財協会『男里遺跡』（1994）
- ⑨ 泉南市教育委員会「高田遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X』（1993）
- ⑩ 泉南市教育委員会「岡中遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書V』（1988）
- ⑪ 泉南市教育委員会『泉南市向井山遺跡発掘調査報告書』（1971）
- ⑫ 泉南市教育委員会「新家遺跡」『泉南市文化財年報No.1』（1995）
- ⑬ 泉南市史編纂委員会『泉南市史 通史編』（1986）
久世仁士「泉州の遺跡発掘物語4 新家オドリ山遺跡」『歴研通信第12号』泉南市歴史研究会（1994）
- ⑭ 石橋広和「弥生終末期における和泉南部地域の集落遺跡の変化」『古代第99号』早稲田大学考古学会（1995）

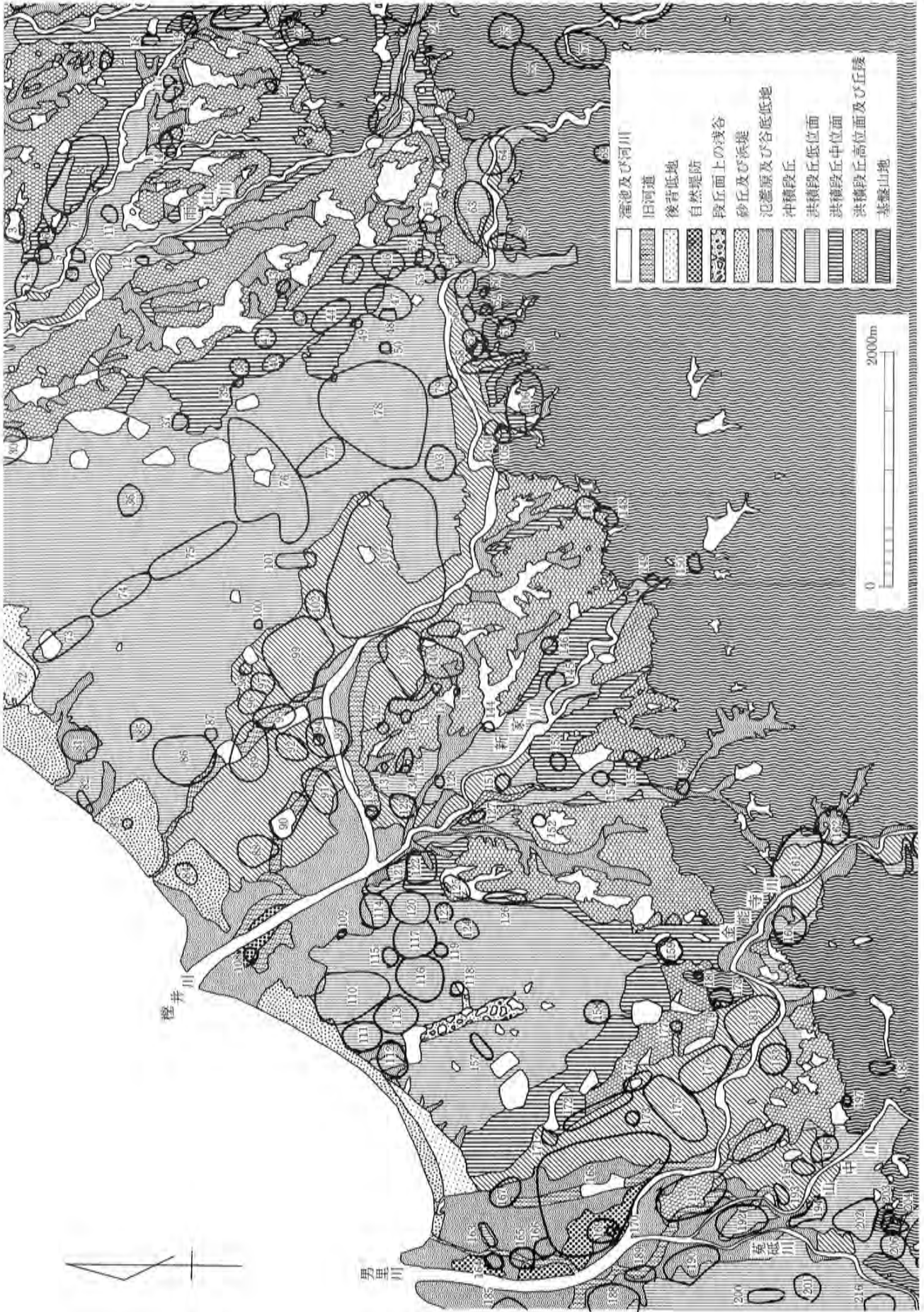
第8表 文化財一覧表

1	正法寺跡	46	北ノ前遺跡	91	樫井西遺跡	136	新家オドリ山南遺跡	181	岡中遺跡
2	小垣内遺跡	47	野々宮遺跡	92	藤波遺跡	137	フキアゲ山西遺跡	182	高田山古墳群
3	大谷池遺跡	48	総福寺天満宮本殿	93	樫井城跡	138	引谷池窯跡	183	岡中西遺跡
4	大久保B遺跡	49	宮ノ前遺跡	94	奥家住宅	139	兎田遺跡	184	雨山南遺跡
5	下高田遺跡	50	垣外遺跡	95	道ノ池遺跡	140	フキアゲ山東遺跡	185	福島遺跡
6	紺屋遺跡	51	屯田遺跡	96	岡ノ崎遺跡	141	フキアゲ山1号墳	186	尾崎海岸遺跡
7	口無池遺跡	52	八王子遺跡	97	中菖蒲遺跡	142	フキアゲ山2号墳	187	馬川北遺跡
8	東門寺跡	53	慈眼院金堂・多宝塔	98	岸ノ下遺跡	143	兎田古墳群	188	馬川遺跡
9	降井家屋敷跡	54	日根神社遺跡	99	諸目遺跡	144	池尻遺跡	189	下出北遺跡
10	大久保C遺跡	55	西ノ上遺跡	100	城ノ塚古墳	145	中の川遺跡	190	室堂遺跡
11	中家住宅	56	川原遺跡	101	禪興寺跡	146	岩の前遺跡	191	平野寺(長楽寺)跡
12	大久保A遺跡	57	母山遺跡	102	ダイジョウ寺跡	147	別所北遺跡	192	向出遺跡
13	五門北古墳	58	母山近世墓地	103	上之郷遺跡	148	別所遺跡	193	高田西遺跡
14	五門遺跡	59	向井山遺跡	104	向井代遺跡	149	高野遺跡	194	向山遺跡
15	五門古墳	60	鏡塚古墳	105	意賀美神社本殿	150	昭和池遺跡	195	高田南遺跡
16	大浦中世墓地	61	梨谷遺跡	106	向井池遺跡	151	上村遺跡	196	和泉鳥取遺跡
17	大浦遺跡	62	笹ノ山遺跡	107	三軒屋遺跡	152	狐池遺跡	197	雨山遺跡
18	甲田家住宅	63	土丸遺跡	108	川原遺跡	153	上野中道遺跡	198	内畑遺跡
19	久保B遺跡	64	土丸南遺跡	109	岡田東遺跡	154	芋掘遺跡	199	皿田池古墳
20	鳥羽殿城跡	65	雨山城跡	110	岡田遺跡	155	石ヶ原遺跡	200	正方寺遺跡
21	墓の谷遺跡	66	土丸城跡	111	氏の松遺跡	156	高倉山南遺跡	201	西畑遺跡
22	来迎寺本堂	67	下大木遺跡	112	座頭池遺跡	157	本田池遺跡	202	自然田遺跡
23	池ノ谷遺跡	68	大木遺跡	113	岡田西遺跡	158	上代石塚遺跡	203	玉田山遺跡
24	成合寺遺跡	69	稲倉池北方遺跡	114	新伝寺遺跡	159	信之池遺跡	204	玉田山古墳群
25	山ノ下城跡	70	大西遺跡	115	中小路北遺跡	160	滑瀬遺跡	205	玉田山須恵器窯跡
26	山出遺跡	71	松原遺跡	116	中小路西遺跡	161	六尾遺跡	206	寺田山遺跡
27	上瓦屋遺跡	72	中開遺跡	117	中小路遺跡	162	六尾南遺跡	207	黒田西遺跡
28	湊遺跡	73	末廣遺跡	118	坊主池遺跡	163	天神ノ森遺跡	208	鳥取北遺跡
29	壇波羅密寺跡	74	安松遺跡	119	中小路南遺跡	164	キレト遺跡	209	鳥取遺跡
30	壇波羅遺跡	75	長滝遺跡	120	北野遺跡	165	高田遺跡	210	鳥取南遺跡
31	佐野王子跡	76	植田池遺跡	121	一岡神社遺跡	166	男里北遺跡	211	黒田南遺跡
32	上町東遺跡	77	郷ノ芝遺跡	122	海会寺跡	167	戎畑遺跡	212	神光寺(蓮池)遺跡
33	市場東遺跡	78	日根野遺跡	123	大苗代遺跡	168	男里遺跡	213	三味谷遺跡
34	若宮遺跡	79	机場遺跡	124	仏性寺跡	169	光平寺跡	214	三升五合山遺跡
35	上町遺跡	80	棚原遺跡	125	海営宮池遺跡	170	光平寺石造五輪塔	215	小口谷遺跡
36	俵屋遺跡	81	羽倉崎東遺跡	126	市場遺跡	171	男里東遺跡	216	井関遺跡
37	北尻遺跡	82	羽倉崎遺跡	127	向井山遺跡	172	長山遺跡	217	石田山遺跡
38	岡口遺跡	83	嘉祥神社本殿	128	新家遺跡	173	山ノ宮遺跡	218	西鳥取遺跡
39	中嶋遺跡	84	道ノ池遺跡	129	下村遺跡	174	前田池遺跡	219	戎遺跡
40	小塚遺跡	85	羽倉崎上町遺跡	130	下村北遺跡	175	幡代遺跡	220	貝掛遺跡
41	十二谷遺跡	86	船岡山遺跡	131	下村1号墳	176	幡代南遺跡	221	金剛寺遺跡
42	丁田遺跡	87	岡本庵寺	132	新家オドリ山東遺跡	177	奥ノ池遺跡	222	塚谷古墳群
43	新池尻遺跡	88	田尻遺跡	133	新家オドリ山遺跡	178	林昌寺跡		
44	大坪遺跡	89	船岡山南遺跡	134	下村2号墳	179	林昌寺瓦窯跡		
45	市堂遺跡	90	夫婦池遺跡	135	新家古墳群	180	林昌寺銅鐸出土地		

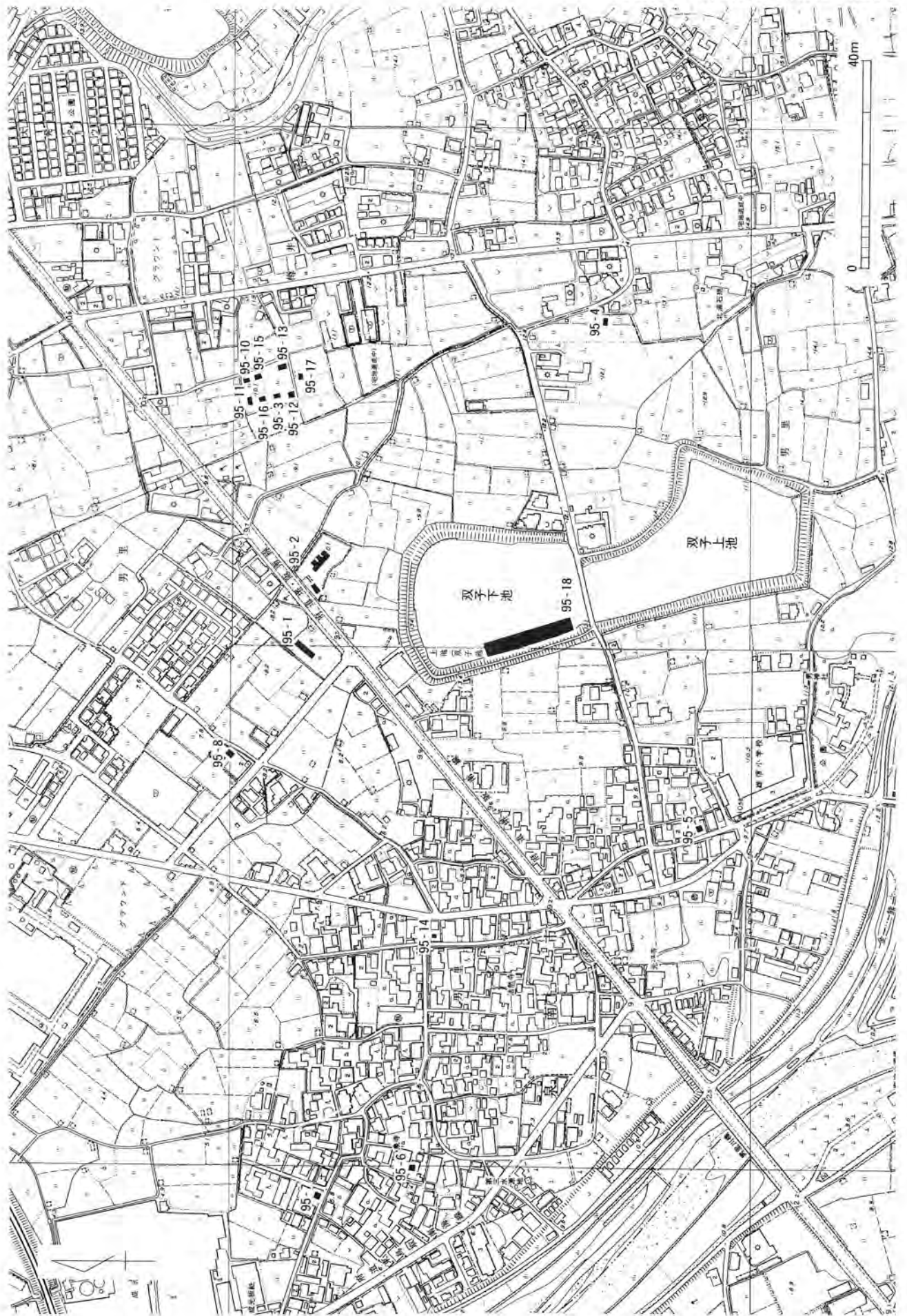
版 圖



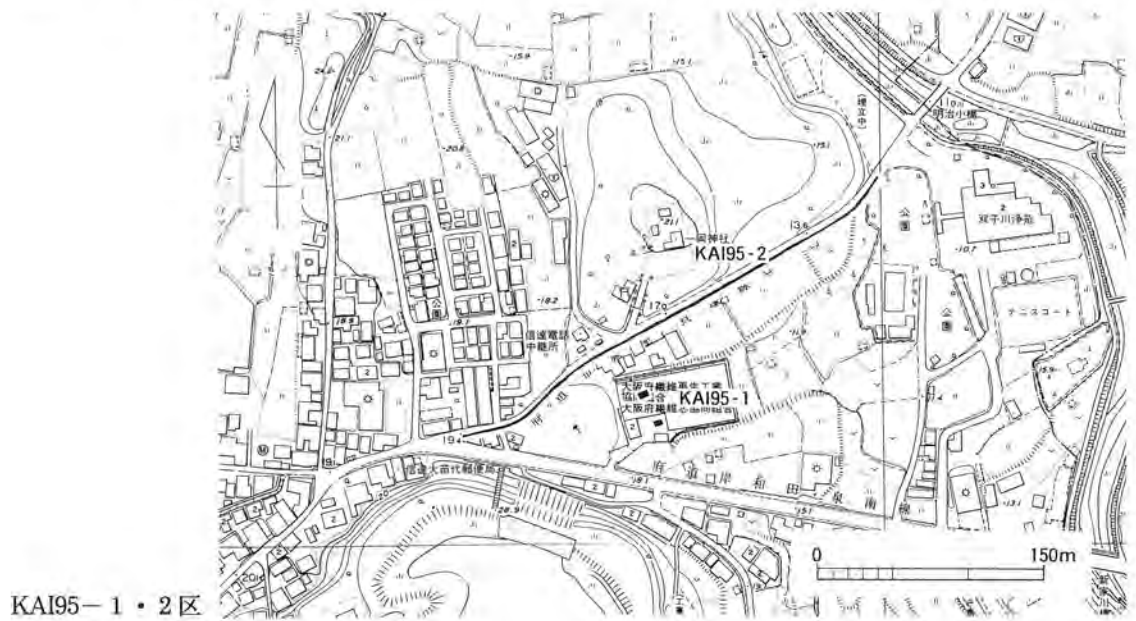
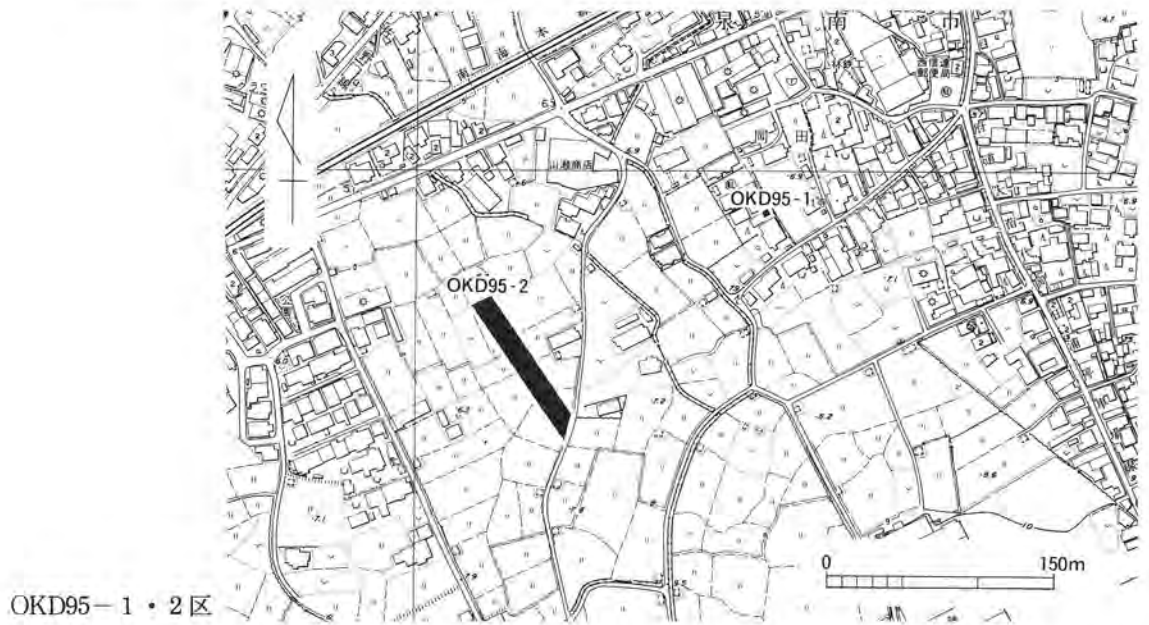
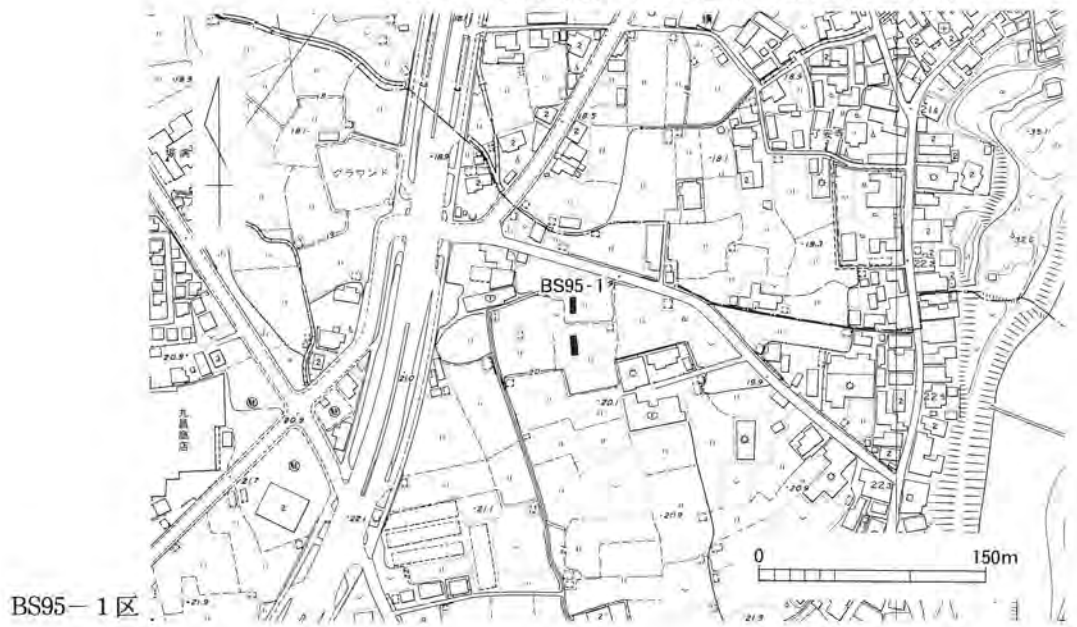
伊勢藩中心



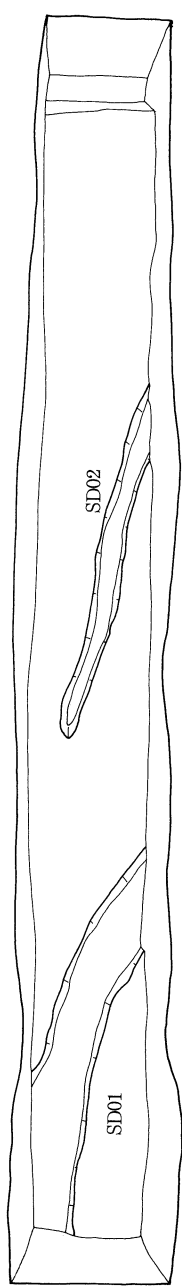
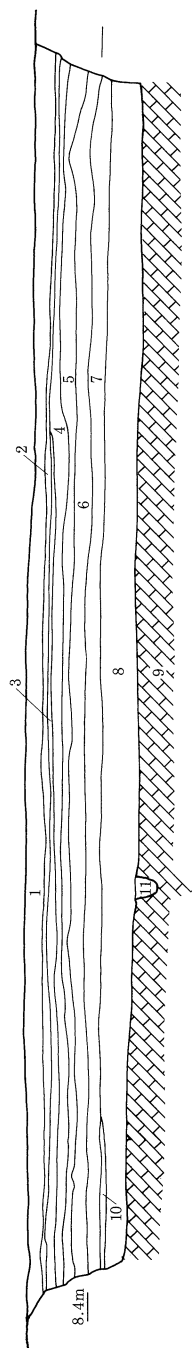
PL. 3 男里遺跡調査区位置図



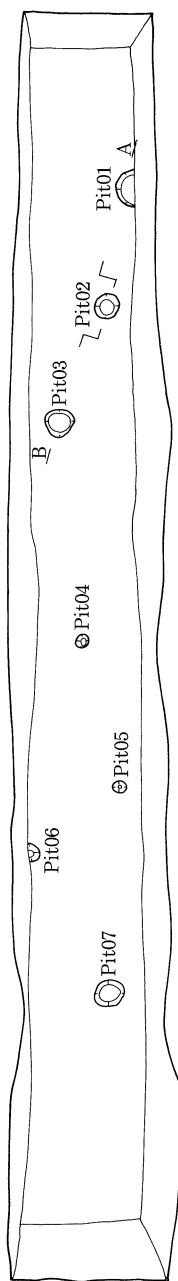
PL. 4 仏性寺跡・岡田遺跡・海会寺跡調査区位置図



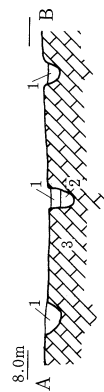
1. 灰色現代耕作土
2. 灰色混じり黄色土
3. 明褐色土
4. 灰色混じり暗黄褐色土
5. 灰色混じり暗黄褐色土 (上層より灰色濃)
6. 褐色混じり灰色土
7. 明黄褐色土
8. 黒褐色粘性土
9. 暗褐色粘質土
10. 黒褐色粘質土 (SD01)
11. 黒褐色粘質土 (Pit06)



第1遺構面



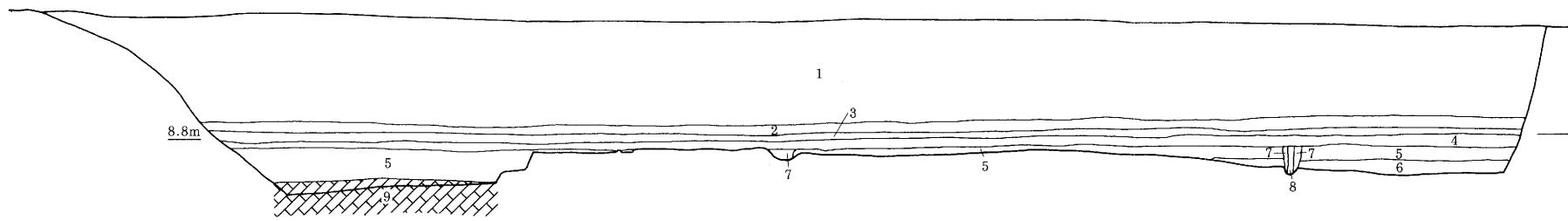
第2遺構面



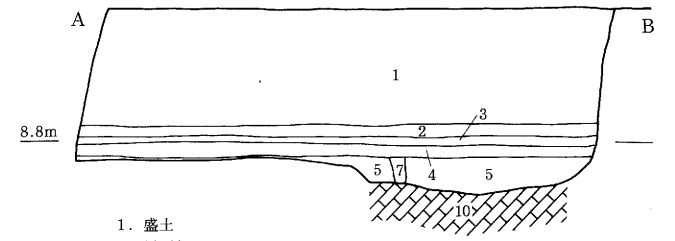
1. 黒褐色粘質土
2. 褐色土
3. 暗褐色土

Pit01~03断面図



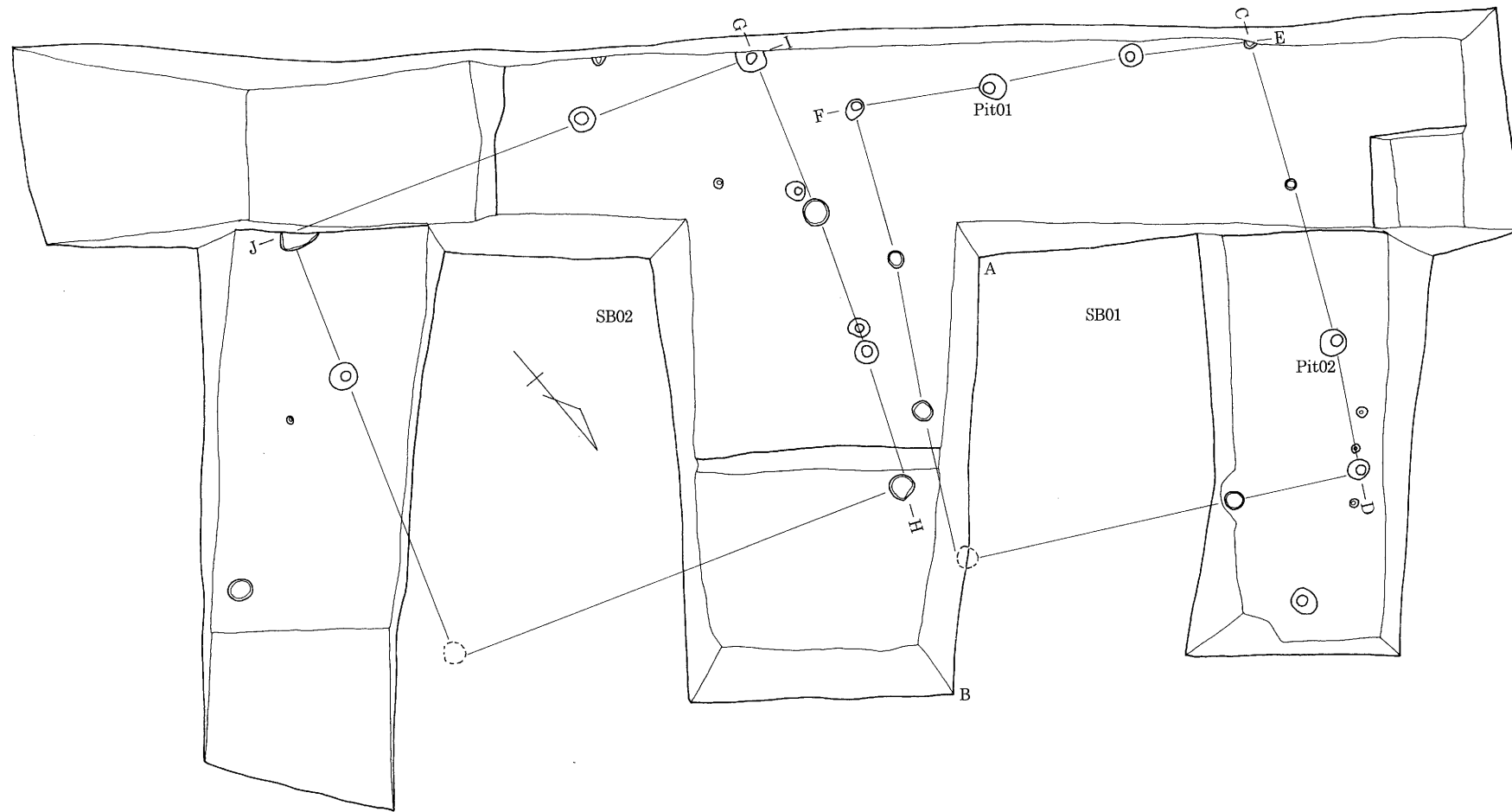


南壁断面図

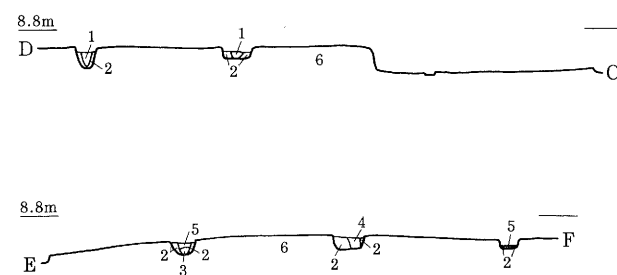


A-B間断面図

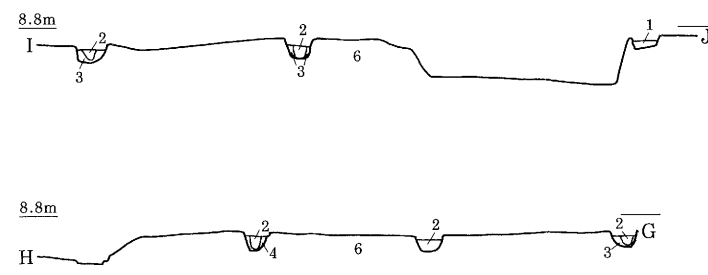
- 1. 盛土
- 2. 黒灰色シルト
- 3. 灰黄色砂質シルト
- 4. 暗灰黄色砂質シルト
- 5. 黒褐色粘性シルト
- 6. 黒色粘性シルト
- 7. 褐色砂質シルト
- 8. 暗褐色粘性シルト
- 9. 褐色シルト
- 10. 黒灰色砂礫



第1トレンチ断面図及び平面図

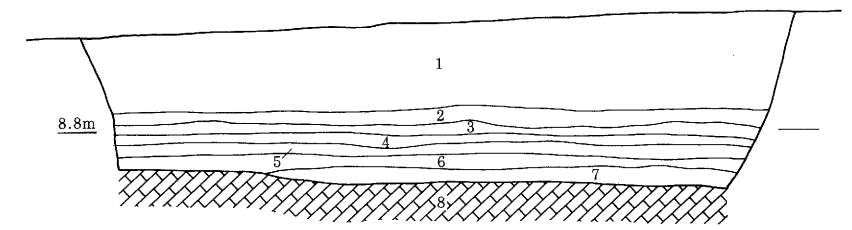


SB01断面図



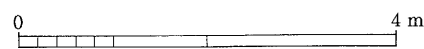
SB02断面図

- 1. 褐色砂質シルト
- 2. 暗褐色シルト
- 3. 極暗褐色粘性シルト
- 4. 黒褐色粘性シルト (炭混じり)
- 5. 褐色砂質シルト (炭混じり)
- 6. 黒褐色粘性シルト

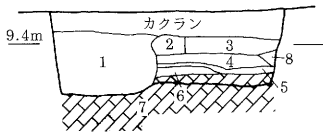


第2トレンチ北壁断面図

- 1. 盛土
- 2. 黒灰色シルト
- 3. 灰色砂質シルト
- 4. 暗灰黄色砂質シルト
- 5. 灰褐色砂質シルト
- 6. 黄灰色粘性シルト
- 7. 黒褐色粘性シルト
- 8. 黒色砂礫

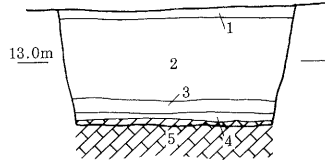


PL. 7 男里遺跡・高田遺跡・天神ノ森遺跡調査区



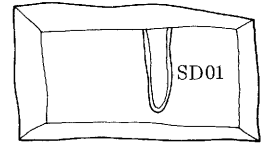
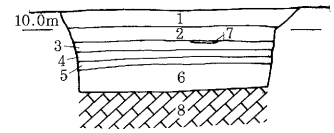
1. 表土及び黒色土
2. 暗黄褐色土
3. 明黄褐色混じり灰褐色土
4. 灰褐色土
5. 明黄褐色混じり灰褐色土
6. 淡黄褐色土
7. 明黄褐色礫混じり土
8. 明黄褐色土

ON95-5区東壁断面図



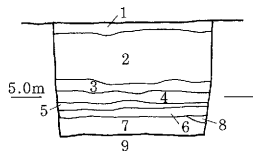
1. 灰色現代耕作土
2. 盛土
3. 暗灰色土
4. 灰褐色混じり淡黒褐色土
5. 淡黄褐色礫混じり土

ON95-4区西壁断面図



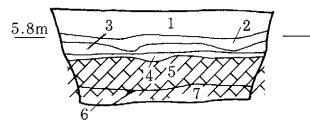
1. 灰色現代耕作土
2. 褐色砂質シルト
3. 暗灰褐色砂質シルト
4. 暗褐色粘性シルト
5. 暗黄褐色粘性シルト
6. 黒褐色粘性シルト
7. 灰褐色砂質シルト
8. 黄褐色粘性シルト

ON95-3区平面図及び断面図



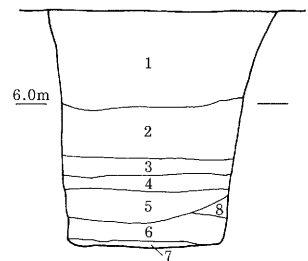
1. 表土
2. 盛土
3. 灰色耕作土
4. 褐色床土
5. 淡黄褐色砂質土
6. 灰褐色砂混じり礫
7. 暗黄褐色砂混じり礫
8. 茶褐色砂
9. 黄褐色細砂

ON95-7区西壁断面図



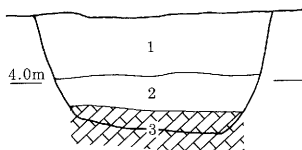
1. 盛土
2. 黄褐色粗砂
3. 灰褐色砂質シルト
4. 褐色砂質シルト
5. 黄褐色粘性シルト
6. 暗黄褐色粘性シルト
7. 暗褐色砂礫

ON95-6区北壁断面図



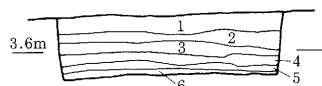
1. 明褐色礫混じり土
2. 暗灰色粘土
3. 灰白色粘土
4. 灰褐色シルト
5. 褐色混じり灰白色シルト
6. 灰褐色シルト
7. 灰褐色粘土
8. 褐色砂礫

ON95-8区北壁断面図

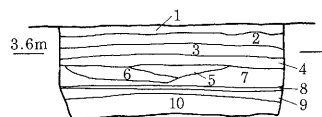


1. 盛土
2. 明黄褐色粘土混じり青灰色シルト
3. 青灰色シルト

TN94-1区北壁断面図



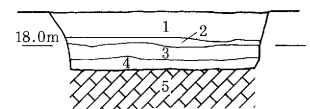
第1トレンチ北壁断面図



第2トレンチ北壁断面図

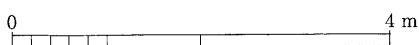
1. 灰色現代耕作土
2. 明赤褐色床土
3. 灰黄褐色土
4. 黄灰褐色土
5. 明黄灰褐色粘性土
6. 灰褐色砂礫
7. 黄灰褐色粘土
8. 赤褐色砂礫
9. 灰褐色砂礫
10. 灰褐色砂

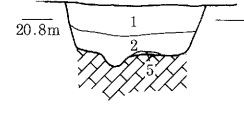
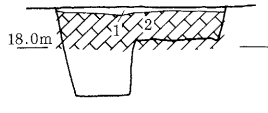
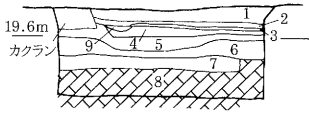
KD95-1区調査区



1. 灰色現代耕作土
2. 淡黄褐色土
3. 黒褐色ブロック混じり褐色土
4. 淡褐色土
5. 褐色混じり暗黄褐色土

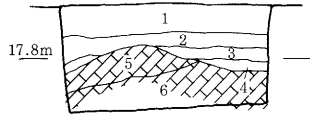
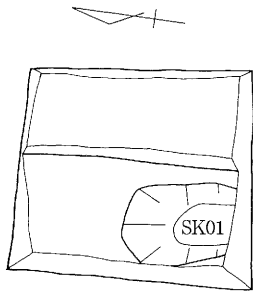
ON95-9区北壁断面図





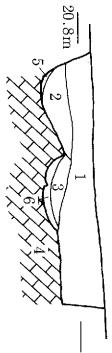
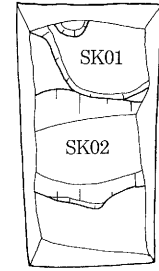
- 1. 表土
- 2. 黄褐色粘性シルト

HT95-2区南壁断面図



- 1. 灰色現代耕作土
- 2. 黄褐色粘性土
- 3. 茶褐色混じり黄褐色粘性土
- 4. 淡茶褐色粘性土
- 5. 黄褐色礫混じり土
- 6. 黄褐色礫

HT95-3区東壁断面図

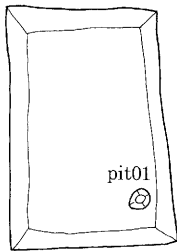
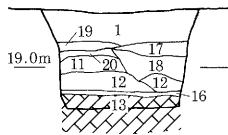


- 1. 盛土
- 2. 暗黒灰色粘土 (SX01)
- 3. 淡黒灰色粘土 (SX02)
- 4. 淡黄褐色粘土
- 5. 淡灰白色粘土 (SX01)
- 6. 暗灰褐色 (SX02)

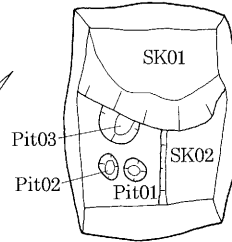
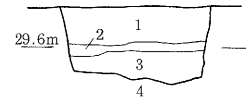
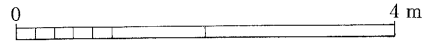
- 1. 表土
- 2. 黄褐色土
- 3. 黒褐色土
- 4. 灰褐色土 (焼土混じり)
- 5. 茶灰褐色土 (炭粒混じり)
- 6. 灰褐色混じり茶褐色土
- 7. 黄褐色土
- 8. 暗黄褐色土
- 9. 暗茶褐色土

HT94-6区平面図及び東壁土層断面図

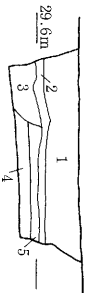
HT95-1区平面図及び断面図



- 1. 表土及び盛土
- 2. 明黄褐色混じり灰褐色土
- 3. 淡暗灰褐色土
- 4. 灰褐色土
- 5. 暗灰褐色土
- 6. 黄橙色土
- 7. 灰褐色土
- 8. 暗灰褐色土 (炭混じり)
- 9. 暗黄褐色砂質土
- 10. 淡黄褐色土
- 11. 淡黄色砂質土
- 12. 暗茶褐色土 (炭混じり)
- 13. 茶褐色礫混じり土
- 14. 灰褐色混じり茶褐色土
- 15. 淡茶褐色土 (Pit01, 炭混じり)
- 16. 黄褐色混じり茶褐色土
- 17. 淡黄色土
- 18. 淡灰褐色土
- 19. 明黄褐色砂
- 20. 茶褐色混じり明黄色土

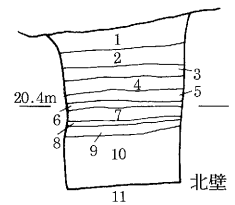
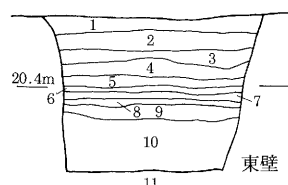


- 1. 表土
- 2. 明黄褐色土
- 3. 暗褐色土 (SK01)
- 4. 礫混じり暗褐色土
- 5. 褐色土 (SK02)



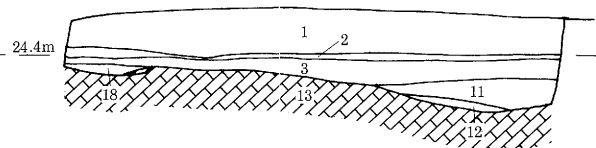
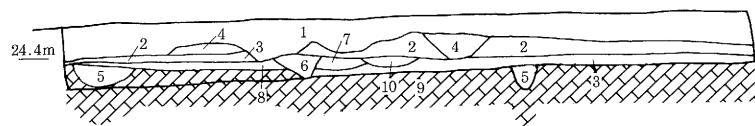
OK95-1区平面図及び断面図

- 1. 盛土
- 2. 灰白色現代耕作土
- 3. 黄灰褐色粘土
- 4. 灰色混じり明黄褐色土
- 5. 茶褐色混じり灰褐色土
- 6. 明茶褐色土
- 7. 灰褐色土
- 8. 明黄褐色土
- 9. 灰褐色混じり暗茶褐色土
- 10. 淡茶褐色砂
- 11. 淡茶褐色礫混じり砂



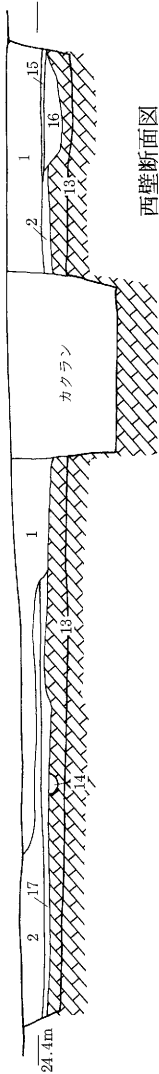
US95-1区平面図及び断面図

US95-2区断面図

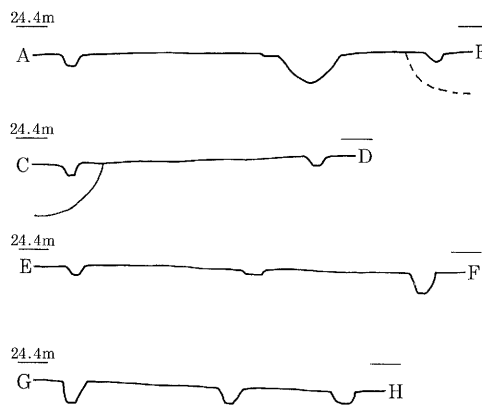
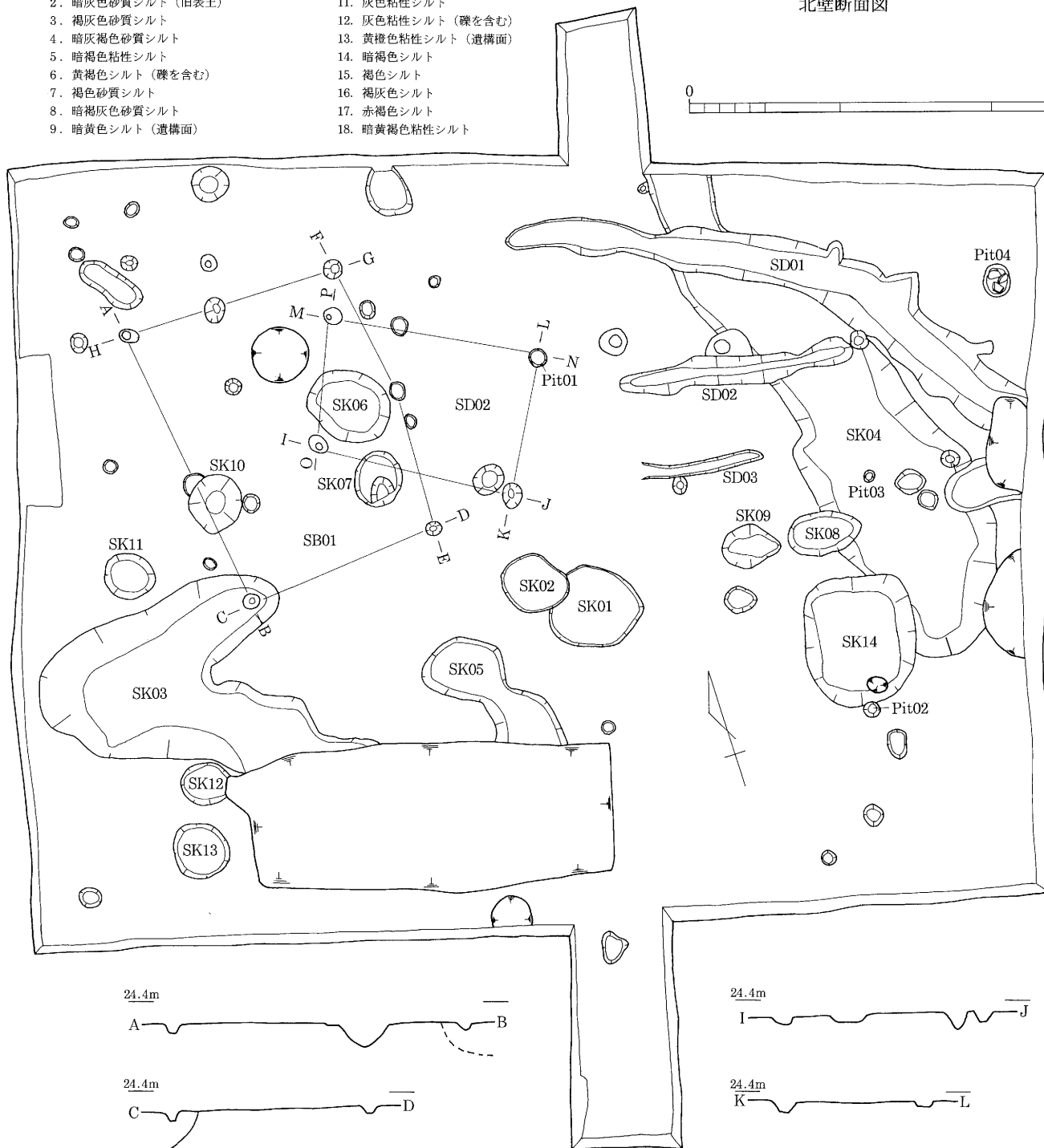


北壁断面図

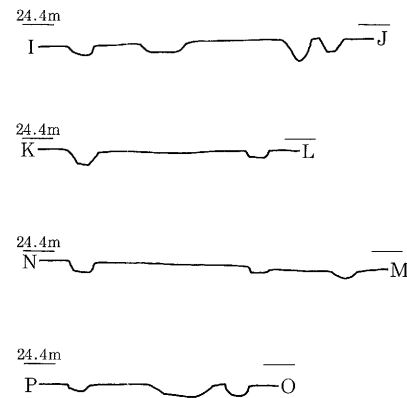
- | | |
|-------------------|--------------------|
| 1. 盛土 | 10. 暗黄褐色シルト (礫を含む) |
| 2. 暗灰色砂質シルト (旧表土) | 11. 灰色粘性シルト |
| 3. 褐色砂質シルト | 12. 灰色粘性シルト (礫を含む) |
| 4. 暗灰褐色砂質シルト | 13. 黄褐色粘性シルト (遺構面) |
| 5. 暗褐色粘性シルト | 14. 暗褐色シルト |
| 6. 黄褐色シルト (礫を含む) | 15. 褐色シルト |
| 7. 褐色砂質シルト | 16. 褐色シルト |
| 8. 暗褐灰色砂質シルト | 17. 赤褐色シルト |
| 9. 暗黄色シルト (遺構面) | 18. 暗黄褐色粘性シルト |



西壁断面図



SB01エレベーション

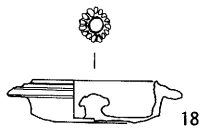
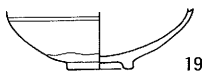
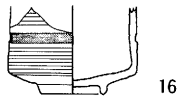
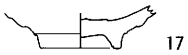
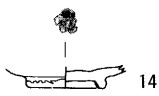
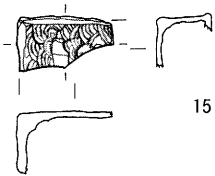
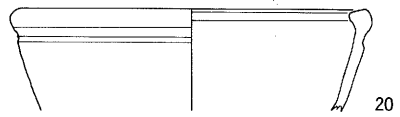
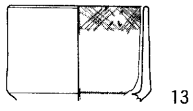
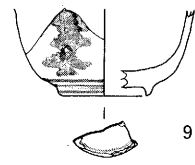
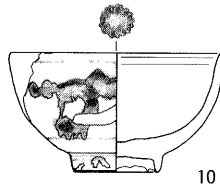
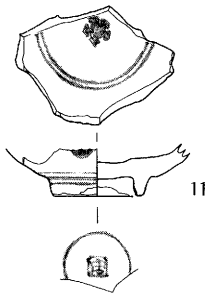
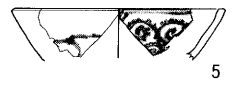
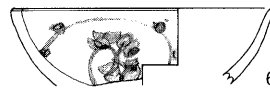
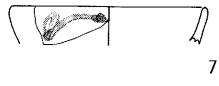
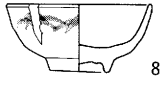
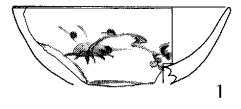
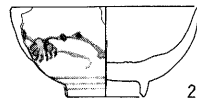
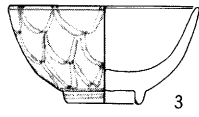


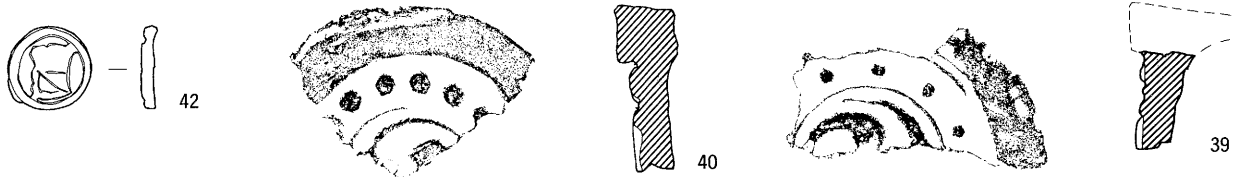
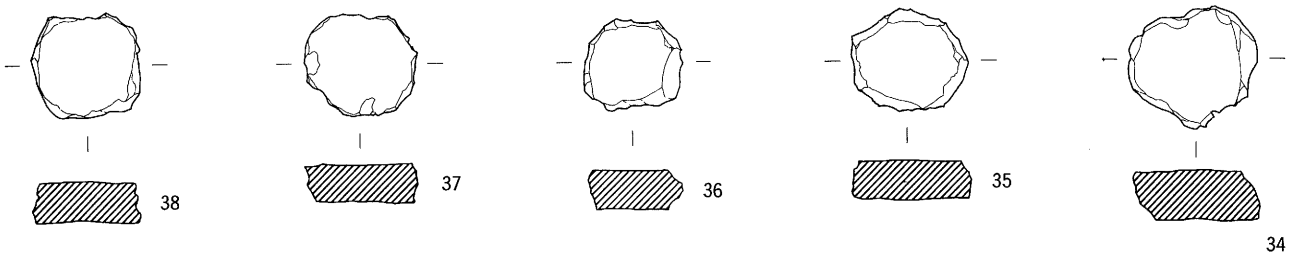
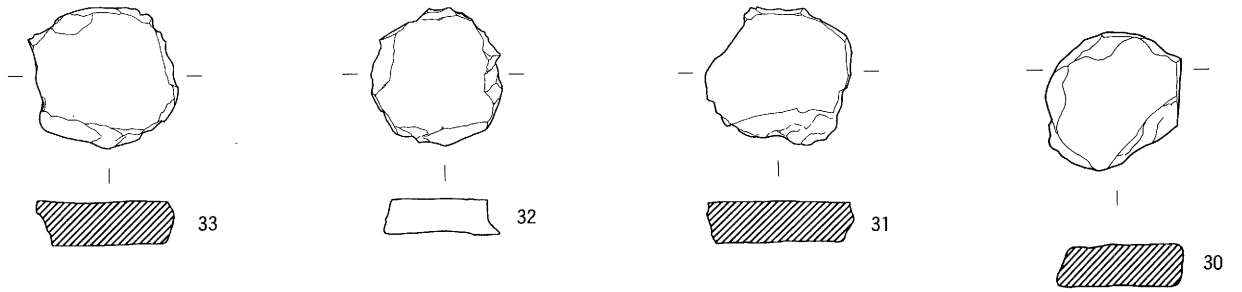
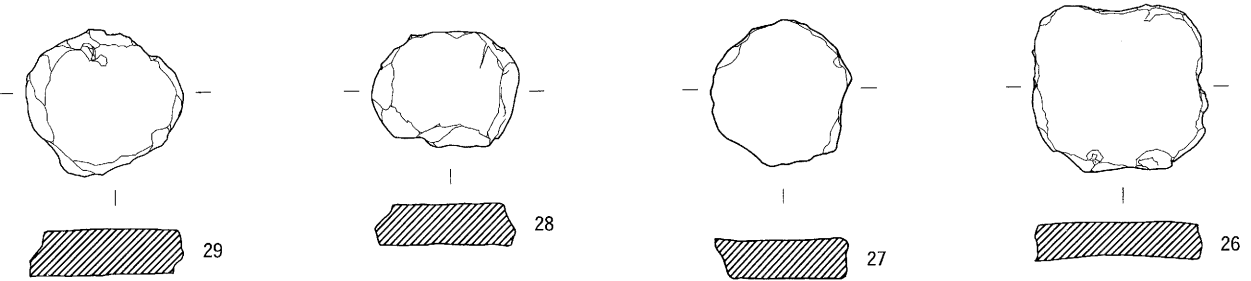
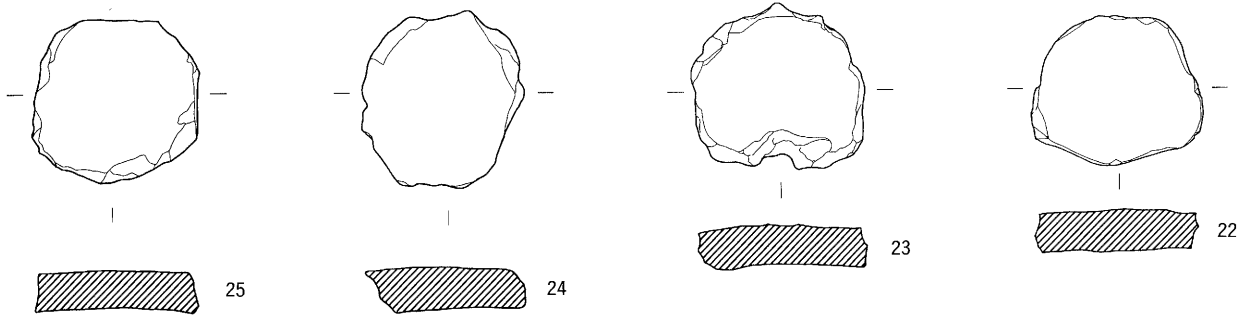
SB02エレベーション

PL.10 男里遺跡95-1区出土の土器



PL.11 幡代遺跡94-6区出土の遺物①







SD01検出状況（西から）



第1遺構面全景（西から）



第2遺構面全景（西から）



同詳細（西から）



Pit01~03 (西から)



Pit01~03 (北から)



第1トレンチ全景（南から）



第1トレンチ全景（西から）



SB01・02 (東から)



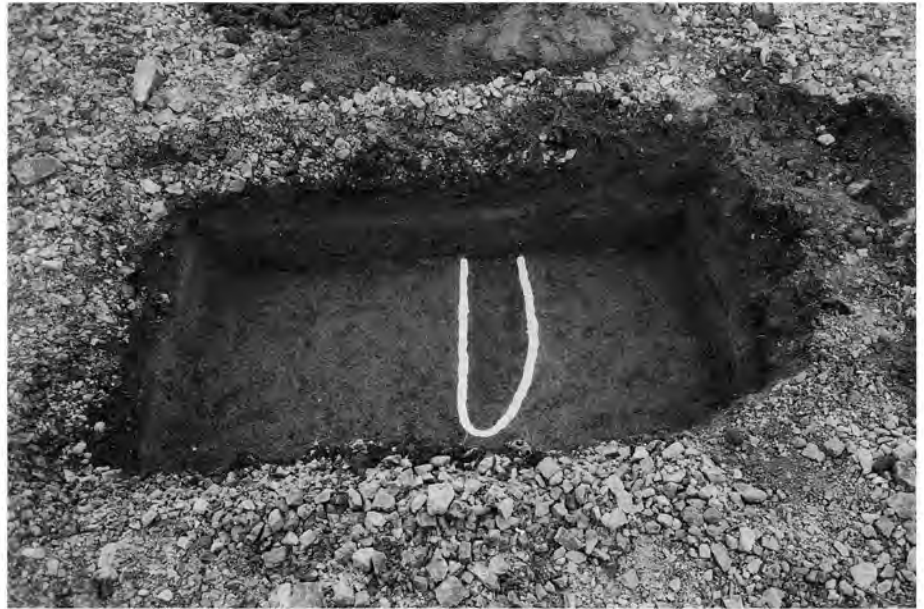
SB01・02 (北から)



SB01・02 (南から)



第2トレンチ全景 (西から)



上層
(西から)



中層
(西から)



下層
(西から)



95-4区
(南から)



95-5区
(南から)



95-6区
(東から)



95-7区
(南から)



95-8区
(西から)



95-9区
(西から)



KD95-1区
第1トレンチ
(東から)



KD95-1区
第2トレンチ
(東から)



TN94-1区
(東から)



95-1区
(北から)



95-2区
(北から)



95-3区
(南から)



HT94-6区
(北から)



OK95-1区上層
(南から)



OK95-1区下層
(南から)



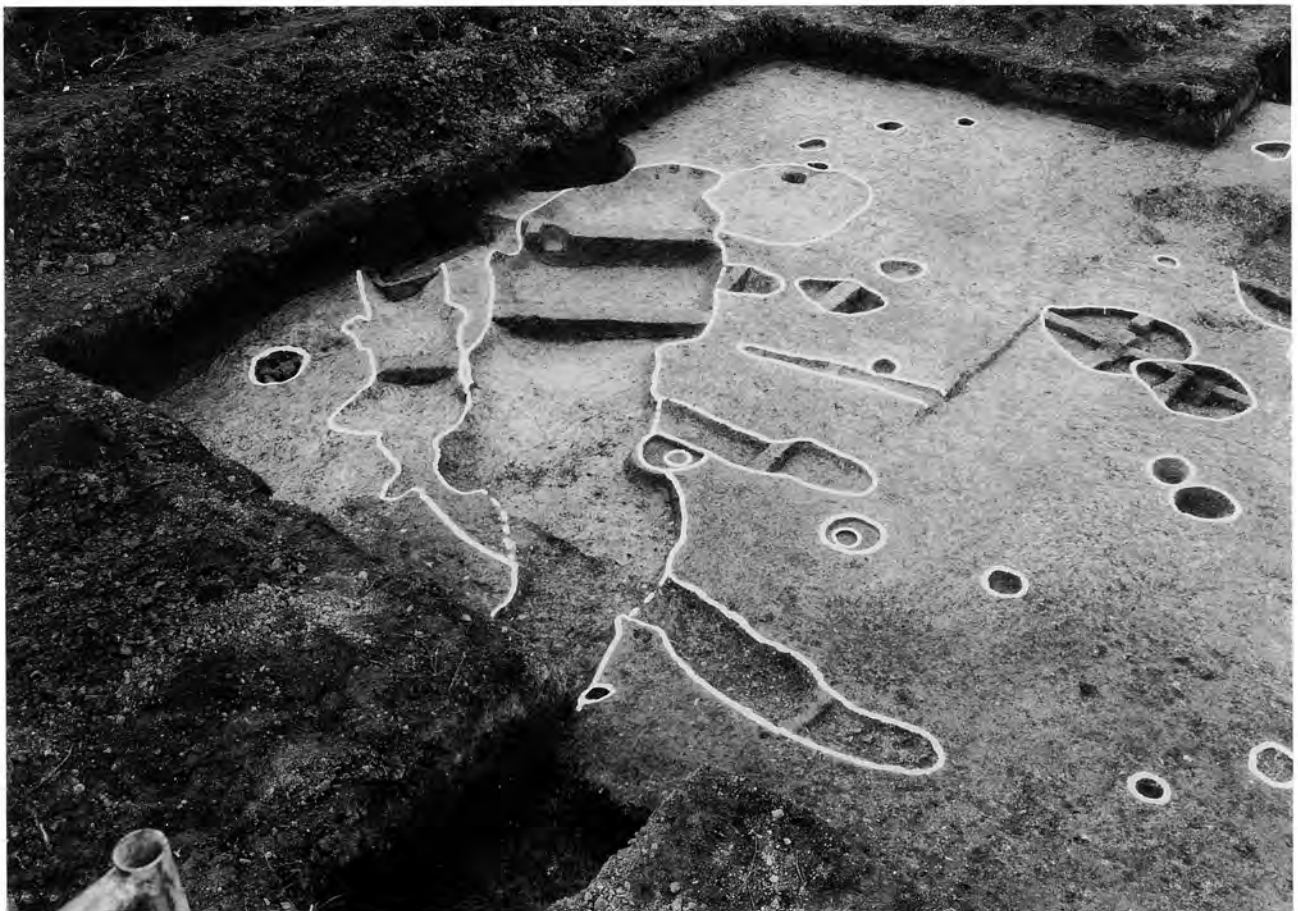
全景（北から）



SB01・02（北から）



SK04 (南から)



SK04 (北から)



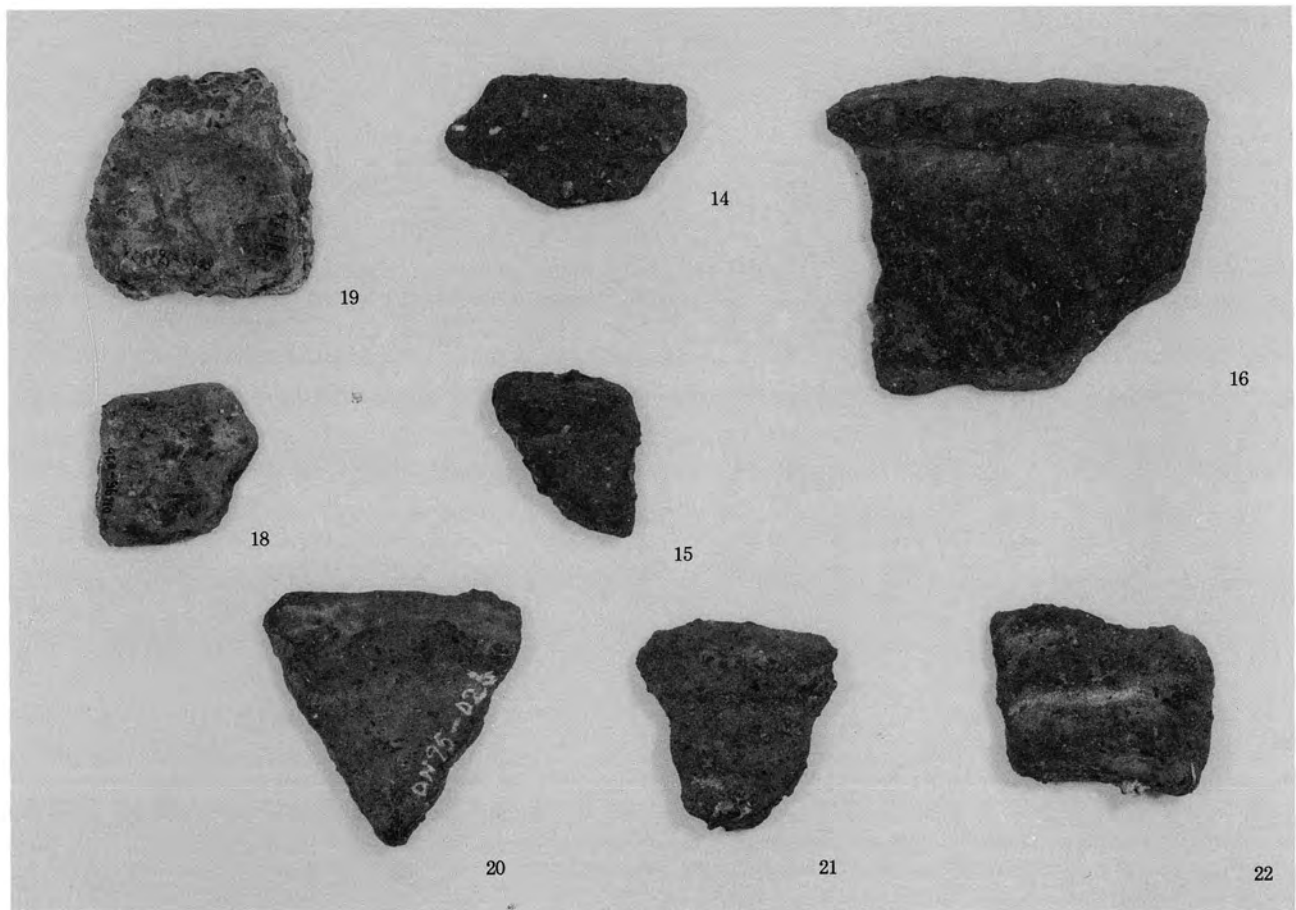
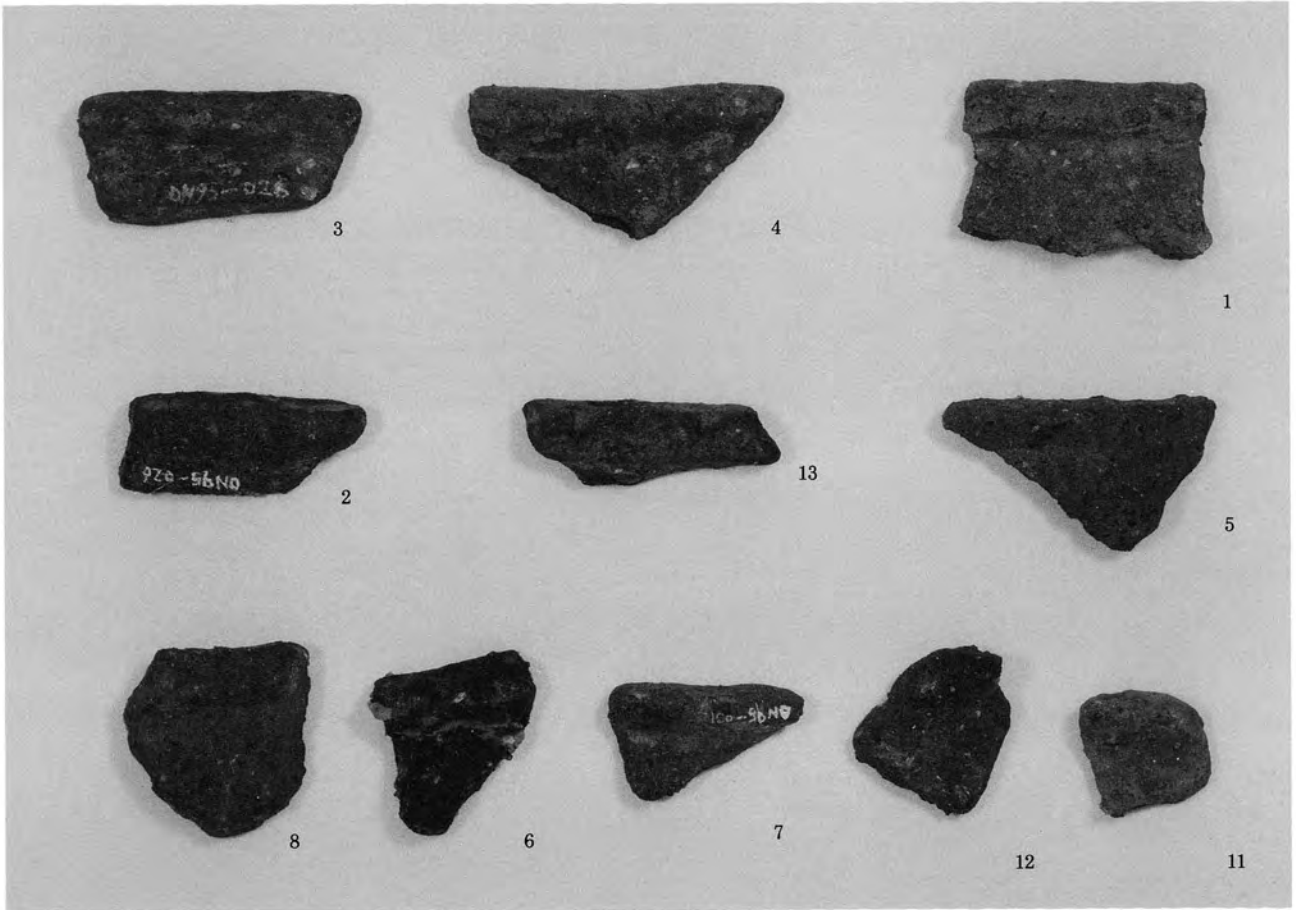
95-1区
(北から)

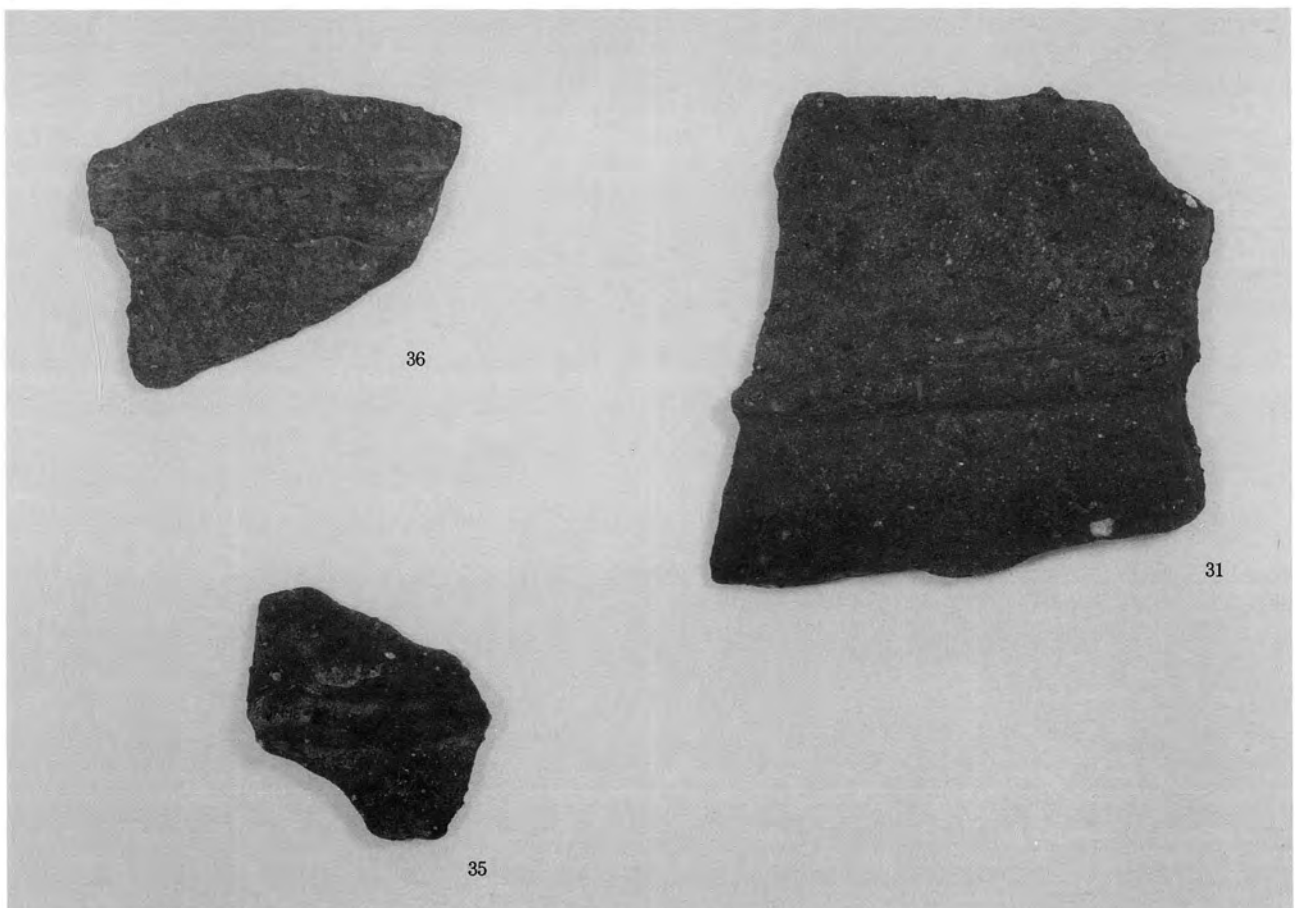
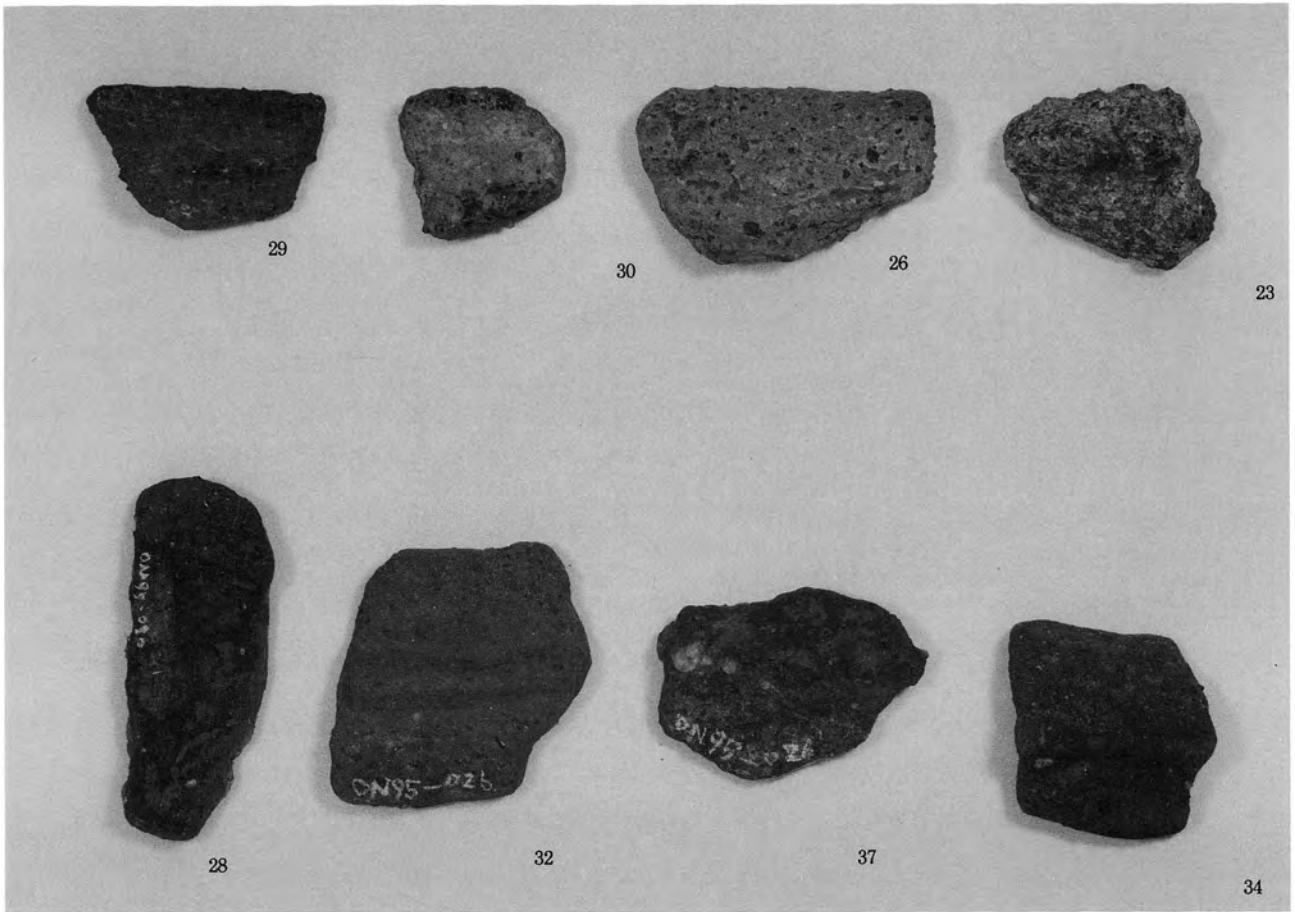


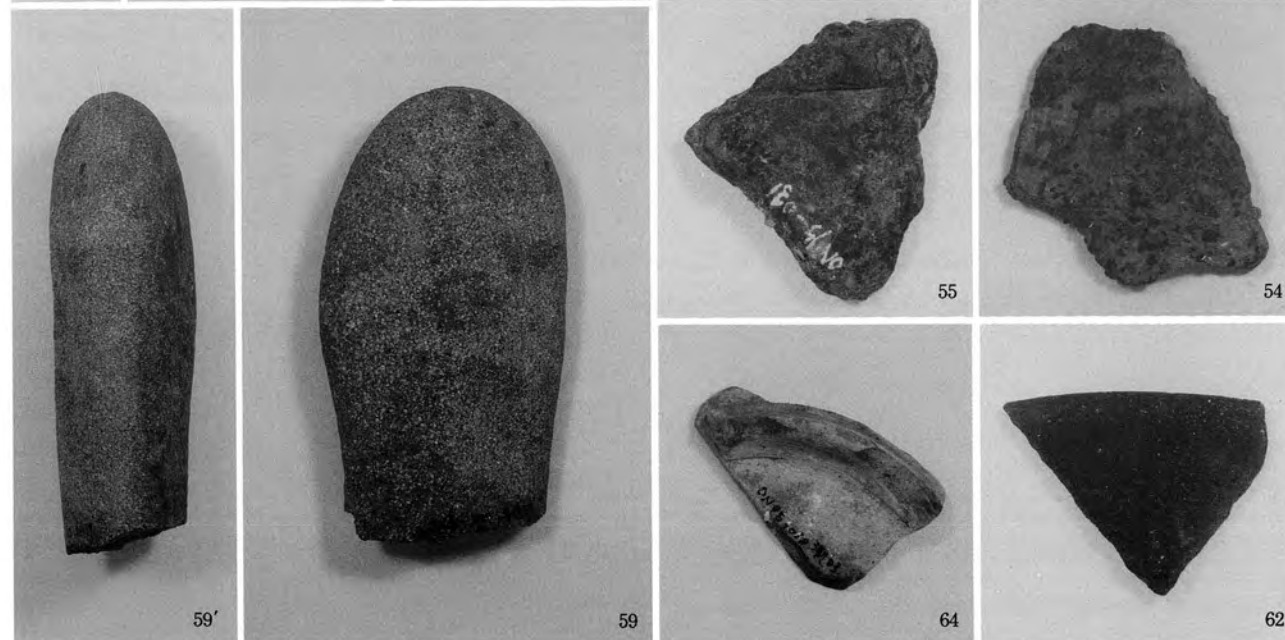
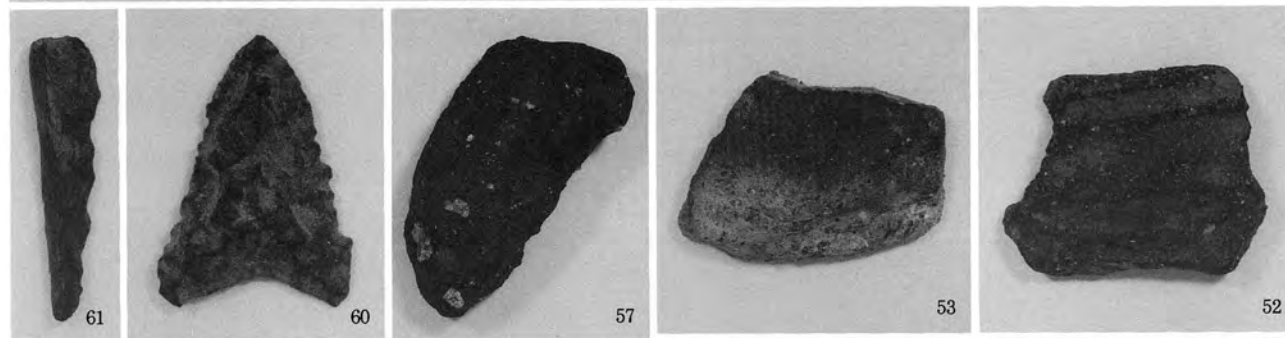
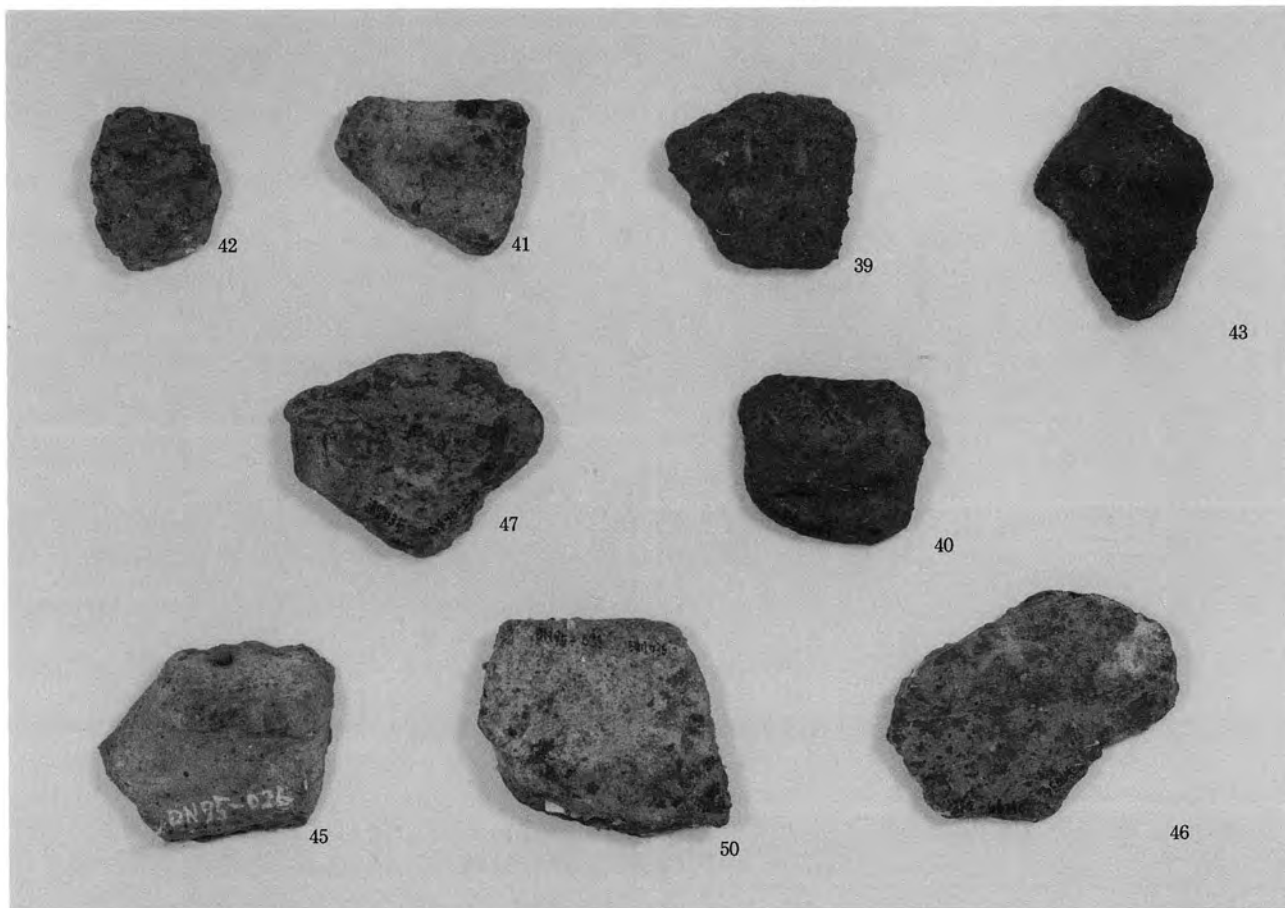
95-2区上層
(北から)

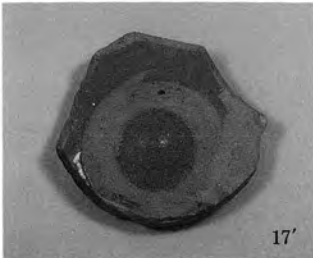
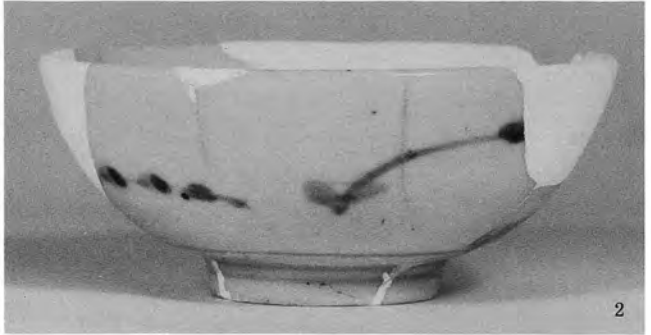
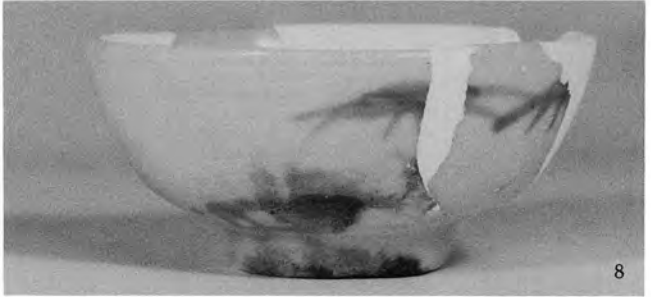
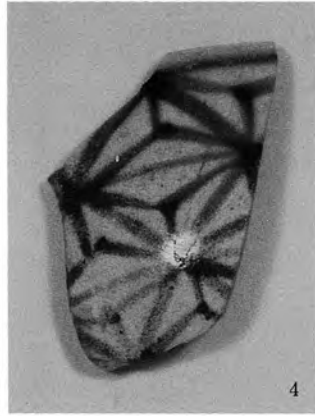


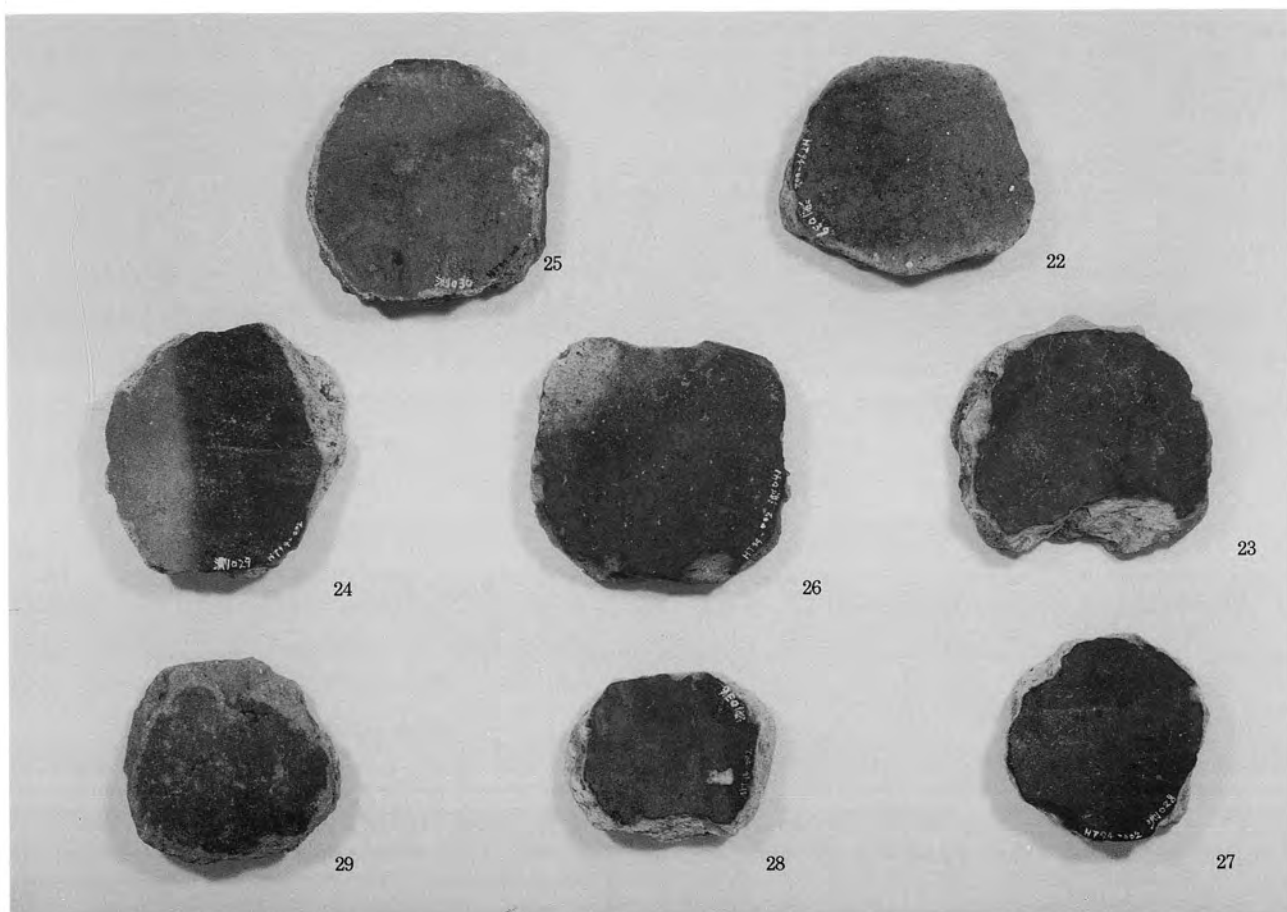
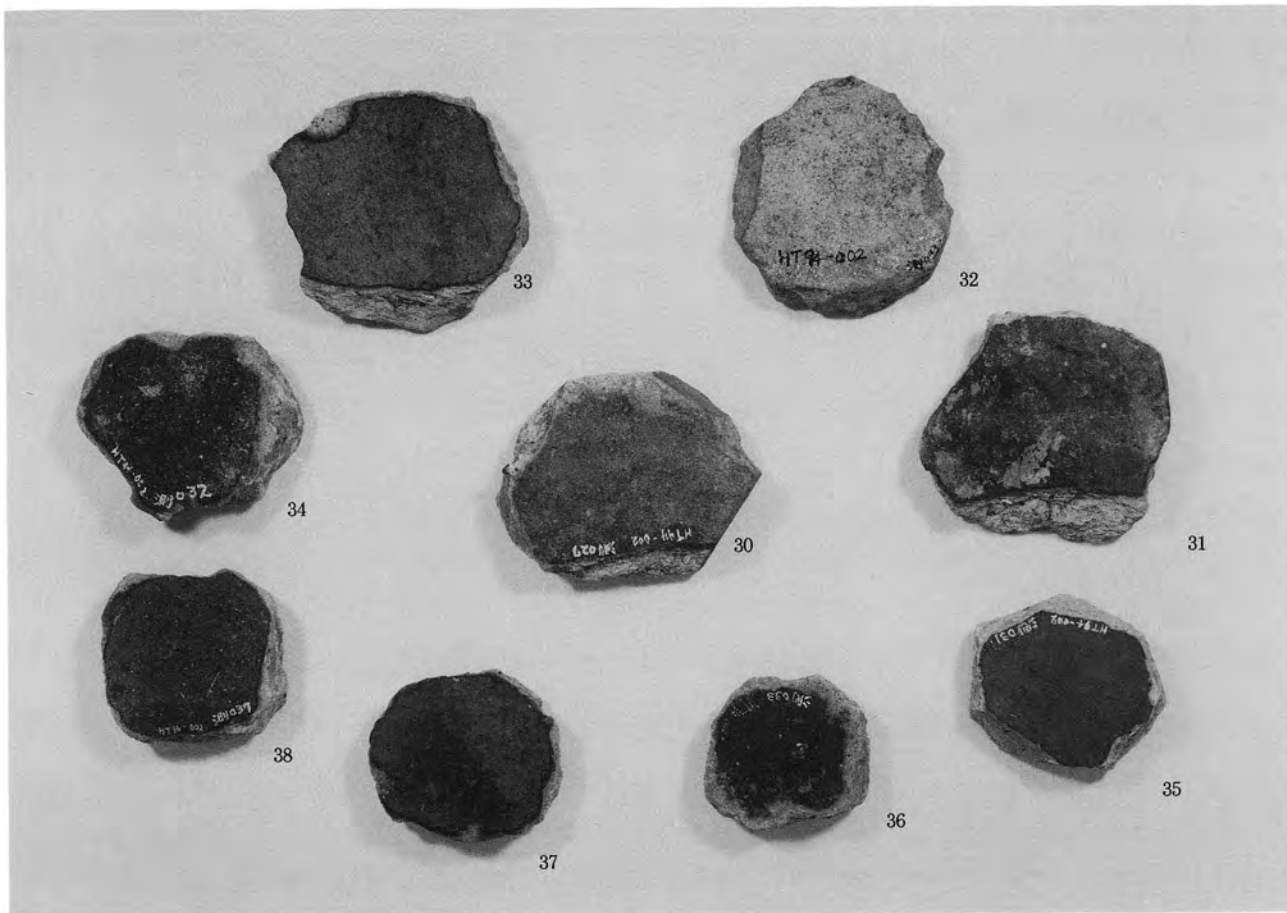
95-2区上層
(北から)

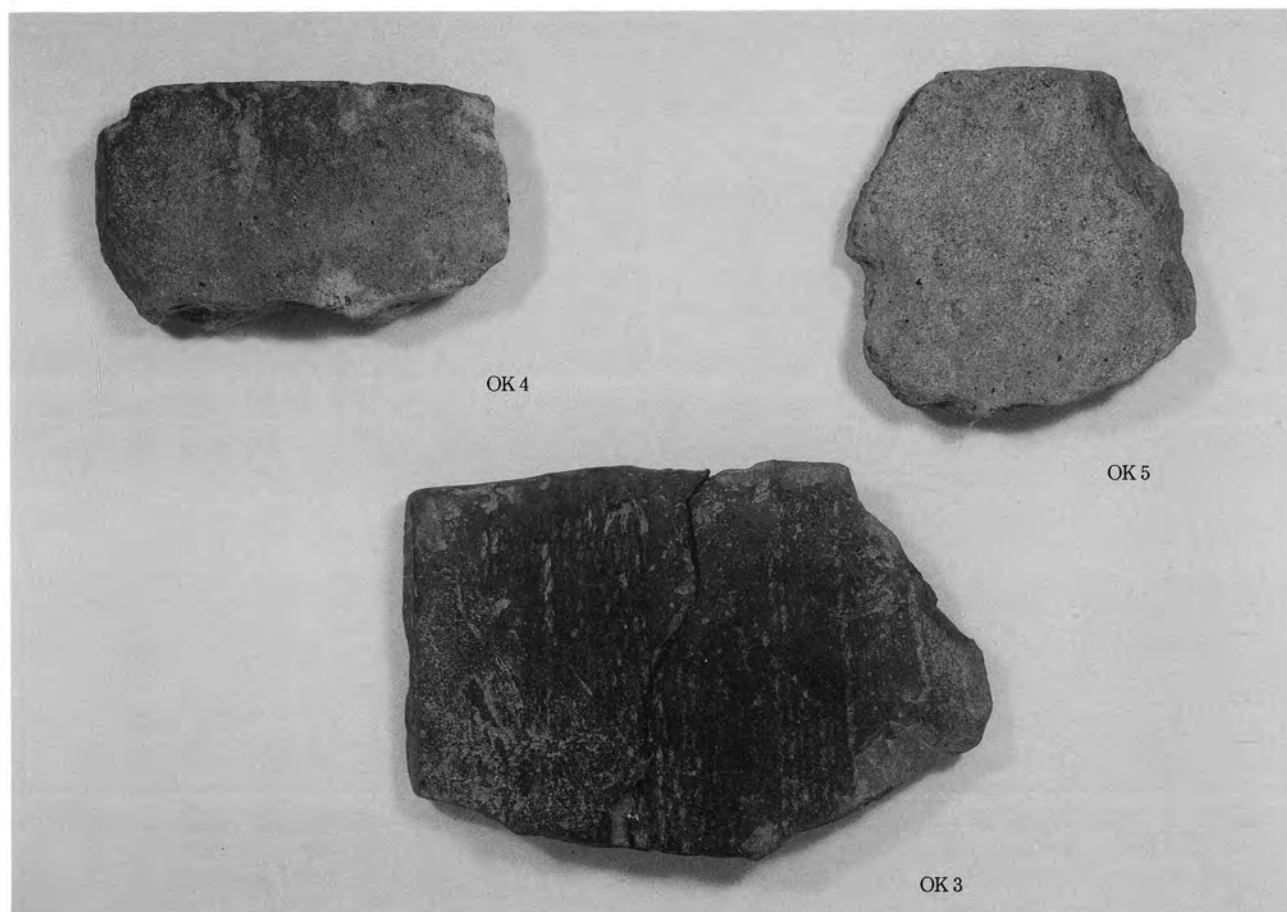
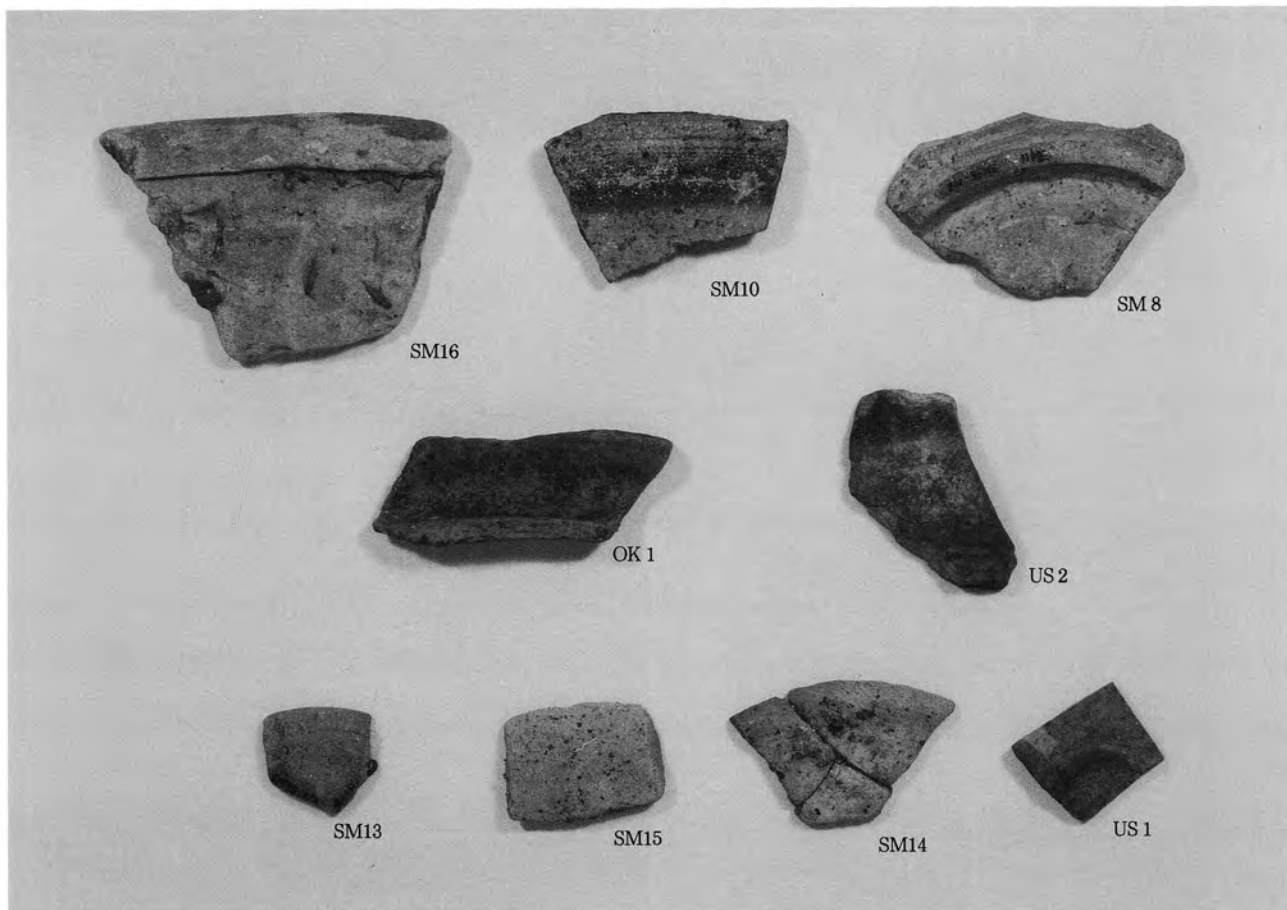


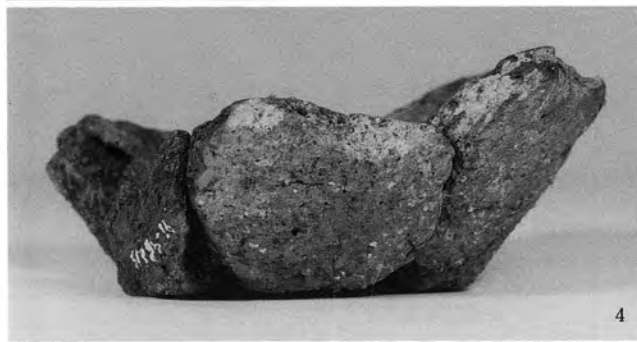












報告書抄録

ふりがな	せんなんしいせきんはくつちよぼくしょ 13								
書名	泉南市遺跡群発掘調査報告書								
副書名	—								
巻次	XIII								
シリーズ名	泉南市文化財調査報告書								
シリーズ番号	第二十九集								
編著者名	仮屋喜一郎・岡田直樹・石橋広和・岡一彦・城野博文・河田泰之								
編集機関	泉南市教育委員会								
所在地	〒590-05 大阪府泉南市樽井一丁目1番1号 TEL.0724(83)0001								
発行年月日	西暦 1996年3月31日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因	
		市町村	遺跡						
おのさと いせき 男里遺跡	おおさか ふ せんなん し 大阪府泉南市 おのさと 男里	27228	ON	34度 21分 30秒	135度 15分 40秒	95-1 199511 95-2 199510 95-3 199506 95-4 199504 95-5 199504 95-6 199512 95-7 199512 95-8 199510 95-9 199510	21 129 2 4 4 4 3 3 4	店舗 プロパンガス集配所 住宅新築 住宅新築 住宅新築 住宅新築 住宅新築 住宅新築 住宅新築 農業用倉庫	
こうだ いせき 高田遺跡	おおさか ふ せんなん し 大阪府泉南市 おのさと 男里	27228	KD	34度 21分 51秒	135度 15分 18秒	95-1 199505	11	宅地造成	
てんじん の もり いせき 天神ノ森遺跡	おおさか ふ せんなん し 大阪府泉南市 おのさと 男里	27228	TN	34度 22分 02秒	135度 15分 25秒	94-1 199502	3	分譲住宅	
はたしろ いせき 幡代遺跡	おおさか ふ せんなん し 大阪府泉南市 はたしろ 幡代	27228	HT	34度 21分 09秒	135度 16分 08秒	95-1 199510 95-2 199508 95-3 199504 94-6 199503	4 2 5	住宅新築 住宅新築 農業用倉庫 住宅新築	
おかなか いせき 岡中遺跡	おおさか ふ せんなん し 大阪府泉南市 しんだちおかなか 信達岡中	27228	OK	34度 20分 51秒	135度 16分 38秒	95-1 199511 ~12	4	住宅新築	
しもむら いせき 下村遺跡	おおさか ふ せんなん し 大阪府泉南市 しんげ 新家	27228	SM	34度 22分 25秒	135度 17分 50秒	95-1 199506	152	公園整備	
うさいだ いせき 兔田遺跡	おおさか ふ せんなん し 大阪府泉南市 うさいた 兔田	27228	US	34度 22分 25秒	135度 18分 38秒	95-1 199504 95-2 199510	5 4	住宅新築 住宅新築	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
男里遺跡 95-1	集落	縄紋～ 弥生	ピット7・溝2	突帯紋土器、弥生土器	突帯紋期の集落の存在を確認。 数少ない平安時代の集落を確認。
95-2	集落	平安	掘立柱建物2	土師器	
95-3	集落	中世	鋤溝1	黒色土器	
95-4		不明		陶磁器	
95-5	集落	近世			
95-6		不明			
95-7		不明			
95-8		不明			
95-9		不明			
高田遺跡 95-1		不明			
天神ノ森遺跡 94-1		不明			
幡代遺跡 95-1	集落	近世～ 近代	土坑2	瓦、陶磁器	良好なシルト面を検出。 瓦製の土製円板が大量に出土。
95-2		不明			
95-3	集落	不明		土師器、陶磁器、土製品、 瓦	
94-6		近世			
岡中遺跡 95-1	集落	中世	土坑2・ピット3	土師器、瓦	集落関連遺構と氾濫原の範囲を確認
下村遺跡 95-1	集落	弥生～ 近世	土坑・掘立柱建物・ ピット・溝多数	弥生土器、須恵器、土師器、陶磁器	本遺跡初の弥生時代の遺構・遺物確認。
兎田遺跡 95-1	集落	中世	ピット1	瓦器	遺跡中心地の初調査。遺跡の中世の成立を示唆する。
95-2	集落	中世		瓦器	

